九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ジャン・パウルの『平和への説教』他翻訳

恒吉, 法海
九州大学言語文化研究院 ： 教授 ： ドイツ文学

https://hdl.handle.net/2324/14890

出版情報：ジャン・パウル　研究書・翻訳書, pp.1-126, 2009-06-26
バージョン：
権利関係：

ドイツへの平和の説法（1808 年）
＊
ドイツの為の薄明（1809 年）

恒吉法海　訳・解題

恒吉法海・九州大学リポジトリ翻訳研究　2
2009 年 6 月 26 日

目次

ドイツへの平和の説法（1808 年）

序言 ---------- 3
Ⅰ　胸の中の小さな戦争 ---------- 5
Ⅱ　新しい侯爵達 ---------- 5
Ⅲ　ドイツ帝国 ---------- 8
Ⅳ　祖国愛　あるいはドイツへの愛 ---------- 9
Ⅴ　フランス人的ドイツ人 ---------- 10
Ⅵ　政治的自由 ---------- 11
Ⅶ　贅沢 ---------- 13
Ⅷ　性の節制 ---------- 16
Ⅸ　利己主義 ---------- 18
Ⅹ　様々な警句 ---------- 19
ⅩⅠ希望と展望 ---------- 24

ドイツの為の薄明（1809 年）

序言 ---------- 31
Ⅰ　歴史と人生の中の神について ---------- 32
　1　小さな薄明かり ---------- 41
Ⅱ　ゲルマン人魂とフランス人[ガリア人]魂 ---------- 42
　2　小さな薄明かり ---------- 55
Ⅲ　戦争に対する宣戦布告 ---------- 56
　3　小さな薄明かり ---------- 69
Ⅳ　政治的葬儀の提案 ---------- 70
　4　小さな薄明かり ---------- 72
Ⅴ　天才達の上級試験委員会の提案 ---------- 75
　5　小さな薄明かり ---------- 78
Ⅵ　侯爵のために、ほとんど無償で知らせる新たな使節団員の提案 ---------- 79
　6　小さな薄明かり ---------- 84
Ⅶ　未来の福音と哀歌 ---------- 85
　7　小さな薄明かり ---------- 94
Ⅷ　金不足と非常予備金 ---------- 95
　8　小さな薄明かり ---------- 100
Ⅸ　宗教の現今の冬至[夏至]について ---------- 101
　9　結論の多韻律詩 ---------- 107

訳注 ---------- 109
解題 ---------- 116
あとがき ---------- 126

ドイツへの平和の説法

ジャン・パウル講演
（1808 年）

序言

この小本が不平よりももっと希望を、政治的見解よりももっと倫理的見解を含んでいるとすれば、この両者によってまさに平和の説法という二重のタイトルの約束を果たすことになる。しかし自分の語ることすべてを信じている者でも、だからといって、自分の信じていることすべてを語るわけではない。

我々は多様な希望を必要としている。希望がなければすでに幸福を享受できないし、いわんや不幸に耐えたり、不幸を癒したりすることはできない。金細工師は炎や金による目の疲れを（この両者は我々がこれまで有してきたものであり）緑のものや鏡で癒す。

一　いずれにせよ希望は恐怖よりもましである。地球の周りを東の方へ航行する者は、一日得する。西へ航行する者は、一日失う。両船員とも同じ年を得るとはいえ、私は東へ行く者でありたい。

過去の苦難がなければ将来の苦難は一層大きなものとなってしまったことだろう。ドイツの昔の鉱山の悪性ガスは点火でより浄化された空気に変化したはずである。従って我々が我々の通洞をどちらに進めるかは、今や我々にかかっている。

何人かの者はこの小品に若干の無秩序や多くの脈絡のなさに気付くかもしれないが、私自身最初にこのことには気付いており、自分がまず企てたことだけに尚のこと気付いていると釈明する。

筆者はこの小品では誠実に考えた。それ故この件はまた若干大目にみられて然るべきであろう。

バイロイト、1808 年使徒マティアの日[2 月 25 日、閏年のため 24 日ではない]

ジャン・パウル・Fr.リヒター

I
胸の中の小さな戦争

戦争がドイツに轟いた。ローマ人達は雷の日を神聖なものとして祝い、雷の落ちた地域は他の普通の大地とは区別された。この意味ではいかに多くの日々や土地が今や我々にとって神聖なものになっていることか。今傷ついた民に行われている不正義は、二つの声を出して天に叫んでいる。軍の半分が大地に沈んでいる長い戦場に行って、まだ大地の上に残っているものを何の遠慮もせずに大地の中に押し込み、打ち倒すがいい、戦争の最中に正義の人間が平和を保つように、逆に平和の最中に戦争を続けることだ、そしてそれでも恥知らずに、征服者が雷天の中から送りつける長く途方もない苦しみを嘆くがいい、汝の短い腕で小さな傷を相手に振る舞いながら。どの罪にも戦争全体が住んでいる、どの火花にも熱情が住んでいるように。多くの外面的に非の打ちどころのない男は、神の鞭[アッティラ]とは、名声の欠如と鞭の握りの欠如の点でしか異ならないのかもしれない。戦争は単に、我々が容易に振る舞う傷の拡大用凹面鏡にすぎないのであり、我々が個々に搾り取る溜め息のメガホン、言語反響ドームにすぎない。

従ってもっと的確にもっと冷静に戦争の暗黒と光輝を目にとどめることだ。我々はしばしば戦争の英雄を単に一群衆の明るい行為からなる星座としてまとめて見る一方、他方またその影絵を英雄の軍勢の行為の汚点からまとめて描こうとしないし、英雄の署名をその民の野焼きに見ようとしない。群衆の名誉ある行為の賛同者によって、常に余りに多くのことが権力のせいとされ、また群衆の不名誉な行為の敵対者によって、余りに多くのことが権力のせいとされる。

II
新しい侯爵達

侯爵達自身が、その後は春になるのか秋になるのか決められる。昼夜等分の日が　ー　つまり温かく果実をもたらす時への進行かあるいは冷たく、葉や果実を失う時への進行か決められる日が侯爵達にとって存在したとすれば、今がその時である。彼らはほとんど全能になるか不能になるかの瀬戸際にある。まずは悪しき転換を考えるといい。ドイツの民衆は、他の民衆よりも習俗や侯爵を大事にしていながら、戦争の地震によってあれこれ王座の者が移し替えられ　ー　忠誠という昔からの強い根は引きちぎられ　ー　敬愛する支配者の損失はより間近の苦痛や喪失によってただ埋め合わされ　ー　すべての見通しや法、高貴さの一般的な動揺が心に伝わってきた。このように交代する指揮棒の下であちこちに蹴散らかされる民衆は、昔祖国によって国父を得ていたように、国父によって祖国が得られなければ、一体どういうことになろう。確かに戦争による王笏の交代は、先の時代侯爵達が互いに国や人民を担保にしたり、あるいはポンドの重さのヘラー貨幣で買い上げたりしていた時よりはましである。しかし今の時代このような状況の感じはより強くなっている。それで孤児の民衆は、ヨーロッパの至る所で兵士として仕えているスイス人とかに似ているというのではなく　ー　というのはスイス人は自分達の背後の山々に祖国を見いだすし、彼らの陣営は単に体育的日曜学校にすぎないからで、　ー　そうではなくて、冷たく利口なエゴイスト達の軍勢に似ていよう。彼らは、フィラデルフィアで持ち運ぶ家

が売られているように、持ち運ぶ祖国や祖国の町、心しか有しないのであり、侵入して増大するエゴを前にして最後の堤防は虫どもに食い荒らされかねないのである。

しかし時代の侵攻はこれほどひどいものにはならないだろう。現今でさえその[ドイツの民衆の]敗北は全くその冷たさのせいとはいえないし、また多くの支配者の温かさのせいといえないドイツの民衆は　ー　木にとって広く固い根があっても、梢の枝が死んだら、何の役に立とう、　ー　この民衆は目立たないという点で侯爵達にとって苔に似ている。これは山々を風化から、山々の上の大きな樹木を大風から守るものである[*1]。 同様にドイツ人の誠実さは、ただ冷たさの中で花咲くという苔との二つ目の類似点を主張できよう、この冷たさは地理学的に解しようと比喩的に解しようとそうである。ドイツは地理学的にヨーロッパの中央にあるように、道徳的にもそうである。それ故正当にも乙女の像ではその心臓として描かれる、一方ヨーロッパの他の部分の多くは単に頭であったり、あるいは拳の腕であったりする。この善良な、名誉ある心臓、これをほぼ、あらゆるヨーロッパの戦争がその大砲で穴をあけたのである。　ー　今や心臓は十分に血を流した。しかしまさにこの状態の時、傷でないものはすべて香油である。そして一般の精神的、倫理的安寧のための立派な改革はすべて、過剰な余計な力の自負の抵抗を受けずに、より容易に受け入れられることになる。ちょうど農夫が夜の露のときや霧のときに播種するのがいいようなもの、あるいは雨のとき花を移しかえるのがいいようなものである。　ー　すると愛国的侯爵は革新されたドイツ人の祖国愛の最初の数年を育てることになろう、ドイツ国民はこの祖国愛をもって多くの戦場や紋章の地を濡れた目で見つめているのであり、自分達の名前を単に凹刻の細工として見いだしているのである。新たな侯爵は愛されるのに何とわずかなものしか必要としないことか。今や侯爵は間近な陰鬱な過去との対比で何と多くを得ることだろう。

ひょっとして恐るべきなのは、大砲が時を告げ、剣が時を示した時の後かもしれない、つまり侯爵が自分と人民に、自分が永遠の戦争布告をとりまとめ、すべての身分を国防軍にし、すべての学校を軍と刀剣の学校に融合したら一番良いことだろうと思い、それで仕舞にはすべてのミューズの鋤や筆、道具が単により緩慢な戦闘機械の連動機、発条(ぜんまい)仕掛けとなり、侯爵自身は大サルタンとなってしまう時のことで、このサルタンの戴冠式と塗油式は周知のようにサルタンにサーベルを掛けることなのである。どこかの君主がそのように考えれば、そのときには永遠の戦争が（というのは講和は単に冗漫にゆっくりと書かれた戦争宣言なので）望まれ導入され、その[戦争の]手段の目的が享受され、そして手段が（戦争そのものに戦いをいどむ鼓舞する理念が欠けると）　ー　倍増されるに違いないだろう。そうなれば最も良くすべての国々は絶えざる国家総動員へと互いに突入するにちがいないだろう　ー　永遠の平和や春の代わりに（この両者はその逆よりも容易にできるのだが）永遠の戦争と冬が生ずるだろう、そして仕舞いには戦争は単に、以前の豊かにする平和を代償に生き延びられるので、もはや何も得るものはなく　ー　生き延びられなくなることだろう。

この前提は制限することも可能で、通常の主張、戦争そのものが勇者や英雄を生むと　ー　このように戦争はもっと主張できよう。　ー　しかし常に二つの戦う民族は互いに戦争の強化力を分け合っているので、共有する強化力よりも何か別のものが勝利を決定付けなければならない。従ってこれは以前の平和の中にあり、今や圧倒的多数あるいは理念を

生み出したかで、後者のみが本来勝利を収めるものである。

同様に逆に平和自体無力なものではない、ちょうど長いことそのタボルの山々やテンペの谷に住んできたスイス人の証明しているようなものである、あるいはスウェーデン人、更にはもっとデンマーク人、あるいは老兵(ベテラン)のように戦ったフランス人の新兵達の証しているようなものである。　ー　偉大な英雄達[1]はしばしば最初の出征のときよりも最後の出征のときに臆病げに振る舞ったものである、最後のときはただ名声を主張するだけであるが、最初のときは名声を得なければならなかったからである。所謂戦場での舞い上がりは痘瘡と同様にただ一度かかるだけである。

他面では戦争だけではいかに強健にすることが少ないかは、常に臆病に中世を戦ってきたイタリア人を見ると分かる。そこの戦場では[2]、ロバートソンによると時に、かつてスパルタ人が逃げ出しただけの数の人間が留まったそうで　ー　つまり一人だけであり、あるいはまた先の世紀のフランス人を見ると分かる。彼らは贅沢の点でも勇気の点でも現在のフランス人に一世紀遅れをとっていたのである。

戦争が鍛えるとすれば、平和は、十分に北方や十分に貧乏があるならば、すでに絶えざる持続のせいで、もっと強く鍛えることができよう　ー　戦争にはいつも夏と冬、断食と過食、断食日と謝肉祭が交互にくるからである。そして単に戦争の鍛錬のみが決定的なものであるならば、どの北方の民、どの貧しい民も勝利する民となろう。そして君主たる者が、温かいコルシカ島からの勝者、並びにその同様に熱い人々に勝利するには、ただ夙に行われてきたことをしさえすればいい、つまり強壮にする北方をそれぞれの兵士の体に上着を通じて集めることで、空腹を氷点、焦点とし、そして三分の一凍えて、半分飢えた者達の先頭でこう言うことである。運を試して、まだ存命の者に襲いかかれ、と。

しかし最後に勝つものは何か。理念である　ー　ちょうど内気な母親の中で母性愛が雌ライオンとなるようなものである。　ー　理念は祖国愛であろうが、自由への感覚であろうが、あるいは名誉、宗教心、あるいは自ら自由あるいは祖国全体を体現している偉大な男、精神でもって世界、精神界を率いる偉大な男への恭順であろうがかまわない。

カエサルとかフリードリヒ、ナポレオンといった守護神は、単に人間を英雄として退職させるために募集するものである。カエサルの第十軍団[*2]は、他の軍団同様偶然に徴募されるが、突出して勝利する、単に自分達が第十軍団と知っていたからである。守護神の指揮棒はミネルヴァの棒の逆の奇蹟を行う、　ー　ミネルヴァの棒[3]は老ユリシーズ[オデュッセウス]を若いユリシーズに変えたが、　ー　先の棒は若ひげの青年を老兵に変えるのである。ある国家にしかるべき期間このような救世主が与えられるならば、国家のどの常備軍団も救世主の中に眠る軍団で省かれることだろう。国家は平和の他案ずることはなかろう。

しかしこのような王座のパラディオン（支配の保証）はめったに天から降りてこないので、民衆自身が勝利をもたらす理念のために形成されなければならない。これが生ずるのは単に、民衆が経済的目的、征服の目的、あるいは栄光の目的よりも倫理的目的のために支配され、教育されるときである。勇敢な鍛錬されたドイツの民は精神的自己平和のための教育より他の戦争への教育をほとんど必要としない。この民は、最新の自己決闘でその力を再び示しており、交互の征服で緊張し、同様にまた再び象との類似性を示している。この象はドイツの紋章の動物となるべきものである。というのは象は向きを変えるのに不

器用で、素早く真っ直ぐ行きながら、大いに飲み、思慮深く、好んで荷を運び、自分の付添人を愛し、子供達を大事にし、それでいて戦争ではローマ人を押しつぶし、　ー　飼い慣れたものとして自由な象を捕らえる手伝いをするからである。

*1　De Luc の『物理学的書簡』、第 1 巻。
*2　ヒュームによるとピカルディ［フランス北部］の有名な連隊も同様に行っており、まさにそれ故有名である。

Ⅲ
ドイツ帝国

我々ドイツ人皆ほどドイツの帝国憲法に反対意見を述べた者はいなかった。ただ後になって我々は、憲法が姿を消したとき、もっと憲法と和解した。そして皇帝や教皇や大学人同様に、死者に対して通常の賛辞を述べた。しかしすべての力強い国家憲法は　ー　ギリシア憲法、ローマ憲法、イギリス憲法は　ー　こうした侮辱的自己批評、こうした自己毒舌をドイツ憲法同様に有している。ちなみに人間は、特に政治家は、廃墟あるいは新建造が見えるまでずっと国家の変化、改造を望むものである。それから彼は新しいものを罵り、そして最新のもの、つまり古いものを願う。しかし衰亡にある世界は生成中の後世を喜ぶことができようか。古いワインは、新しいワインが花盛りの状態になったら、鬱々とならないだろうか。　ー　古い時代の賛辞への非難は、個々の老人同様に老いた政体にも妥当しないだろうか。　ー　戦争は我々の憲法の姿を消し去るよりももっと多く見せることになった。古い名誉ある憲法がまだ滅せずに存在していたのであれば、まさにそれは存続していたであろう。というのは戦争は、民衆のこの鋭く刺すような傷のさぐり針は、酩酊と狂気に似ていて、これは（セネカによると）単に罪を顕現させるが、生み出すものではないからである。従って、ドイツ劇場の舞台カーテンが引き上げられるというよりは、焼かれて以来言えることはただ次のことである。古来のものを我々は我々の戦闘よりも先に失ってしまった、しかし新しいものは毒というよりは解毒剤であって、ツィンマーマンによると医師は軍司令官の性を多く有しなければならないとすれば、軍司令官は医師の性を有していたということである。衰亡の憲法の中では衰亡の縦坑の中と同様にすでにこっそりと新しい金鉱脈がまた付着していたのである。その中では我々の世界市民的センスと我々の文学は最も素晴らしいものである。

しかし真の古代のドイツの帝国精神がまだ保持されている所　ー　例えばハンザ同盟の都市では、　ー　この精神的帝国宝石を改革の手が敵対的に触れて欲しくない。残念ながら常に戦争の雷雨が襲いかかる最後のドイツの樫の木からは野生の曲がった枝を取り除くがいい　ー　ナポレオンとか能力のある者は、最後のドイツ人[(4)]を救い出し、残りのドイツ人を陶冶して欲しい。

Ⅳ

祖国愛　あるいはドイツへの愛

今ドイツ人はドイツ人の中でドイツ的なものを以前よりももっと愛している、ドイツ人はまだ回教徒のようにその時の紀元を預言者の逃亡[5]の時に置いたことはなかった。シェークスピアの退場する人物の最後の数行[6]のように、我々は遅ればせながら、調子[韻]を互いに合わせている。しかし個々のドイツの民族が互いに異なっていたとすれば、個々のギリシアの民族、イタリアの民族もそうであった。それ故、我々の愛と熱情の含有に関係なく、我々は類似性を告白してよかろう。しかし現今のようにドイツの連邦国家が　ー　以前のドイツは亀のように二つの対立する紋章、プロイセンとオーストリアの紋章の間を動き、占めていたが　ー　天体のように内部の方に重心を形成したばかりでなく、外部の方にも重心を有するとなると、あるいは別々のソシエテ諸島、あるいはせいぜい連合した比武仲間となり、平野での一つの立派な[スイス]同盟とはならない、あるいはナポレオンと永い平和によって守られた一つの侯爵同盟とはならないとすれば、どのような心地よい類似性、どのような弁解も潰えてしまう。ドイツ人は炎の戦勝者にはなはだ遅れをとってはならない。昔の硬直が新しい芽の月に蘇ってはならない。

しかし話を戻そう。一七七〇年から一七八〇年にかけて、我々は　ー　フランスかぶれが片付いた後　ー　若干のイギリスかぶれともっと多くのドイツかぶれを有していて、自分達をもっと高く評価していた。フランス革命の間我々は自分達をたいしたものと思おうとせず、こう言っていた、残念ながら我々はこの程度で、半分奴隷だ、と。後に我々は革命の上に高く舞い上がった。最近の戦争以来我々はまた好んで共通の名前フランク族を共有して、歴史から、フランスの大半はガリア人ではなく、移住したゲルマン人であると思い出している。　ー　全体にドイツへの愛が中産階級と民衆から消えたことはない。民衆はその愛を生き生きと心の中に保持していて、中産階級はそれを印刷紙上に示した。ただ最上級の階級のみが時々その愛を手放した。それ故まさに我々の愛国主義はハンガリー人の金とのかかわりのようなものであった。ハンガリー人は金鉱、銀鉱を有するが、ただほとんど紙幣のみを使用するのである。

ヘルツベルク[7]は学的論文の中でドイツ人達がすべての純然たるヨーロッパの諸帝国を築きそこに住みついたと証明した（これは後にドイツの侯爵の皇女達がすべての王座の上でもっと素敵に、もっと血を流さずに反復したことで、ドイツはテルス[8]同様に神々の母と呼ばれていいことになった）。従ってヨーロッパにおけるドイツの戦争は常に内戦である、もっともより高い意味では人間の地上の戦いはどれも国の人々同士の内戦である。

国民は単に大衆を得意に思ってよく、天才達つまり例外を得意に思うことはできない。次第に腕や目と共に上がってくる勤勉の町は、個々の星形勲章を有しなくても、温かい幸運の風が何らかの天才[守護神]の花粉あるいはフェニックスの灰を生誕のために運び入れるどこか別の町よりももっと真の名声を要求していい。人はどこにでも、例えばベツレヘムに生まれる可能性がある、しかしどこでも養育されるものではない。天才[守護神]の保持は、神学でいうように、第二の創造である。かくて美的再生の町ヴァイマルは四人の偉大な詩人[9]の生誕の町という栄誉を有する、同様にイエナ[10]は何人かの哲学者の産院という栄誉を有する。

個人ではなく、ドイツの大衆が、その国民的栄誉、国民的愛の基礎としているのは、政

治的に何であろうか。　ー　二つの異なった国民とは何かとても異なったものである。というのは、我々は　個々人を容易にそれぞれの勝利する全体へと編み込む個人的栄光へのフランス人的熱情を有することなく、また自立した自由というイギリス人的反抗心を有することなく、そしてそもそも岩を爆破する他の国民のあの火縄を有せずに　ー　我々は、申し上げるが、まさにそれ故、両目を閉ざして、ヨーロッパについて自分の目しか感じないということはできないからである。我々は我々の視線を我々の力同様制限することはできない。我々ができるのはただ、大衆の光輝を断念して、誠実さと実直さという昔からの、詩と生活の中ですべての国々や世紀を貫くドイツの属性のために生き、汗をかき、死ぬことである。というのは単に静かな波の立たない魂にのみ、法は映し出された太陽のように最も純粋に明らかになるからである。我々の自由への愛は単に誠実さへの愛であって、栄光や略奪を求めるものではない。そしてこの感覚が我々の中で殺害されないかぎり、我々は隷属を憎み、祖国を愛することだろう。誠実さはドイツ人を　ー　本来は人間を　ー　結びつけている、世界と自分そのものが頼りとしているこの絆を断つ者に災いあれ。　ー　そして歴史が「誠実な者」という新たな添え名を与えることのできる侯爵[11]に栄光あれ。歴史は十年前から、特に二年前からこのことができると私は信ずる。

V
フランス人的ドイツ人

恐れるとすれば、以前のドイツ人的フランス人の代わりに我々はフランス人的ドイツ人になってしまうだろう。私はこれを恐れと呼ぶ。というのは消滅させられた国民は他の国民や、ましてや消滅させる国民で置き換えられてはならず、いわんやドイツ国民は置き換えられてはならないからである。私はしかしこの恐れを全く抱いていない。一面性は対立する一面性で折れてしまう、いやこの対立する一面性へ消えてしまう。しかし我々多面的なドイツ人は、夙にすべての民族と精神的に交流していて、彼らの気まぐれや奇想、細部[主題の外部]からは我々の諸力の均衡以上のものを受け入れずにいながら、昨日来すでにより親密なる民族とはただ或る別の接触に陥っている。これまで、外国人と敵とが同じように見えていた古代の民族とは違って、我々にとって外国人と友人とは近いものと思えていたとすれば、逆にむしろ今からは、多くの模倣が、以前は恣意と遠さのせいで倍加され、甘美なものに思われていたのに、フランス人の地元(じもと)的な近さのせいで苛立たしいもの、嫌なものとなることだろう　ー　我々は地元的なもの間近なものを模倣することは好まないからである。　ー　いや、フランス語は共有の財産に近いものとなって、仕舞いには我々の宮廷ではドイツ語が話される事態になるかもしれない。フランスとドイツを再び二つの帝国に分離した八四三年のヴェルダンの条約が精神的に更新されることになるかもしれない。

しかし何のために二つの偉大な民族のこの厳しい対立があるのか。これまでドイツ民族は金メッキされた銀の棒のように次第に狭くなる穴の中を通されて、洗練されていた。しかしまさに太い棒が、長く薄く引き延ばされてもまだ金メッキを保持しているように、我々は多面性と誠実さという我々の金を保ってきた。それ故、我々はすべての民族と精神的財産共有を有しているので　ー　そしてフランス人が陸の王者、イギリス人が大海の王者

であるように我々はこの二つとすべてを含む大気の王者であるので、　ー　そのせいで我々が、粗い諸民族の汞和剤となるために、ユダヤ人やイエズス会士、鉄、それに我々の誠実さを共有する動物のように、すべての国々や気候の下にばらまかれるのは当たり前のことに見える。いや、昔からすべての敵意ある民族が戦争を仕掛けてドイツの帝国へ、さながら混汞工場へのごとく介入してこなかっただろうか、この工場は同化によって、つまり平和によって諸金属を分解するのである。

すべての歴史の中で教養ある民族は無教養の民族を解体し、勝利を収めようが敗北しようが頓着せずに、ポリープのように自らの裡に変化させるとすれば、　ー　ここの二つの教養ある国民の間では一つの国民的平和的解消という歴史的可能性は見えない。

我々の文学的対立、独自性というものは我々をまた政治的国民的対立、独自性として存続させるに違いない。勿論（残念ながらここ数年明らかなように）フランス民族が教養や自由な生活の点でいまだに多くの粗野[*1]、組合(ツンフト)的硬直に停滞しているドイツ民族に先んじている事柄、これを中産階級や学者階級のドイツ人はまたその教養の多面性と深さで取り返すであろう。我々が文芸や誠実さでは浮き彫りであり、政治と生活の敏活さでは沈み彫りであって　ー　ちょうど逆にフランス人は後者では浮き彫り模様の宝石であるけれども、　ー　対立する長所を近づければこの長所の向上と和合になるかもしれないのである。

*1　さながら寓意的に、ドイツ皇帝の戴冠服ではすべてのダイヤモンドが磨かれたものではない。

VI
政治的自由

政治的自由より宗教的自由については最も確かなことが言えよう。時代の分別力、偉大な例や法の圧力や光輝、光で覆われたすべての国々が、それに宗教的炎の欠如でさえ、宗教の明かりに昔ながらの発展を保証している。今日この恒星を吹き消しても、恒星は尚数年我々の夜の中、輝くであろう、その光はその間途上にあるからに他ならない。

これに対して政治的自由はどうであろうか。暴力はせいぜい孫達を盲人にするだけであろうが、しかしきっと父親達を従僕にするであろう。そして射殺の判決を受けた者のように胸を二つの銃が狙っており、頭を狙っているのはただ一つの銃である。　ー　しかしここでの心配は平和への戦争の影響を平和そのものと取り違えていないだろうか。戦争からは、暴力や強者の不当な権利の籤引きからするように、容易にこうした恣意的暴力の部分を平和の始まりの中へ習慣的に組み入れてしまう。余りにしばしば和平条約そのものが単に最後の戦闘となる。オリーブの葉をもった鳩はしばしば二羽の鳩に似ていて、これをイギリスでは処刑の後、親戚の者達に、縁者が恩赦を得られなかった印に放つのである。戦争はその暴力の活動によってしばらく良心の動きを偽造してしまう、地震が磁針を混乱させるようなものである。しかし偶然の風が単に蜘蛛の巣の最初の糸を張り付け、定めて、そしてその後これを基に蜘蛛は他の糸を全く幾何学的に結びつけていくように、暴力が基礎付けるものを法はただ維持し、保護し得るだけである。セネカが神について自然の法を

考えて言ったこと、つまり「一度命令したきりで、永遠に従う」は神の代官達についても妥当する。ベロナ[戦の女神]とウルカヌス[火の神]の神殿はローマの市壁内にあってはならなかった。幸い、すでに若干の新設された国々では平和が次第に戦争から浄化されて、侯爵達は正義同様に野蛮に振り回された剣を収めた後、より静かな手で[正義の]秤を保っていると言えよう。

スイスは官房や内閣にとって、スイス式酪農ではなく　ー　オランダはオランダ式酪農ではなく、ドイツはドイツ式酪農ではなく　ー　一国は一国式酪農ではないので　ー　皆自ら、戴冠の野蛮な猟師に対して立ち上がり、この猟師を追い払い、従うことはないだろう。フランスでは恣意的に押さえ込むとさながら全国民が炎へと燃え出すように、そしてこの血と涙と印刷用黒インクで鋭く刻み込まれた自由の文書は消えることがなく、どんな火のもとでも隠顕インクの文書は再び浮き出てくるように、政府が人民を憎しみに駆り立てるとすべてが再び現れることだろう。急速に圧縮された大気は燃え上がる。饗宴のプラトンによれば愛する者は誰でも詩人になるように、憎むときも詩人となる　ー　それも悲劇の詩人となって　ー　そうなると聖ペテロ鎖の記念日がやってくる。

しかし精神的に偉大な者、精神的に侯爵たる者は永遠に法の下に戻ってくる。フリードリヒ大王の平和はその戦争とは光輝の他類似性はない。カエサルは帝国を征服したときよりも合法的に支配したことだろう、フランスは法に支配されており、ナポレオンにより守られ、証明書を与えられている。守護神というものはスパルタやタキトゥスのドイツに似ていて、それに新しいイギリスにさえ似ている、これらは外部に対するよりも内部に対してより厳しい合法性を保持している。無気力は無法を好む。というのは弱さではなく、力のみが常に同じことを欲するからで、同じこととはまさに法の謂である。いやアリストテレスの（その政治学の）二つの主張[12]から、つまり一つは、然るべき時に怒ることのできる者は、支配者に生まれついているという主張と、もう一つは、最大の幸福の所有者はこの幸福を単に最大の自制で耐える、それ故楽土には単に最も正しい者のみが入れるという主張、これらの主張から結び目を解くヨーロッパの機械仕掛けの神に対する予言を行うことができよう、それは予言として　ー　遅すぎなければの話であるが、つまりこの機械仕掛けの神あるいは機械仕掛けの親方は幾つかの最新の歩みで、自分は平和しか必要としない、平和を予想以上に将来維持して、フリードリヒ唯一王を二度目の手本とすることにしようと告げたのである。戦争においてはフリードリヒ二世は唯一王ではない。平和においても唯一王であって欲しくなく、凌駕されるのみならず、到達されて欲しいものである[文意がジャン・パウル的に無頓着]。　ー　そうなると世界は幸せで、世間の驚きは弁解されよう。

政治的自由のためには出版の自由が必要である。この点でも戦争は、これは出版、新聞、手紙、郵便、これらを押さえ込んで自らを守らなければならないが、これらの緊急の措置を他の悪徳同様平和に持ち込んではならないだろう。雪崩の落ちかかっている下の方では、雪崩を引き起こしかねない大声はすべて禁じられる。しかしすべての路上で、平和の平原でも黙っているべきであろうか。国家はまず、解剖の許可を得る前に、死ぬ必要があろうか。国家の病状報告によって解剖報告を予防するのがましではないか。それとも、市民の手を縛る国家の敵がまず国家の市民の舌を解放すべきであろうか。

昔とても言論の自由な諸国家では、まだ十月十四日以前[13]は、多くのことをあの避雷針

について、その錆のためにまさに雷を導くことになった避雷針について、話すことができたのではないか。

ちなみに現在余りに多くの政治的明かりがあって、侯爵はむしろ明かりをすべて消したいほどである。侯爵は利点を考えると選択肢として全面的（不可能であるけれども）サルタンと僧侶の闇か、フリードリヒ二世の明るい自由かを有するのみである。単なる惨めな格子状の中間の明かりはバツコ[14]［Baczko］の身体上の盲人についての見解を思い出させる、つまり（彼によれば）その盲人のうち若干微光の見える者は全くの盲人よりももっとおぼつかなく歩き、学習することが少なく、独り立ちすることが少ないそうである。今は真理に対してはただ宮廷への出入りを禁じ得て、町や国への出入りを禁ずることはできない。黙した唇の背後では歯ぎしりがなされるであろう。本や著者を鎖につなぐことはできても、表情や思考をつなぐことはできない。先のようなことをすれば、明かりとして穏やかに静かに辺りに注がれた同じ素材が凝縮して炎となり、それが勢い良く猛威をふるい、引き倒すことだろう。

一体願わしいこと、希望することは何か。第二のシュレーツァー[15]が出現して『国家新法』を書くことであり、第二のフリードリヒが出現して、諷刺をより読みやすく掛けさせることであり、ハノーヴァーとマルク地方が革命の最中どのようにふるまったか　ー　つまり冷静にふるまったことを人々が再び知るようになることである。

Ⅶ

贅沢

新時代は、旧時代を征服したある敵に対して、旧時代そのものがこの敵を武装解除させたので、それだけに一層恐れるべきである。これは旧時代に対して　ー　金を差し出さなければならなかった贅沢である。零落は、個人の場合と同様に、それ以上になお民族に対して、貧乏が後押しするだけの分の損害を与える。貧乏は贅沢をその良き子供もその悪しき子供も共に同時に閉め出す、零落は悪しき子供を通じて父親に取り入る。しばらくの間ドイツ人は　ー　その例が現れるだろうが　ー　不機嫌や金不足のせいからでさえ浪費することだろう。人は何かを得たときにのみ最も好んで節約するものである。金持ちのけちん坊は、その財産を半分取られると、ふしだらなその相続人に姿を変えやすい。財宝を節約することは、現在を犠牲にすることであり、浪費することである。しかしこれへと督励するのは案じられる未来ではなく、希望のある未来である。

軍税も奢侈禁止法の一つである。しかしすべて失敗である。我々の現在の半分の給料に基づく贅沢は全額の給料に基づく贅沢のすべての倫理的欠点を、つまり自他に対する背信、軟弱、曲従、金銭欲等をもたらす。更にその他の偶発事は贅沢の毒をもっと濃く煮立てないだろうか。例えばある著名な拡大された国［フランス］の例、殊にその首都、我々にはロンドンより身近なので　ー　すべての戦争の後に生ずる個々の成金　ー　新しい国家施設のしびれるような餌　ー　王座の華美というもので、この華美は、これを世紀の諸理由から選んだ世紀の勝利者に対して、この勝利者と理由を同じくすることはなくても、最も容易に真似すべきものとなっている。この華美に関しては、守護神が華美によってその従者と区別されようが、アッティラや卿やフリードリヒ二世のように質素さによって区別され

ようが、守護神にとってはどうでもいいのであり、その精神的光輝が外面的光輝の言い訳にもなり、代わりにもなるのである。しかしながらこうした影響の恐れは、我々にとって例えば贅沢な町カプア[16]、つまりロンドンは余り害とならないし、中世では王座の無法の華美があっても、だからといって華美禁止法が更に必要とはならなかったと考えると、弱められることになる。殊に更に二種類の贅沢を区別すると弱められる。民衆の贅沢は単に見かけ上のものにすぎない。というのはそれは生計や発案との同じ享受の歩調に他ならないからである。イタリアや中国の百姓の場合絹は蚕同様贅沢ではない。それに民衆の贅沢は無意味な微光や他人の意見よりも若干の粗野な充満を求めるものである。民衆は贅沢を日曜日のように、いや単に日曜日の時のように楽しむ。従って平日の強壮剤として健康な間隔をとっており、この平日がまた対比によって贅沢に味付けをしているのである。

しかし何と別様に高い身分の贅沢は仕事の結び目[難題]よりも生活の織物そのものを解いてしまうものか。この贅沢は、空想の満ち足りなさ、果てしなさと共に、また全能の他人の意見と共に、無限に交代しながら追い求めるもので、この過剰の泡は、民衆の鯨飲のようには、より快活に、より強壮にすることはなく、より渇き、より疲れて、より陰気なものにする。　ー　これは民衆の贅沢のように、過剰から出発せず、まず過剰を追いかけ、貧しくなり、山と谷を等しく乾燥させて、最も高い身分と最も低い身分とを貧しくさせる。より陽気な時代においてはハンザ同盟やオランダ、ドイツ中世の贅沢が、様々な身分ではあれ、自らの過剰を育てて他人の過剰とするこのような民衆の贅沢にすぎなかったとすれば、現今の高貴な身分の贅沢、空想の過剰な子供、渇きと飲み物双方への渇き、食料と胃剤それに料理見本への同時の食欲、こうしたものが民衆の間にその相対的な貧しさを真の貧しさとして広め、ばらまいている。そして金を時や血のように浪費するまさにこの世紀が出現しており、徳用スープ、徳用ランプ、徳用ストーブ、徳用ベッドの象徴的調度を備えている。ラムフォードのスープ[17]がすべて、宮廷の台所で調理され、貧民施設が長者施設の償いをしなければならない。

しかし君達高貴なドイツ人はこれに対して、つまり自分達自身のために何をするつもりか。　ー　これに対して何か正しいことを有為に欲するならば、今これを最も易々となすことができよう。というのは高貴な身分の贅沢は、享楽の贅沢と違って、本来ただ他人の評判[舌]を求めており、商人の神メルクリウスが犠牲の動物の舌を求めたようなものであり、ちょうど徳操が他人のために不幸になりたいように、この贅沢は単に他人のために幸福になりたいので、普段他人の意見をとても気にしているものは誰でも今やこの他人の意見そのものが助けとなろう。社会に入っていくには社会そのものと一緒に入るときほど容易で制限を受けないことはない。かつての虚栄心の強い[フランス革命時の]亡命者達が証明しているようなものである。今や君達が自身に課す奢侈禁止法はすべて、各人のための各人による静かな法である。君達は、贅沢の毒を枯れて病んだ国家と共に立証している時代、その上君達にイギリスの否定的黄金海岸を封鎖しているこの時代、以前は購入して得ていた花冠を欠乏によって得ることができないのか。

すべてのドイツの社会が　ー　言葉の目的よりも高い目的のためのドイツの社会が　ー　より高貴な救世主の教団が、蘇って、歩調を合わせて、アメリカのシンシナティー協会[18]を肉体や部屋の調度の重い運搬具を欠いた例で反復し、特に貪欲な家具の贅沢からは身を離して　ー　ただの歓喜の太陽に身を置き、見せかけの惨めな幻日、この悪天候を予言す

る幻日を単に大気圏に属して天には属さないものとして蔑むに当たって、今を措いて容易な時があろうか。　ーー　いやはや。単に喜ぶだけで、そう見せかけないとすれば、人生は何と廉価なものであろう。何と他人の意見は自分の意見よりも日々金や罪を要するものか。

贅沢の、引き裂くような猛獣を押さえることは個々人では無理で、ただ大勢でなければならない。侯爵も、憲法そのものにスパルタ的非常予備金の造幣局がなければ、華美禁止法を出しても大して豊かにならない。君達は皆予見できようが、国家のこのカリエスは、決して止むことがないので、君達が、自分達を真似することのないよう、若干の教えよりもましなものを何か講じなければ、そして禁欲教団によって子供達により劣等な大勢の逆の例を見せなければ、なおはるかに君達の子供達を食い尽くし、骨抜きにしてしまうに違いないのである。しかしこれまでのところ君達は自分達を真似るなと禁ずる代わりに、まだそれどころか哀れな子供達に両親の喜びの早朝の享受を与え、そのことによってそれに対する将来の反吐と、もっと大きな喜びへの渇きを押しつけて、真似るよう命令し、刺激を与えてきたのであった。子供達と両親との王座と商人の財産共有（例えば舞踏会や、流行の衣装スタイル、衣装の流行への関与）はよく両親の許で見られるように単に現在の毒殺であるばかりでなく、将来の毒殺でもある。というのは両親の贅沢はどれも子供にあっては倍加された贅沢になるからで、それは子供にあってはまだ現在と夢の双方に満ちた過度に密な蕾の性質を有するので、単に半分の給金、半分の祭日に置かれさえすれば、両親がその全部の給金や祭日で有するよりも多くを有することになるからである。何故かくもしばしば授与は単に仮装した略奪であり、多くの誕生日のプレゼントは聖なるものの窃取なのであろう。

先の方で民衆について妥当したことは、それ以上に子供達について妥当する。胃や隠者の贅沢とか享楽の贅沢はより有害な贅沢とは言えない（というのは我々の先祖もそれを有してきて、その過度な刺激はただ法外な贅沢で押さえてきたからである）、そうではなく、目にとっての、社交の贅沢、見せかけの贅沢がそうである。というのはこの点に関する空想や虚栄心は、すべての精神的なものと同様に、境界を知らないし、境界を置かないからである。飲食は微光よりも制限しやすい。飲食は、しばしば重たいが、しかし無害の巨大な蛇であり、微光はちらちら光るコブラ、出しゃばりのガラガラ蛇であり、両者とも最も有害な動物である。

しかし誰が助けるべきか。誰に話を向けたらいいか。男性達にではない。男性達はそもそも目の贅沢よりは口の贅沢に耽っていて　ー　男性ばかりの世界は派手さを求めることは少なく、それだけにただ女性ばかりの世界が派手さを求めるが　ー　それにいずれにせよ女性的華美の秩序の言いなりになっていて、それに地代を納めていて、彼らはここでは何の役にも立たない。女性達には更に話を持っていけない。女性達はここでは何ももたらさない。いつでも男性達よりも他人の意見に左右されて、男性達が胃に入れるよりももっと多く耳に入れて　ー　上品な卓布というものが、彼女達にとって、少なくとも趣味に従えば、インディアンの鳥の巣であって　ー　自分達の秘かな行為に対して（男性達の自慢げな公然たる行為とは別で）彼女達は少なくとも自分達や周囲の者達の許での明らかな微光で報いたいと思っている。　ー　実際彼女達は両性に対して一度にその貴重な外面的姿を見せる必要があり、我々男性は一方の性に対してもほとんどその必要がないが　ー　彼

女達は、男性達のようには、自分達の間で切ったり突いたりの決闘はせず、競うとすれば金銭や栄光を求めてであり　一　要するにアウエルバッハ風の宮廷では説教は何の役にも立たない。つまり女性達は贅沢という猛獣の永遠の付添人である、この荒廃する罪人[贅沢]の守護聖人であり、結局アメリカにとっての奴隷売買人である。困窮はアメリカへと吹き寄せ、アメリカの許で見られるのであるが、この困窮が、罪人を縛って船底の下をくぐらせるという罰に似て、同様に他の女性達を地球の下へと引きずり込むのである。

しかし誰に向かって私は話しているのか。母親達に対してである。この母親に私は大いに希望を抱いて、スパルタの女性やローマの女性が祖国のために装身具を、いや髪さえも犠牲にしたように、自分の娘達のためにそれに劣らないことをして、娘達を自分達の例や慣習によって、鉱山同様に金が多く取り出されるほど、ますます深くなる深淵から救い出してくれるものと話すことにする。母親たる者、哀れな子供を飽きることのない欲求を抱いた貧しい堕落した時の中へ送り込むくらいなら、子供達を胸や唇の下に抱いているときよりももっと長く子供を愛していると言って欲しくない。ピエモントでは一人の娘が生まれたとき父親は千のポプラの木を植える。十六年経つと大地から一万六千リーブルの持参金が育つという[*1]。しかし何という別のもっと美しく、毎年倍加する持参金を娘達の心に植え付けることになろう、これは即ち、かつてスパルタと初期ローマの娘達の心に花咲いたもので、外見や華美を蔑むことである。そうなると何と暗いドイツの生活は明るくなることだろう。新しい重荷は何と軽いものになり、それらを投げ棄てる力、何ら最新の重荷を引き受けないという力は何と強くなることだろう。　一一　しかしどうして可能か。一人の母親ではなく、母親達によって可能であり、天と夫達がこの母親達を恵んで欲しい。

*1　Coyer 神父、[『イタリアとオランダへの紀行』(1776)]

Ⅷ
性の節制

全く実りのない言葉の説教に人々が慣れて、予期しているのでなければ、性の節制という以下の言葉はその滑稽さ故に私はほとんど勇気を持てないところであろう。天文学によれば上のヴィーナス星[金星]では地球はまさにヴィーナス[金星]そのもののように見えるそうである。実際ただようやく本年になって金星は、地球を支配する惑星というわけではない。いかに慣習や流行、社交の日々の調子、秩序、法令、それに作家でさえまとまって不貞の委員会となっているか、あるいは節制の唯一の砦に対する、羞恥心に対する突撃前進となっているかは、どのような低俗な者でも、より高貴な身分の者達を見上げれば分かるであろう。というのは低級、中級の階級では勿論不義はより低く評価されているからである。自然は現在単にヨーロッパ病[性病]と呼ばれることになっている病気で、倫理のために何か役立とうと欲したけれども無駄であった。むしろ自然は体の徴候で魂の恥知らずの誇示を増やしている。今やヨーロッパ病は、早速それが最初に聖ペトロの椅子や王座[教皇座]に出現した際に得ていた無垢のかの立派な位階を得てしまっている。

それに対する古代ドイツのいくらか立派な流行の模倣の試みもほとんど効果がない。こ

の中には多分、青年を三十歳までは服を着せずに歩かせるよう命じたタキトゥス時代のドイツ人の再び探し出された慣習も数えられることだろう。というのは残念ながら男女のどちらも別の半分に服を着せたままでいるので、例えば男達は上半身に着せているので、倫理的目的はこの裸身の長所に関して半分失われているに等しいからである。

この強欲な不道徳といっても、カエサルやアルキビアデス、それに君達を征服した民族にすでに認められるものより、より劣等なものを生み出すだろうかと疑念がわくことだろう。こうした連中は皆、禿と月桂冠を共に有するからである。それにフランスの兵士は同様に易々と砦と女達を攻めるのである。被征服者達が征服者達に似ていたら、何故害があるのか。

私は、極のせいと答える。南の人間、熱い人間は、フランス人からイタリア人、ポルトガル人に至るまで、修道院的節制で名を挙げたことはなかった　ー　それ故まさに人間に通常の矛盾だらけに従って、温かい国々は冷たい修道院を生んだのである。　ー　しかし熱情の人間はそれを必要とすることは少なかった。気候がその人間の力であり、罪であり、政治的弁解である。

これに対して、全体に抗して争うもの、この争うものを消し去り、追い払うことは倫理と風紀に高められる。それ故イギリスからグリーンランドに至るまで、またスイスやオランダを通じて、かなりの節制がさながら身体的土壌と倫理的土壌の双方に根付いている。地理学的冷たさははなはだ強く倫理的冷たさを要求しているので、北方は南方よりもはるかに毒をもってヨーロッパ病の罰で懲戒する。君達の偉大な古代ドイツ人を考えて、賛嘆し、赤面するがいい。この力の肉体と力の精霊が戦争以外では柔らかな休息に羽根を伸ばして、日々酒を飲み、それから賭に夢中になり、しばしば殴り合いをしてそれでいて三倍の酩酊から性の不摂生の四番目の酩酊に至ることはなく、そして成熟した腕力の青年が、一人前の男になることを三十歳のときに初めて学び、一方現在の我々はその年には忘れ去っているとすれば、君達はこの昔の北方のこの純潔と力に対して、それから新しい北方に対して何と言うだろうか。この新しい北方は飲むことは少ないが、誘惑することは多くて、全く素面でいながら、自ら誘惑に誘惑されるのである。

あたかも新教主義が性の点でも他の多くの点同様に、北方と冷たさを主張するかのように、ちょうどそれはカトリック主義が南方と熱を主張するようなものであるが、新教主義はそれが生じたときドイツの諸都市で世俗化した先の尼僧院[妓楼]を廃止して、その生誕の世紀の放恣の最中にかなりの懲罰を導入した。　ーーーー[検閲の影響]

その結果に関しては、それはより高い身分の間に見られるであろう、ここでは祭壇で新郎はしばしばローマの花嫁のように立っている。この花嫁は周知のように老白髪の髪の化粧をしなければならず、更には首に軛をかけて、ヴェールで顔を覆わなければならなかったのである。それに新郎が過度に幸せで、かなり昔の神々に似ていない、つまりこの神々は何世紀も結婚生活を送りながら、神々を生み出していないとプリニウス[*1]が不思議がった神々で、これに似ていないとしても、新郎が豪華な広間やパレードの場を飾ることになるこの高貴な子孫は、しっくりとこのパレードや華美に合ってはいないのである。聖なるキリルス[*2]が言ったように、昔の人々は悦楽の報いを誕生の子供の巨大さ（巨人族ネフィリム）で受けていたとすれば、現在は自然からその逆の罰を受けている。それでドイツ人の敵はまずクセルクセス[*3]の真似をする必要すらない、クセルクセスは過大なバビ

ロニア人の力を殺ぐために放恣を命じたのであった。

二番目の不幸は、男達はそもそも軟弱さでは女性達よりもはるかに失うものが多いように、男達は、女達が悦楽で繊細になるのと同程度に鈍感になるということである。そうなるとドイツは自分の未来が見えてくる。植物の成長の最後の段階はボネによると硬化という最後である。国家ではそれは軟弱という最後である。まさにドイツの爪棹を両手に有するより高い身分のこうした衰弱に対して何を講ずるべきか、私より知らない者はいない。節度、名誉心等々が倫理あるいは宗教で、ちょうど昔の時代やスイス等々でそうであったようなものである。より良い法ができても立派な風紀が戻ってくるわけではない。しかし法は風紀に少しばかり帰路を作ってくれる。何らかの熱い理念がひょっとしたら最も役に立つかもしれない　ー　勿論この理念はドイツ人という人間のためのものである。

二つ目の解毒剤は詩人達が手に有する、同様に毒も有する。それはより高貴な愛の神聖な描写で、これは男性をというわけではなくても、青年を長く守るものである。青春のときに、時を得て[かせいで]、従って高齢になることは、すべてを得たことになる。というのは青春が失われなかったからである。この点では我々は我々の多感な長編小説に、フランス人がその軽薄な長編小説に負うよりも多くを負うている。我々の長編小説は生命の木について教える、フランス人の長編小説はせいぜい認識の木について教える。しかし執筆する手が本での例となって、つまり罪の詩による罪の散文となって加勢する場合、それに時代の負傷者に毒を与える場合、この手は友人の手によって握られて欲しくなく、また女性の手によって受け入れられて欲しくない。

*1　『博物誌』第二巻。
*2　『一般世界史』第一巻。
*3　アレッサンドロ・アレッサンドリ　第二巻、十三章　［『楽しい日々　全六巻』］

Ⅸ
利己主義

いかに広く利己主義あるいは自己中心の成長がその毒の木の影を投げかけているか、それは大抵郵便局食堂や料亭で見られる現今の喜びの選択からでさえ見ることができる。クラブやハーモニー協会、博物館協会等々の増加が証している通りである。集会が多くなるにつれ、関与は少なくなる。　ー　様々な宮廷や大都市、大旅行は、純然たる喜びや喜びの炎を通じてであるが、社交的霜の二つの関係を証している。それ故例えば利己主義者達の一団にとってははるかにより快適になっている　ー　というのは彼らが一緒に家の外で食事するとき、主人は苦労を、客人達は感謝を、そして主人、客人達は共に煩わしい関与をせずにすんでおり、輝かしい家々では主人でさえ自分の許で客人となっている。　ー　勿論自己中心者は家庭的幸福の最高段階を、つまりただ自分自身の幸福を享受しており、この者は自らの閉ざされた社交となっている。その心の中には外務関係の官房はない。そしてこの者は神同様に、ただ内部のみを、そして他ならぬ自分の内部の人間のみを見ている。　人間が霜の中でコウラナメクジのようにその柔らかな体液を硬化させて、その殻の

中に栓をするというこの冷たさはどこから来たのか。　ー　先の質問を二番目の質問で答えるとすると、社交の首都の町では、同様に大きいけれども、それほど社交的でないハンザ同盟の都市よりももっと自己中心が見られるのはどうしてなのか。それは、先の都市では共同の行為目的が見あたらないからである。互いに手に手を取って、一つの目標に皆で向かって働くという人々は互いをこの一致する目的の中で愛することを学ぶ。それ故いつも政治的クラブでは社交的クラブよりも利己心は見られないであろう。それ故船上や戦闘では、それにギルドにおいてさえ、より多くの愛が見られるのであり　ー　それ故自己中心は祖国が沈むと共に、つまり祖国に対する熱意が沈むと共に最も強くなるのである。

純真な、孤児となった人間は廃嫡された心と共に家庭的幸せに赴く。別の、喜びの詐欺師は波の輪が取り巻く歓喜の海に身を投ずる。ギリシア人やローマ人の生活はもっと家の外部で、また大勢の人々の許でなされた、しかしまさにこれは子供達や女達のためにもなって、この者達はまた近世の男達よりも愛国的になったし、近世の女達よりも家庭的になったのである。イギリスではこれまで祖国や家族や女達へのより大きな愛があって、従って家庭内の幸せと家庭外の幸せのまっとうな平衡が見られた。

ひょっとしたらこの自己中心はドイツの最近の受難の年月によって得るよりも失うものが多かったかもしれない。長いこと金持ちのドイツ人は貧しいドイツ人に対して現今の零落したドイツ人がなしているほどのこともなしてきていない。それに戦争も、追い払うか攻撃するという一つの目標に向かっての多面的同盟として、すでに自己中心とは余り合わない。　ー　更に、困窮は快楽よりももっと必然的にもっと固く結び合わせる、傷を防ぐことが[性的]満足を得ることよりももっと肝要だからである。最後に述べると、ひょっとしたらこれまで昼夜等分の嵐が我々に祖国を春のように開示したのかもしれない、多くの雪が溶けて、我々は貴重な大地の希望の緑を目にしているのである。

X
様々な警句

今戦争な最中に、他の戦後のときよりも多く講和[19]が結ばれている。かくてしばしば海上では、陽光の下、嵐になると、陸地での嵐の後に見られる数少ない高い虹の代わりに、二十以上もの虹が見られる。

＊

当今の哀歌の歌い手に反対すべき幾多の点を私は有するが、しかしまた彼らに賛成すべき多くの点も有しており、ここに述べる。ペストのときには音も立てず、布にくるまれたペストの荷車が通りを通って行き、弔鐘が拡大した死を告げることはない。しかし誰もがまた普通の弔鐘を耳にすると、普通に新たに活気付く。各人が今や嘆きは去り　ー　幸せが近づいていると知っている。ラ・トラップ大修道院[20]が焼けたとき、僧侶の誰一人として沈黙の行を破らなかった[*1]というのは、素敵なことである。我々の国々がトラップ大修道院ではなくて、おしゃべりするというのはもっと素敵なことである。

*1　フォルスター、『光景』第一巻[21]

＊

最も強力な地震は秋と年末にやってくるとカント[22]は言っている。彼は従って、彼の没年から判断すると、単に物理的地震のことのみ言っていたことになる。

＊

極めて長い平和のときには人間は極めて短い戦争のときほどには多くの馬鹿げたことや真実でないことを言わないものである。というのはこの戦時にはほとんど現在というものはなくて、単に不安や願望、希望のみがあって、これらは未来を覗き、未来に住むものであるからで、平和なときにはもっと現在があるからである。かくて、まだ存在しないものほど悪しきものに見、描くことはないというのは自然なことである。

＊

幾多の国家がオルガンパイプに似ている。これらは切断によって正しい音に合わせるためにのみ長く作られるのである。

＊

どんなに凡庸な阿呆も数年前からナイトキャップを被って、その祖父の椅子に座り、古いロマンチックな英雄の本と散文的なパイプを手に取って　ー　椅子にいながらにして最も偉大な時代を、いや行為者自身よりも偉大な出来事を体験できる。いずれにせよその出来事はこの阿呆よりも偉大で、この阿呆はこのような伝説を勿論夢想したことはなく、単に朗読して貰っただけである。

＊

面と向かって互いに論破しようと願っている二人の政治家に対して、私はここで論破のために必要な比喩を　ー　つまり一方が大きい国家を小さな諸国家に分割することを華麗に勧めたいとしていて、もう一方が小さな諸国家を一つの大きな国家に融合することを勧めたいとしているとき　ー　各人に公平に二つの比喩を、より上品な比喩とより低俗な比喩とを申し出るばかりでなく引き渡すことができよう。即ち、最初の政治家あるいはその命題に対してはこう表現できて、まず高貴に言うならば、気泡を有する大きな鏡は小さな綺麗な鏡に砕くことが同様に有利であるというわけで、次にもっと俗に言うならば、池の排水では大きな魚は捕まえられるが、小さな魚だけは水の中にまた解き放たれるということになろう。　ー　別の対立する政治家、命題に対しては、より上品な比喩で言えば、同様にチルンハウゼンは火鏡によって小さな諸ダイヤモンドを一つの大きなダイヤモンドに

接合したとなり、もっと俗には例えばこう言えよう。同様に蚊は蜘蛛の巣に引っかかるけれども、しかし蜂や雀蜂は引っかからない、と。

＊

真の学問や自由に対するドイツ人の有能さを称えるためにベヒシュタインの見解よりももっと高貴な比喩が言えたらと私は願う。つまり彼はまさに頑固さと物わかりの悪さが常に、立派なしゃこ猟の犬の最良の印であると述べているのである。

＊

戴冠式の服のために寸法を測られるか、あるいは納棺のためであるかは、他ならぬ我々自身にかかっている。

＊

我々は現在まだ時代の建築用足場に住んでいる　ー　勿論足場は最も快適な住居とは言えない。しかし我らの先の住居は実際どの足場よりも穴だらけで、透けて見えた。さながら足場のための足場にすぎなかった。

＊

我らの時代は高邁さや天才性、力と洞察のすべての偉大なものを体験することが単なる正義や合法性を体験するよりも容易であった。しかし歴史の大いなる記憶は例外を覚えていて、特に正直者の添え名を有する侯爵を嘆いたり、敬ったりするであろう。

＊

フランス人が詩人であるという名声で欠けているとすれば、この点はまた戦争の前や裁判を前にして、それに部屋の中で、上手に話すという栄誉で償われる。ちょうど歌わない鳥が、上手に話すことを学習するようなものである。しかし鸚鵡がドイツ人の語学教師となって、白鳥がフランス人の声楽教師となることが望ましいであろう。

＊

ローマは、ローマ人に世界支配を約束した、天から落ちてきた楯に似たものを幾つか作らせて、その楯を交換しながら保ってきた。まさにこうした楯と軍神の聖なる槍を出征する将軍は振り動かして、「軍神よ目覚めよ」と言った。　ー　さてフリードリヒ二世の刀[23]は何に似ていただろうか、槍であろうか楯であろうか。

＊

鼠が長鼻に這い入ってくるかもしれないので鼠を恐れる象とか、鹿を飲み込む前におずおずと蟻の方を見回す蛇の Mimia、それは腹一杯でいるとき蟻に打ち負かされかねないからであるが、こうした動物は臆病なのではなく、単に利口であるにすぎない。こうした歴史でも稀な賢さの例は、より冷たい民よりは、まさにより熱い、より強い民に見られる。この民は常に幸運の最中に災難を前提し、計算し、反駁し、予防する司令官に従ったのである。山々では下界よりも早く明かりと氷が見られる。

＊

一人の守護神の後継者 達[24] は下の燭台にまで燃えてくる明かりを上の方へ押し上げる術をめったに心得ていない。それ故明かりと燭台が溶けてしまう。

＊

どの国家も、踏車を動かす人間が、その段に乗らずにただ動かしている場合、結局滅びてしまう。

＊

何ものかから、つまり多くの目を有する職員一同から、我々を時代、あるいはフランス人が解放してくれよう　ー　職員一同とはしばしば逆にイオが見張っているアルゴスというわけで　ー　これは目を多く有することによって動けないことの助けとしたり、多くの足を有することで遅く動くことの助けとする昆虫に似ている。

＊

偉大な俳優は普通、霊や彫 像[25] 、殴り合いの役をしない。我々もまた詩的精神や散文的不動性、時に何ものかを背中で見せてきた。

＊

誓って。どの侯爵も常備軍と国軍についての『ミネルヴァ』一八〇九年九月号のフォン・シュタイゲンテシュ氏の論 文[26] を読んだら、どんなにいいことだろう。そもそも『ミネルヴァ』全号を読むことだ。いずれにせよ多くの本を読むことで、特に、まさに中産階級から（現在は文筆階級から）より偉大な立法家が生じたというアリストテレスがその政治学（Ⅲ、Ⅱ［正しくはⅣ、Ⅱ］）で言っていることが正しいのであれば、読むがいい。　ー

侯爵の図書館司書やそれに侯爵のための朗読者の職は国家で最も重要な最も神聖な職となろう、ここではすぐに短い警句へと圧縮できない変更を含めて。

＊

古代人は河の神々を角のある雄牛の頭で造り上げている。しかしイギリスの海の神々はどうだろう。この神々は我々を最新の雄牛の戦いで十分に砕いて、地球上の全体の自由を狭い島国に囲い込もうとした。国内の自由は彼らのものであって構わない。しかし広い海上の自由がようやく我々のものになって欲しいものである。かつて[ナポリ]総督が海に指輪を投げ入れたように、固い陸上にその指輪を投げ入れた周知の男[ナポレオン]は、諸民族を英国人のあえぐ引き船人夫としたくないと思っている点で勿論正しい。

＊

君達は最初余りに自分達の力を信じ、後には余りに不信を抱いた。絞め殺された者が最初はただ多彩の色を見るが、しかし最後には単なる黒い色を見るようなものである。幸い今はその中間が、つまり明かりが間近である。

＊

誰もが信じて、こう言う。過去、つまり歴史は未来の正しい教えを与える、と。しかし人間に何らかの過去、自分や他人の過去が欠けることがあろうか。我々は皆昨日からに由来するものではないか。誰もが自分の裡に、純粋な未来を形成するために十分な過去を有していたのである。しかしどの時も　ー　三つの時のどれであれ　ー　単に創造的センスによってのみ捉えられるのである。それ故このセンスにとっては、現在から学ぼうが、あるいは過去、あるいは未来から学ぼうが同じことである。

＊

水は落下した分ほど高く上がることはない。しかし人間とか民族は登った分ほど落下することはない。それでより高い守護神は我々に登りの迂回路や螺旋階段を教えて欲しいものである、我々がより新鮮な気持ちで登るように。

＊

どの戦争の嵐もシロッコの風に似ている。星座はしっかりと昔の位置、軌道にあっても、揺れているように見えるものである。

＊

何故昔は合法的に総督の家とか教皇の家は死後、略奪者の手に落ちたのか。何故他の侯爵達の家はこうならないのか。その故は、どの侯爵にも早速また友人の侯爵が結びついたからである。

＊

涙が結晶水［純度］ならば、ドイツは三度の最新の戦闘[27]において、第一純度、第二純度、第三純度の宝石となった。

＊

ドイツ人の形式や作法は長い衣服に似ていて、これは水中に落ちたり飛び込む者を、しばらくの間保つのであるが、しかしその後は新たな重さを得てより深く引きずり込むのである。私は裸で泳ぐ者を好む。　一　これまで市民の職員一同は軍人の立派な、しかし逆の模倣者であった。軍司令官が軍の出発を四時に定めると、将軍はそれをすでに三時に命じ、次の位の者は更に早くして、最後の位の者は最も早くする。しかし勿論、述べたように、市民の職員一同にあってはこの模倣は逆であり、紀元前の命令が紀元後に実行されるのである。

＊

昔のヴェネツィアでは、内部の人間は軍の総指揮官に任命されず、外国人[28]が任命された。ただ我々はこのことを以前なしていなかったからといって、我々は今それをなしている。

＊

遠く北方の民、例えばスウェーデン人とかその他の僻遠の民は何世紀もライオンの皮の上に休んでいて、そしてそれでもライオンとして立ち上がる。しかし氷の過酷さが助けとならず、それに至る所で熱い舌になめられているより温暖なドイツ、このドイツは、自らの氷山が周囲の南部の下で溶けないようにするためには、他国のそれぞれの動きに対する自らの動きを必要としている。比喩で語るのを許して欲しい。ベトザタの池[29]はただ動いているとき癒してくれた。柔らかな果実は動く枝にあるとき凍えない。　一　時代は我々を動かしてきたのである。

ＸＩ

希望と展望

秘かな微睡みの床での悪夢による時代の不安げな身振りは、自分達の嘆く災難をただ厳しいものにするだけである。最初の痛みに過度に反応することは自然なことで許される。エルヴェシウスの言ったこと、判断することは感ずること、これが逆になって、感ずることは判断することになっている、両方とも間違いであるけれども。我々は仕舞いには言葉の綾を、熱病患者がベッドの花を見誤るように、脅威的に迫る像と見なしてしまう。いやはや。我々の先祖は何と別様に全くより大きな災い、三十年戦争の災いといったものを耐えてきたことか。地上で彼らが埋葬したものは、天から彼らに反射して輝いた。どの痛み

に対しても、それを未来の喜びに変える神が存在した。

しかし現在の恐怖は神を知らず、単に、その地獄を日々より深く掘り、ドーム状にする悪魔を知っているだけである。わずかの作家を除いて　ー　この作家はただその政治的信仰体系に従ってであるが、　ー　至る所見られるのはただ印刷された女達の言葉である。昔のキリスト教徒、昔のストア主義者、昔の戯作家に会うことはめったにない。略奪された村への喜捨を優しい心、濡れた目から搾り取るために、人々はドイツ人的男らしさや大胆な見解を否認して、自らと他人とを溶かして、かくてより固い金属を溶解させている。まだ幾多のドイツの諸国家が元気に神聖に存続しているけれども、しかしそこの作家達はモレアス島の近代のギリシア人のように振る舞っている、彼らは皆（Pouqueville によると）、健康に頑丈に動き回っているけれども、一人の僧侶が通りかかると、彼らが言うには、このような僧侶は必ずしもいつでも得られるのではないので、終油の秘蹟を受けるのである。

身体上は嵐や熊から救われること、つまり平たい大地に死んだふりをして横たわること、これが政治的に役立たないというのは、ただ遺憾なことである（大地の中に横たわったらむしろ幾らか効果があろうが）。どの民族ももはや勇気がなくなると、腐った海綿が溶け散るように、滅びてしまう。しかし希望がなければ勇気はない。ベーコンによると希望は体にとっていいように、それ以上に希望は国家にとっていい。

ドイツあるいはヨーロッパの展望とは何か。一年先、あるいは一世紀先、あるいは千年先、あるいはすべての地上の時代への展望は何か。　ー　必ずしも一つの時代を名付けたり、思ったりする必要はない、すでに我々の背後の歴史の中で王座に就き、語っている永遠の自然の掟を思いさえすればいい。

未開人は太陽や月の短い食を、そして叙事詩のアダム[30]は それより長い局面、つまり夜のことを、世界の没落と受け取っている。いかに容易に我々は、国家の輪状の食や夜に遭遇して、殊にこれはしばしば我々の生涯よりも長く続くことがあって、未来についての臆した錯誤を感ずるに違いないことか。しかしこの錯誤は自然の営みの陽光がまず萌すと消えるのである。それ故人は、決して落胆せず、常に比較するためには、一千年の生涯を背後に有し、従って一千年の生活を前面に有する必要があろう。

しかし君達にとって年月より理念が役立つべきで、神は永遠であるべきである。それからできるものなら、恐れるがいい。

しかし我々はここで世界と希望を見るために、梢からの展望の代わりに、ただ小枝からのより低い展望を必要としている。希望を言いたくなければ、それを夢と名付けるといい。カントによれば、最も深い眠りでさえ、人生を煽るために、夢が必要であるそうである。国家の場合、何かができるという妄想は容易に真理となる、ちょうどフランクリンが泳ぐためには、泳げると想像しさえすればいいと言っているようなものである。

当今の諸国家はむしろ国家体格であり、古の諸国家はこれに対し国家魂であって、これはむしろ精神的なものによって、つまり雄弁や倫理や音楽を通じて、形式主義の木製の歯車装置を通じてではなく、動かし、結びつけてきたのにというよく知られた嘆きがあるとすれば、この嘆きがドイツに対するほどに正当に、強化されて当てはまる国家はない。昔の倒されることのないフランス人との対比においてすでに、彼らにあっては裁判での雄弁さ、一般的な、国王達さえも操縦する意見、あらゆる新奇なものへすぐに燃え上がる熱狂、機知の閃光的力、この機知の電気的に決定的な、しばしば極を反転させる効果は少なくと

も精神的影響に有効で、　ー　つまりかの以前のフランス人に対してすでに我々は我々の政治的機械仕掛けの点で遅れていた。我らの外面的形式主義　ー　我らの怠惰な猿真似、これは外国のマネキン人形を権威あるモデル人形、翼兵として我々のために選んできたもので　ー　幾分かは我らの特命公使や教授達、これらは正規の者より重んじられない者達で　ー　我らの会議室、ここでは頭は冬の木々のように立っていて、それで実のなる木も実のならない木同様に見えざるを得ず、従ってその逆でもあり　ー　すべての自由思想に対する我らの政治的断念、それに行軍規則や同役の蝸牛の歩調から外れる歩調に対する我らの逃亡者処罰　ー　我らの教練体制、殴打体制、古参体制、この体制は老人を老練家、単なる白髪を賢人、あるいは禿頭を密な頭脳、要するに高齢の冬を戦闘の熱と見なすもので、あたかも老人を遇するに名誉のベッドより他に柔らかいところはないかのようであり[*1]、こうしたことすべてが、ドイツ帝国の体格にわずかの帝国魂、公共心、団結心しか吹き込んでこなかったのであり、これがすべての一体化した生命観を奪い、それでドイツ帝国は蟹のように、右の鋏を左の鋏で挟んで、これを敵のものと前提して切ってしまったのであり、こうしたことすべてが、ドイツ帝国の内閣を機械の模型陳列室とし、機械仕掛けの神々のものを再び機械とし、政治家達を木製のケンペル[31]のチェス選手としており、この選手は自分の領土のチェス盤上で生きた臣下達を静かにあちこちと置き、動かしており　ー　このすべてが我々を鳥の駝鳥に似たものにしてしまったのである。この鳥は強い胃を有するが、しかし翼は小さい。このドイツ人の厄災は時代の例や結果、我々が詩作に熱狂するように政治に熱狂する[フランス]国民の間近さや影響を打ち破るのに役立つことになろう。

かつて幾多のドイツ人の王座の守護神が、自分の精神を伝え、その民を自分の好敵手に育てる代わりに、この民を自分の思考の単なる運び手、指針としたとすれば、国家は、プファフィウスのテルツィエ［六十分の一秒]時計のように、錘が取れた後も、動き続け、更に一時間も動いて、それから止まることになった。しかしヨーロッパの現在の天文精神、支配の惑星（宵の明星、あるいは西の星）は、その精神から諸精神を創り、それで肉体を単に創るとか動かすばかりでなく、生命も吹き込むつもりである。この例は遠近の道を通って我々ドイツ人に対して、フリードリヒ二世がヨゼフ二世に影響を及ぼしたように、作用し、我々はひょっとしたらこれまでのオーストリアよりもより高い意味で十一月から軍人の年を始めるかもしれない。

＊

君達は時代が小さいと非難するのか。従って君達は、時代に何か偉大なものが現れて、それで残りを小人や谷にしてしまったと述べている。小さなものにする時代がなければ、小さなものにされた時代はあり得ない。真に小さな時代は平原や静寂で、深さや高さに分割されないものである。勿論ある時代は行動のとき自らを偉大と感ずることはできない、偉大な男が偉大な行為をしているとき、そう感じないようなものである。偉大なことができて、それを容易にやってのける者にとって、どうして何かが偉大なものに見えることがあろう。彼は現実の遠い背後に初めてその岩や巨人を目にしているのである。確かに彼はそれらの巨人を過去や歴史にも見ることができる。しかし現在のこちら側と向こう側とで

理想が支配しているので、その件は同じことである。

しかしどうして理想は約束された希望の下に見られるのか。それはどの力も結局他人の力を強めるからであり　ー　諸力の競争路が開けられるからであり　ー　そもそも人間は人間の下で元気になるからで、すでにモンテーニュ[32]がただ元気な人を見ながら暮らしたいと約束したようなものだからであり　ー　幸いにも偉大なものは征服者の側と被征服者の側に分割されたからであり　ー　それに我々はギリシア人ではなく、ドイツ人だからである。

＊

戦争は人類を強壮にする鉄剤治療である、それも戦争を率いる部分ではなく、戦争に苦しむ部分を強める。戦争の衝撃は日々の憂いの長い苦しみが食い尽くす諸力を目覚めさせる。平和の中で市民は容易に軟弱に弛緩して這いつくばり、危険に対して爆弾に備えるように単に舗石や高い屋根を剥ぎ取ったり、軟らかい肥やしを撒いたりして防ぐ。しかし戦争は武器を持たない市民を圧倒的力と無法とで決闘に強いて、いかなるときも男らしい心臓と目を要求し、より大きな危険を示してより小さな危険に備えさせる。より強力な勇気は突入や切り込みではなく、持久力で証明されるので、まさに戦争では武器を持たない市民が武器を有する市民よりも多くその勇気を必要とするというか受け継ぐ。武器を有しない市民の方が有する市民よりももっと財宝や近親を失うことになり、守らなければならないということは別にしてもそうである。しかしそういうことであれば、戦争は次の時代にかけて何人かの真の男達を育て、残したに相違なく、ヴェスヴィオ火山に似たものになったに相違ない、この火山が灰を噴出した後では（実際戦火は家々の灰や人間の灰を十分に供給する）最初それで窒息した植物の成長は豊かに伸びるのである。　ー　未来に対して我々は男達以上の何を望もう。　ーーーーーーーーーーーーーーーー[検閲の影響]

＊

秘所を露呈した父親にマントを掛けてやったセム[33]やフランス人の全くの対蹠人として我々はマントを祖国から少しばかり外してしまって、ハムのように嘲笑者を呼び寄せている。しかし先の者達は化粧によって、我々が誹謗で得ているよりもむしろ勝っている、ちょうどいつでも報酬の方が処罰よりも精神を活気付かせるようなものである。しかし（一つよりも多くの意味で）ドイツの滓とフランスの泡はじきに沈んで、酒精分が澄んで残るであろう。なぜ我々は、最近のオーストリアやプロイセン、バイエルン等々の英雄的行為の国民的プルターク、武器を有しないドイツ人達の幾多の男らしい、救いになる立派な行動の英雄本をまだ有しないのか。このような英雄本を好んで読むような男を少なくとも一人私は知っている　ー　快適な思い出のせいで読むのであろうが、つまり幸いなことにドイツの精神の中へ、自分が支配している民、つまりフランス人よりも深く、より正当に、より敬意を払って侵入したように見える男のことである。　ー　しかし君達が心の中でこの書かれざる本を読み返すならば、君達にはドイツが太陽に似て見えることだろう、この太陽は、たとえ月に覆われて形姿が損なわれても、いつも暗い部屋の中に丸みを全体に帯

びた光線の像を投げかけるのである。

自然がすべての偉大な英雄の荒れた走路上に　ー　アレクサンダーやカエサルからカール大帝、フリードリヒ二世、ナポレオンに至るまで、　ー　さながら血を流した民族に対する創傷バルサムとして、学問に対する愛と情熱を付与したのは有益な現象である。アポロンが毒の矢のかたわら七弦琴やミューズも奏させているようなものである。学問は、特にその光が遠方の国々に落ちるとき、真の自由を失うことのない高貴な力を保つものである。大いなる光は密になると結局は熱となって、これが人類に生命を孕ませ、再生させて祝福する。光を否認することは、人間が悪魔によって創造されたこと、それ故人間が学問的発展や成熟を要するのは、単に、自らの許に悪魔の似姿を示すためであること、そして野蛮な心は長いこと静かな冷たい虫の卵やバジリスク[怪蛇]の卵巣を抱いていて、遂にはこの卵をフェニックスの灰のように陽光が陶冶された者の中に孵化するということを前提とするようなものである。人類の何という倫理的野蛮さや盗伐を遂に学問的明かりは追い払ったことか、宗教的人間の犠牲から商売的犠牲に至るもので、イギリスでさえ啓蒙の人間は商売の人間を打ち倒して　ー　奴隷売買を廃止したのである。ドイツは将来のヨーロッパの教養課程の山脈の源泉として、そのミューズの山々と共にますます大きく高く伸びて、仕舞いには大地を梢で囲み、実らせることだろう。少なくともヨーロッパは、学問をもたらすよりは取っていったローマ人の下の時よりも、いまやもっとより良く、別様に、ヨーロッパの権力者、全能者によって学問的光明の街路で結ばれ、互いに親しくなることだろう。誓って。ポルトガルや、ことによるとヨーロッパ領のトルコ[*2]や等々のことを、南ドイツがすでに登っているパルナッソスの階梯や天国への梯子を登りながら考えると、市民でなくても、世界市民の、次の未来ではなくても、近い未来の何という展望が得られることか。是非とも　ー　願いが拍車をかけるのであれば、願いたいと思うが　ー　新しい時代、諸状況の青春は、熱く侯爵達や作家達に用いられて、真のドイツ人や、鈍くなったヨーロッパを神々しくまた生んで欲しいものである。

誰もが神聖な心の恒星の時間に従って計算し、暮らしさえすれば、誰もが正しい時を外部にも見いだせよう、町の時計や国々の時間を有する卑俗な外部も結局は恒星の時間に合わせなければならないからである。

偶発事はあろう、しかし同じ種類の多くの偶発事は偶発事ではない。運命なんかではなく、罪とか報いを、人間ではなく、人倫を恐れるべきである。他人の自我ではなく、自分の自我を恐れるべきである。

二種類の古代人を絶えず君達の子供達に勉強させることである。古典古代の人々と君達の古代人である。そして、さようならと言うがいい。ある教皇[ベネディクト十四世]がただ十二のキリスト教の祭壇画でコロセウムをキリスト教徒の破壊から守ったように、我々はフランス人に対して、他ならぬフランス人の　ー　長所で我々を守るべきで、かくて我々は土着の者として、我々の下に彼らの優しい人間的な、祖国愛に満ちた名誉心、彼らの思いやり、彼らの陽気な軽快な人生観、彼らの素早い決断を植え付けたらいい。

創造し、希望することである。神と死が君達を助け、君達の下に留まるだろう。

より間近の過去のことで、より遠くの過去のことを忘れてはならない、同様に多面的未来も忘れてはならない。スウェーデンでは夏至の日に夕焼けが区別する夜なしに朝焼けに移行するように、今や恐怖と希望、西の夕方と東の朝方は融合している。従って陽が昇る

のは遠くない。アーメン。

*1　より高い軍人の位としてこれまで体力の年齢を然るべき時として採用してこなかったが、しかし最高位ではアレクサンダーとかカエサルとかカール十二世、フリードリヒ二世、ナポレオン等がまさに青年時にその栄光の勝利を得たというのは奇妙なことである。更に奇妙なことが加わる、つまりこの者達は司令官としてもっと年齢による冷徹さ、洞察力を必要としていたし、同様に大抵は単なる執行の副司令官達はもっと青春の炎の力を必要としていたということである。
*2　一八〇八年の閏日、あるいは二月二十四日の聖マティアの日が延びることになった二十五日に書かれた。この日には普段氷が割れるか氷が作られるものである。

ドイツの為の薄明
（1809 年）

序言

人々がこの本のタイトルを曖昧で多義的と思う代わりに明確であると思うとしたら、これは著者にとって幾多の理由から好ましいことではないだろう。著者としてはその逆を望みたいと思う。薄明はいろいろなことを意味し得るからで　ー　夕方の薄明、朝方の薄明　ー　極地での太陽の見られない真昼の薄明、それに白夜の真夜中の薄明　ー　最後の北方の神話学では神々の黄昏、即ち神々の死　ー　あるいは同時にその逆のことである。

ちなみに薄明は、私どもを太陽や星々に導くという爽やかなイメージがある。雲雀や花々に満ちた春の薄明の早朝の礼拝を祝ったことがあるのであれば、誰がそれを忘れることができたであろうか。丸一日がその反対であったからである。薄明のときには心が支配している。

この本は単に『平和の説法』の完成にすぎない。読書界はこの説法の許しを繰り返して欲しい。　ー

ドイツ人の傷と共に同時にドイツ人の耳も開いている。それ故、それができる者は、癒すことを話すべきである。そしてそれが最も上手にできるであろう男達は、今是非とも黙っていて欲しくない。　ー　新しい時代は新しい力を要する。新しい国家の船は新しいボート同様に、漏れないようにするために、尚、水を入れさせるのである。

強いられたからといって臆病では沈黙の弁解とはならない。良きことのみを話そうと思い　ー　自分のことや、劣等な憎しみやおべっかを話そうとしない者は、　ー　いつも煩わされずに話せるものである。野蛮なグラックスといえども常に自分の背後に人道と詩文のフルートを残して、それで声の調子を合わせることである。執筆や行動では幾多の良き行為が完全な果実とならないことがあるが、それは単に私事をさながら仕事の補償として紛れ込ませるからに他ならない。

薄明は、寒い国々では、それが最も効果のあるときにちょうど最も長く続くというのであれば､著者としては著者が与えるというよりは屈折させるわずかばかりの光線に対して、それが必ずしも最も暖かい空の下にはないドイツに若干の暗い十五分間を省くとか照らし出すということになれば、十分に報われることになろう。　ー　花々には十分に露が降り　ー　目や傷から露となった。　ー　晴れた陽が濡れた広野に昇り、広野をほの白く輝かせて欲しい。

バイロイト、一八〇九年三月六日

ジャン・パウル・Fr. リヒター

I

歴史と人生の中の神について[1]

運命は普通多くの者とはわずかしか係わろうとしないとゲーテ[2]と共に言う者にとって、「世界史は一つの最後の審判」であるが、しかしそれは絶えず罰し、自らをも罰する審判である。

勿論過去は我々をぞっとさせるように見つめている。掘り出された海の底のようなもので、これは骸骨や怪獣、大砲、現代の貴重品、風化していく神々の像で一杯である。ここでは、他の者達が現在で苦しむよりももっと過去で血を流して苦しむ精神が、世の推移に対する苦情を正当に発して欲しいものである。海の比喩は（とこの精神は言うだろう）十分に広く届く。我々は輝く緑色の海上を船で行き取ってくる。しかし我々の下には乞食達がその宝物や骸骨と共に横たわっている、彼らもかつては喜ばしげに海上を往来したのである。　一　諸国家の強化は難しい、その満開は短く、その凋落は反吐が出るほどゆっくりである。いかに長いこと野蛮人はローマ帝国で、一方の猛獣が他方の猛獣を飲み込むまで、這わなければならなかったことか。目にはとても厭わしいもので、あたかも大きな沼地の蛇が生きた鰐を飲み殺すようなものである。何と長いことすでにトルコ皇帝軍は天上的なギリシアでむさぼり食っていることか。

どの心も何らかの至純な目標への路上で支援や救助を期待しないことである。　一　勿論ひょっとしたら雲の中から一本の腕が差し出されるかもしれないが、しかし樫をその梢のところで根から引き抜くためであったり、樫を嵐に対してしっかり保つためであったりする。最も高貴な大臣[3]を従えた、フランスの最も高貴な王アンリ四世は、一般的なヨーロッパの侯爵同盟[4]、いつものように戦争を決めるのではなく戦争を閉め出す同盟へのまさに天の道への途上で、悪魔の祭壇の犠牲のナイフのために倒れなければならなかった。この高貴な侯爵の精神は、これはすべての侯爵達の努力の中で最もまれなものであるが、その国家の安寧と共に人間達の、つまりすべての国家の安寧を実らせ、育てる意欲を有していた。彼は亡くなった。哀れなシュリー、哀れなフランス。　一　福音史家ヨハネたるフェヌロンが神々しく成長させたある高貴な国王の心臓[5]、これが存命ならば、オルレアン公爵やルイ十五世の、それに革命の蛮行を疲れた人類に経験させずにすんだであろうのに、この心臓は停止せざるを得なかった。哀れなフェヌロン、哀れなフランス。　一　それでも君達は、救助するために、あるいは叱るために、あるいは握手するために君達の手を差し出したとき、個々人のこの手が目に見えない一撃によって切り落とされたら、不思議なことに思うつもりなのか。君達の計画している最善のことは、すでに拒まれ、使い果たされた最善のことに比べたら何ほどのものであろう。それ故、レオポルト侯[6]のように、自分が溺死者を助けるつもりだからといって、自らは溺死を免れるはずだと信じてはならない。君達は仕舞いには最初救われた犠牲の犠牲になってしまうのだ、ハウァド[7]がペストの犠牲になったように。

ただ一回きりのもので、二度と戻ってこないものも、例えばアレクサンドリアの図書館[8]や、芸術品で一杯の船や都市が沈んでしまった。不滅のギリシア人の代え難い思考と共に。ほとんど嘲笑的に運命は一国家の自由を偶然という蜘蛛の糸と結びつけてきた。あちらイギリスの運命は仕立屋の鋏[*1]に、こちらジェノヴァの運命はボートにかかっていた。偶然はイギリスでは保ち、ジェノヴァでは引き裂いた。

偉大な個人の特別の種まきは　ー　そこから至福の千年が生じようとも　ー　運命の前では諸民族を害するほどの一つの種の種まきと変わらない。偶々あれこれの種に雨が恵まれるのであって、毒の種は例外ということは決してない。しばしば運命は煉獄と地獄の分かれ道で地獄の方を選ぶものである。ユリウス・カエサルの許のローマ帝国はブルートゥスの剣がなければ、どれほどもっと幸せになっていたことか。三大陸のこの処罰の鞭のためにローマの王座は単に諸国や諸支配者の大きな処刑台になったにすぎない。運命はカトーの死によっても、ブルートゥスの殺害と死によっても世界を守らなかった。これらの三巨頭は自らの墓をアウグストゥスとかの王座への階段にせざるを得なかった。というのは、ユリウス・カエサルがその名を一月［六月］ではなく、すべてのユリウス暦の統治期間に与えることが許されていたら、ローマの皇帝史の葬列同様何かひどいもの、あるいはもっとひどいものが続いていたかは、疑問が残るからである。

時に運命は一方の天秤皿に他方の天秤皿同様の死体や勝利を投げ入れて、かくて新たに追加して投げ込まれなくてはならなくなる。二回ネルソンは海上で決定的に勝利しなければならず、ナポレオンは二回陸上でそうしなければならず[10]、これは単に海上か陸上でさらに新たな血や涙が追加されて、測定する垂直な指針が傾くようにするためである。

まさに歴史で最も残酷なのはそれぞれの倫理的あるいは非倫理的目的の幸運と不運の間のこの交替であり　ー　これはほとんど、一方の春の有機的世界の歓呼、受精、愛に似ており、他方での殺し合いに似ている。全体の喜ばしげな春は三要素の世界［大地、大気、火］での途方もない殺害に満ちている。ただ声高な海では殺害はもっと静かに行われて、海ではすべての生命は他の生命によって生きており、この海がまさに地球上の三分の二を形成しているのである。運命はただ何かを罰するが、これは心の自らの罪ではなく、頭脳の無垢の罪を罰する。一つの悪徳に対して百の愚行が処分される。このようなのが世界であり、我らの慰めである。

けれども人はキリスト教徒のままでいながら、この絶望を真似て唱えることができよう。というのはこの人は単に墓地の壁を防衛の塁壁とし、第二世界に大胆に逃げ、飛び立って、第一の世界を第二世界の入門、予備天国、予備地獄と説明すればいいからである。第一世界にはまたすべての他の惑星や恒星を更に加えるに違いない、すべて地上的なものは不可分だから。しかしこれもまた精神的未来にとっては測定不可能なこと（比較できないこと）である。両世界のどちらも自らを正当化しなければならない。私はすでに私の現在の内部で、まさに時間と歴史の中を歩いている内部で、永遠のこの期待された神を知っているのである。従って私は私の地上の心の中に付与された永遠の神を通じて、すでに同時代の地上との現今の関係あるいは不和を得たのであり、認識すべきなのである。

神は世界史では三つの形姿を取っている。それぞれを見ることにしよう。しかしまずは、我々は無限の者を我々の地球の娯楽の親方としてではなく、その子供の民の薫陶の師、父親として求め、眺めることにしよう。

神が民族の裁判と治癒の制度として現れる第一の形姿の点ではヘルダーが最も立派に描いている。物理界のすべての法則は　ー　癒しながら、祝福しながら、罰しながら　ー　自由な世界へ適用される。物理的成長、花盛り、凋落の同じ物理的法則性が、精神的法則性として、肉体に接ぎ木された諸精霊の中でまた復帰しないことがあろうか。個々人は自由であるが　ー　最も暗い行為にも、最も明るい行為にも自由であるが、　ー　しかし全

体[塊]では単に生命を吹き込まれた重い肉体界にすぎない。それ故これまで大抵の民族が低く立っていた歴史では、民族の塊は力学のすべての衝突に従って屈している。というのはヘルダ[11]ーのかのすべての法則、つまり「どの過剰も自ら罰し、消えて行く　ー　過度の緊張には弛緩が、節度には力が、怠惰には無力が続き　ー　対立する諸方向が揺れて平均に収まる」　ー　この法則が肉体と精神を等しく支配している。そして復讐の女神は人間よりも先に植物や動物を支配してきた。しかし個々人の自由は、罪人の自由であれ、聖人の自由であれ、まさに反対の法や路を選ぶことができ、掘り返し、数世紀にわたって世界を惑わし、あるいは祝福し、かくて復讐の女神[ネメシス]に逆らうことができる。人間界の歴史では単に一人の人間がかくも圧倒的重みを持つのである。ルターほどの人はその頭脳球に地球の外部の堅固なアルキメデスの支[12]点を有して、まさにこの地球を別様に回した。それにかのイエスの協会に属さないかのイエスときたら、強力な者の中で最も純粋な者で、純粋な者の中で最も強力な者であり、その刺し貫かれた手で地軸から諸帝国を持ち上げ、諸世紀の奔流を河床から持ち上げ、いまだに諸時代に命じ続けている。従って我々は歴史の中で、二つの対照的な現象に出会う、これが我々にその神を隠している。最初の現象は物理的法則に従う世界の進行で、この法則に従って人間や国家は木々のように強壮になったり、花が咲いたり、散ったり、最後には空洞になったりする。そしてまさにこの反復する没落が人間の塊の歴史に希望のない外観を与えている。摂理はここでは溶岩の流れや稲光に対して、月光に対するように、自然の進行、飛行を与えている。国々を物理的地震が倒すか、戦争が倒すか、同様に許されている。それでアフリカで一回の地震が六百もの町を埋没させても、これは単に詰め込まれた死と冬にすぎない、春が詰め込まれた生命にすぎないようなものである。悲嘆は、我々の地上で毎分六十人の人間が死んでいるのを嘆くようなものに聞こえるであろう。同様に最初の段階で衰亡した民族、つまりその子孫に対する哀悼は、すでに亡くなったその先祖に対する哀悼に聞こえるものである。従って歴史の経過よりはそもそも開始の方を嘆くべきであろう。

第二の現象は自由な精神の法則に従う世界の進行である。しかしこの進行は先の進行よりももっと我々を我々の希望と引き離す。一人の人間が、その気になれば、世界を倒したり、築いたりする。自らを犠牲にしようと思う者は、他のすべてのものも共に犠牲にできる。船を爆発させ、王冠の頭を倒し、町やラファエロの画を燃やし、そしてすべての予期しがたい、しかし物理的結果に至る、つまり全体的国土と地上の嵐に至るためには、そのことを欲する心と手当たり次第の手の他に必要なものはない。パリで機械仕掛けの爆[13]弾を準備した者は、その思いつきと偶然を、二番目の偶然、御者の酩酊という偶然が台無しにしなかったら、今や変革された地球全体を逆行させていたか、あるいは昔のままに留めていたことだろう。それ故君達は数千年後では地上の姿よりも天体の姿を容易に予言できる、地上の姿をその火薬で粉々にするどんな黒いやつが生まれてくるか君達には分からないからである。同じことが天体にも言えるが、ただしかし天体ではすべてをずらす新たな太陽が生まれるのは数兆年経ってようやくなのである。

このような人間の彗星にも豊かな自然はすべての軌道に対する自らの妨害を認めている。というのは自然は精神的物理的法則で十分に武装していて、それで　ー　絶えざる時間に無駄というものが考えられるかぎり　ー　勿論無駄な時間を費やして　ー　自由の揺れを再び規則的なものにしようとするのである。

しかし民族の物理的人生行路には、動物のそれには見られない自由が更に加わっている。ちょうど嵐の人間の自由な力の振動にも、その押し上げる梃子の支柱をなす堅固なものが組み込まれているようなものである。　ー　ある民族が、中国のように、すべての運動の法則に反して、数千年太陽に対して同じ位置を保って動かないとすれば　ー　他の民族は、ギリシアの国家のように、素早く動いたり、それから後退するとすれば　ー　ある民族は、キリスト教徒の間のユダヤ人のように、月が地球に付くようにより大きな民族に付いて、そして一緒に太陽の周りを回っているとすれば　ー　別の民族は、フランス人やドイツ人のように、遠日点から近日点に来、そしてその逆をまた反復するとすれば　ー　別の民族は、エジプト人のように、空の彗星のごとく二度と戻って来ないと来ないとすれば、すでにこの不十分な萎えた寓意は、民族の軌道を描くことが自らできないということで、天体と精神的団体の違いを思わず知らず露呈している。というのは必ずしも物体のイメージは　ー　その絶えず循環する転回にとらわれていて　ー　真っ直ぐに行ったりジグザグに行ったりする民族の精神を描けないからである。かくて諸民族の開花と凋落のイメージは完全なものではない。というのはどの民族も今日同時に花や果実や芽や枯れ葉で一杯になるが、しかし明日また一杯になる、ただ別なもので一杯になるからである。一体どのような物質的位階に従って、例えばフランスでは秋や春、冬、夏が交互に新たな舞台となるのか。ガリアはローマ人がこれを最初に征服し、プロヴィンキアと名付けたとき、プロヴァンスで満開になったのか。あるいはプロヴァンスの詩人達と共にか。あるいは特にカール大帝の治下にか。あるいはアンリ四世の時にか。　ー　あるいはルイ十四世の時にか。　ー　あるいは革命の時にか。　ー　あるいはナポレオンの時にか。　ー　ここでは頂点とその逆は絡み合っている。あるいはドイツ人の満開について、世俗のローマに勝利を収めた時か尋ねてみるといい。宗教上のローマに敗北した時か。　ー　十字軍の時か。　ー　ハンザ同盟の時か。　ー　騎士の時か。　ー　十五世紀か　ー　十六世紀か　ー　現世紀か。ここでは飛行あるいは落下の突起はどこにあるのか、それとも両者は共に絡み合っているが、ただしかしいつも新たに昇ったり落ちたりしているのか。国家の衰退あるいは時代の経過を民族そのものに応用するというのは間違いであった、民族というのは実際いつも若返ってその国家の墓の上に芽を出すのであって、中世のイタリア人のように、世界の大いなる七つの丘のゴルゴタ[ローマ]に遅れて、新たな北方の血で薄められて根を張り、新鮮なギリシアの花々を咲かすのである。君達はどうして、人間の創作物、つまり国家の逆向きの沈下という丸い死の舞踏の際に、神々の創作物、つまり民族そのものも共に沈下すると考えるのか。この民族の中ではまさに別様にしか逆転しないのであって、この民族は伐採された枝の後、枯れることのない幹の上に新鮮な緑の命の枝を芽吹くのである。　ー　勿論ギリシア人達はその岩や島々ですでに長いこと政治的救世主を待っていた。　ー　同様に大きな関連に巻き込まれた多くの民族がそうである。しかし民族はいつでも時間を必要としている。より良い果実というものが、その延期に、春といった延期に報いるものである。

今や諸民族がその国家の墓場の上で新たな区域の中へ立ち上がり　ー　すべての新たに別様に発展するヨーロッパの民族がますます高揚した接触に至り、遂には別の大陸の民族も大きなガルヴァーニ電堆[14]や精神の鎖[電池]となるとき、君達はどうして今一つの完成した未来という重心への一般的な均衡を単なる個別の国家から測定し、計算できようか。

まず我らの地球のすべての民族が一つの共同体の形成へ協力し合って、一つの粗野な民族が教養ある民族の中へ破壊的に混入しないようにしなければならない。　ー　というのは文化が遂に民族を次々に捉え、刻印することは不可能ではなく、むしろ文化の成長する支配力はその全支配のためにはただ時間しか必要としないことはむしろ必然であろうからである。　ー　昔は若干の窓を覆い隠すことが必要であった。かくて地上の建物は暗かった。しかし今では覆い隠すための窓は多すぎるであろう。暗闇の中でさえ本が光を放つ光磁石として残るであろう。一度地球の両半球が、これは物理的には不可能で、比喩的にはどうしても必要なことであるが、照らし出されるならば、上昇と沈下のかの循環は止むに違いない。そして最下層では民族の（ほとんどすべての未開人の）長い停滞が見られるように、成長の様々な四季がその嵐や交替と共に体験され尽くされたら、最高層ではより高い休息が戻ってくることだろう。ちょうど個々人の意志や分別は教養の最も華奢な梢に最も変わることなく休らうようなものである。

人間は全体群れて集まっているとき、より容易に長く、自らを清めるよりも汚してしまうとすべての歴史が語っているならば、そして戦争や海賊、従属、党派心は千もの心を一気に長く占有するが、徳操は天使のように単に個々人にのみ随伴するならば、ある未知の精神、大陸や時代、民族を秩序付ける精神が、つまり、これまで逆に広範な不幸から成長する救済を導いてきた精神が関与しないならば、悪魔の軍勢が夙に、散り去った天使や地上の幸福を圧倒し、覆い隠していたことだろう。かくて広く、塩分を含む汚れた海が地上に見られるが、しかし真水がその中から天に昇り、山々に降雨し、大地から涌き上がり、清い奔流となって人間を潤し、運ぶのである。

我々の視線を最も遮ってしまうものは[15]、我々が諸民族の精神的自由の開花と凋落の大いなる均衡や何千年目かのその同時の成熟を、つまり神的なものの肉体的現存をすでに紀元一年にあるいは誕生日の贈り物として欲するということである。　ー　我々かげろうは、我々の存在のテルティエ[六十分の一秒]時計の場合のように、恒星時の千年時計の場合でも指針の動いているのを見たいと思う。それ故我々はしばしば短い人間の人生、いや子供の人生の中に摂理や正義を見るのが、長い民族の年齢の中に見るよりも容易である。ちょうど我々が太陽の周りの地球の循環を発見するのが、源太陽の周りの太陽の循環を発見するよりも早いようなものである。太陽は地球がより狭い軌道の中で動いているよりも早くその広い軌道の中を動いているのであるが。

ある民族が自分の病気の原因を冷たさや熱で追い払うときの持続的な熱病はしばしば数世紀続くものである。幾多の国民がその名を冠す病気を有するので、ここでも精神的にイギリス病、ポーランド病、ナポリ病、フランス病[性病]について話すことができよう。ただ我々はいつも数百年続く民族の危機を検算する際、大きな天体の摂動の場合も規則的運動に戻るには大きな世界時間を必要とするということを忘れがちである。長い空間は長い時を必要とする。それ故しばしばある不協和音が、すでに長いことかげろうの侮辱された耳は朽ち果てているのに、その音の生じた音源からはるかに国々や世紀を隔てていることがある。しかし歴史は民族の緩慢な目覚めと緩慢の衰退の間にしばしば急激な開花を見せて中断し、びっくりさせて、かくて人間自身のせいによる歴史で弁解している。こうしたすみやかな発展を　ー　これは有機的な自然同様に、しばしば見せかけの停滞を突然の開花で破る倫理的政治的性質[自然]に基づいているが、　ー　これをまさに短命な、半世紀

という半分の給金に雇われている人間は本当に体験したいと望む。これを望むがよかろう。ただ最後の審判を下さないことだ。

我々の背後では過去はその諸民族と共に目標へと急いでいる。遠さのため一見すると道や歩みが隠され、縮められているからである。しかし我々の周りや我々の前ではすべてが我々を停滞させ、循環し、目標に近付こうとしていない。すべての星が止まって休んでいるように見える現世の天同様にこの世ならぬ天を見上げるがいい、そして、向こうのより高い目にとって何という翔る星の群れが見られることか考えてみるがいい。

四世紀や五世紀、六世紀、十世紀の流れ去る奔流から更に十六世紀等々の金の粒が洗鉱されると我々の誰が推測し得たろうか　ー　つまり予言の予言となり得たろうか。誰が、まさに学問の半世紀もの明らかな墓場の近くにあって、そこに二つの不滅の薬剤を、つまり我々の紙と本の印刷という発明を求めたであろうか。

偉大な著者[16]が更に続けてこう証明しよう。「賢者自身に時にそう思われようと、必ずしも説教はすべて空しく愚かなものではない。キリストが使徒達にすべての世界にでかけて、すべての民を教化せよと言ったとき、それを耳にした哲学者は容易に声高く笑い始めたことだろう。誰が三百年前のローマで、ドイツの一人の僧侶が三重の冠を被った者からその支配の半分を奪い、残りの半分を致命的に弱めるであろうと信じたであろうか。強力なオランダ共和国は何らそれを目指す意図もなく、すべての予測に反して生じた。それに劣らず思いがけずチャールズ二世は、すべての彼の陰謀が失敗して、もはや何もできなくなった後で、イギリスの王座に就いた。こうしたことすべてが教えているのは、我々は何が起こるか知ることはできないということである。それ故私は私を日々惑わす私の予見より、つまり私の知恵という思い上がりより、私の明確に感ずる真理の方を信用している。余リノ用心ハ策謀デアル。我々の許で流行しており、グライムの言うように、仕舞いには牛乳の蛮行を引き起こすような永遠の順応は、私の本分ではない。私は真理の支配を企む気位を少しも理解できない。これは神の本分である。だから我々の正直に信ずるものに正直に帰依させて欲しい。神はきっと見守られるであろう」[*2]。

今や北アメリカやフランス革命を（両者はかみ合って第三の革命[17]に至ったが）これに加えることができよう。第二のワシントンが我々を英国から解放して欲しいものである。しばしば時代は引き抜かれた木の梢を地中に埋めたものであるが、しかし見よ、梢は根となり、根は梢となったのである。

今や容易に約束の第二の見解を述べることになる。

個々の飛躍の人間にも　ー　つまり新たな精神界の先頭の諸精神にも　ー　彼らの方向のあらゆる自由にもかかわらず、時代や彼らの作用に関連するもの、例えば彼らの力の道具、根上げ機、錨巻き揚げ機、鉄梃子が押しつけられている。彼らは支配するために奉仕しなければならない。

一人の建て主が彼らを国家の棟梁として採用する。人々はこう言う、時代のこのようなお産介添人の前にすでに万事が過去の大勢によって準備されていて、例えばルター主義はすでにルター以前地中に芽生えていた、ただそれは焼かれた異端の灰からなる墓地の中であったけれども、と。しかしこう付け加えなければならない。しばしば国々は剣で準備され、鋤き返され、血の肥料を与えられているが　ー　しかし休閑中のままである。それは立派な種を蒔く精神がやってこず、単に雑草で一杯の爪を持った敵が来るだけであるから、

と。再三十字軍等（フランス革命）が、より大きな人間どもによって仕込まれ、孕まされて、産婦より小さな人間どもによって分娩されてきた。巨人を毒殺するがらがら蛇を子供の手の中の鞭が砕く。　ー　無限の神のみが、今ヨーロッパは何に対して成熟しているか、ヨーロッパに種を蒔く男が欠けているのか、それともやって来るのか、承知している。自らの一切の世界史を抱えた民族はてんかん患者に似ていて、この患者は何度偶然の発作に見舞われても、いつまた発作に襲われるのか決して予見できないのである。しかしまた民族は麻痺した者に似ていて、これは雷雨に当たるまで雷雨の下で震えていて、当たったら稲妻で治癒するのであった。

どのようにして新しい未来の先頭の精神が過去の王位継承者となり、現在の支配者になるかには違いがある。いつでも知的力の勝った精神の方が倫理的力の勝った精神よりも容易に国々を耕し、その中で植物と共に根を下ろす。聖人はその礼拝堂で孤独であり、ソクラテスはその牢獄で孤独である。しかし全世紀にわたってその弟子プラトンにより熱狂的支持を得て、君主達よりも長く偉大な立法者達によって支配される。幾つかの理由の中でこれも一つの理由である、つまり精神的に勝った者には結局頭脳の欠けた正反対者も支配され、追いかけなければならない。これに対して心の勝った者には誰もが血縁の者、それ故王座の親戚として、神々しい自由を通じて親しく感ずる。誰もがこの自由のせいで同時に第二の世界創造者、神、被造物となりうるのである。勿論、最も長く世界を動かしてきた諸精神は強大な知的力と倫理的力、頭脳と心とを一つの力に結びつけてきた。実際偉大な頭脳を取り巻く後光が天と地と共に、雷雨と地震と共に、国々につかみかかり、背後に　ー　マホメットのように、王座と神殿を残している。聖人は孤独に作用し、その手は大地に抵抗するよりは天に向かって挙げられるが、しかし奇蹟の墓からのように、目には見えずとも、作用し続ける。倫理的模範像は音を立てずに、静かな魂に世紀から世紀へと祝福の力を伝えて、目に見えない温かさで花々や果実を下界に生じさせる。（蔑視された祈祷書はしばしば数世紀の間、征服者の宣言よりも深く浸透する[18]）。

ただ心の圧倒的な一人の精神のみはここでは例外で、宇宙同様、孤独に神の隣にいる。というのはかつて、単に倫理的全権で別の諸時代を支配し、自らの永遠を打ち立てた地上のある個人、向日葵のように従順に穏やかに咲きながら、太陽のようの燃え上がって引きつけながら、それでも自らその穏やかな形姿で自らと諸民族と諸世紀とを同時に全能の太陽、根源の太陽に従って動かせ、整えてきたある個人が生じたからである　ー　それは我々がイエス・キリストと呼ぶ静かな精神である。この精神がいたのであれば、これが一つの摂理であり、あるいは摂理に近かろう。ただ静かな教え、静かな死が、このより高いオルフェウスが人間獣を躾けて、岩を諸都市へと調和させたときの音色であった。　ー　しかし我々にはこの神々しい人生について、さながら鈍感な歪んだ民族に対する三十年戦争についてのように、ただ数週間のことしか知られていない。単にその四人の生来自分とは似通っていない福音史家に彼が知られる以前、何という彼の行為や言葉が先立って失われてしまったことだろう。従って摂理がこのようなソクラテスに類似したプラトンを添えることがなく、このような神々しい人生の書から我々は単に飛散したビラしか恵まれなかったとしても　ー　それでひょっとして彼のより偉大な行為や言葉は記されるよりも忘れ去られたとしても、　ー　小さな作品や人間の難破に不平を言わず、訴えを起こさず、その後に栄えるキリスト教界にまた充実を認識すればいいのである、全能の者はこの充実で毎

年もっと花々や種を栄えさせるというよりは落下させるが、だからといって未来の春を失っているわけではない。

この最も偉大な人間の像を間近にすると、我々はひょっとしたらこの個人の小さな人生には一般的な世界の歯車仕掛けよりももっと別様なかみ合わせがあるという第三の見解、大胆な、この偉人にさえ神聖な信仰を抱いてもよかろう。それとも君達は、ちょっと昔からラーヴァーターやシュティリングに至る敬虔な正直なキリスト教徒の多くの経験や見解はまさに夢や錯誤であるとして棄ててしまうほどに大胆であろうとするのか。あるいはそれらを一般的な法則あるいは偶然との単なる混同と見なすつもりか。この件については賛成を表明することも反対を表明することも同様に大胆である。しかしもっと大胆なのは、ある特別な摂理という肯定に従って生きることであろう。天上の星々は行為の固い陸地では内面の海上ほどに道案内として必要ではない。　ー　各人が自分の幸運（それに不運）の鍛冶屋であり、従って倫理的掟は摂理の建築設計図であるという諺に対して、必ずしも迅速な幸運化、不運化という反論は有効ではない。というのは我々は常に間違って、単に我々の最後の最新の行為に最新の幸運や不運の原因を求めるからである。そして我々はエコーの時のように、我々の声のうちに単に最後の音節のみ反響するのを聞き取る。しかし最後の行為の背後には、その長い先祖や血縁が全生涯にわたって隠れており、それらが我々を贈り物や鞭で迎える。「これは災難だ」（と乙女は言う）　ー　「それともたった一回の虚栄の夕方のせいでこんなひどい償いとなるのだろうか」。　ー　私は答える。「一晩のせいではない、多くの晩のせいだ。借りのある年月のせいで、いずれかの最後の受難の日を無慈悲に迎えるわけだ」。　ー　ある日が長年の分の罰を受けると、まず人間は不思議に思う。しかし代わりにまたその一日は長年にわたって罰するのである。すると人間は二度目に不思議に思うことになる。

それでもすでに民族の諺は更に別の経験を表明している。「不運は一人だけでは来ない」（私は付け加える、幸運も一人だけでは来ない、と。というのは優美女神も復讐の女神同様連れ立っているからである）　ー　同様にギリシア人は大いなる幸運の後は不安であった。我々の中で、大いなる運命が自分の運命に、奇妙に再度介入することに対してしばしば震撼しなかった者があろうか。　ー　星空よりは王座の天蓋をもっと知っている世の紳士達は人生の再来する珍事に幸運と不運の名前を与えている。偉大な人々は（殊に以前は）最も容易に摂理と幸運を信じていた。　ー　ことによると彼らのより大きな行為の人生では万事が拡大された文字でより読みやすかったからであろう。　ー　「汝はカエサルとその幸運を運んでいる」と正当にもカエサルは言っていたが、それも復讐の女神が剣を持ってポンペイウスの像の許に現われるまでのことであった。ルターは神を信頼して、悪魔に勝ったが、彼の復讐の女神は単に死の天使で、この天使が彼を知天使で一杯の国へ連れていった。そこではひょっとしたら炎と憩いがもっと仲良く暮らしているかもしれない。

ここで世紀の英雄が眼前に浮かばないものがあろうか、彼は、右側は戦闘的で英知のあるパラスによってそのメドゥーサの楯と共に伴われているが、左側は重苦しい軌道を貫き通すために幸運の女神によって案内され保護されているに違いなかったのである。この奇蹟の英雄も自ら幸運を信じていて、それ故ギリシア的意味で用心を重ねて幸運を守っている。この男の場合、多くの奇蹟がたびたび現れて、例えば二回[*3]同じ月、同じ日(19)に対の戴冠させ王座を奪う勝利を勝ち得たというのであれば、ひょっとしたら少なくともこ

の英雄の戯れの偶然としてこう述べることが許されよう、つまりナ・ポレオンはポーランド語で「更に勝て[20]」という意味であり、「フランス革命」という言葉は Veto[拒否]の文字を除けば、アナグラムとして「一人のコルシカ人が革命を終わらせるであろう」という意味である、と。

誰も自分が多くの諸精神や太陽の中で小さすぎるといったことで人生史で神への信仰から遠ざかってはならない。風雨にさらされている粗野な太陽の塊は翼のある自我に匹敵し得ようか。実際君の隣の哀れな生きた青虫はその先祖に遡ればアダムに行きつくのである。その先祖は、いかなるノアの洪水や鳥達、四季にもかかわらず、それでも先祖なのであって、本年の葉はこの青虫のために繁ったのである。　ー　一体宇宙の中に何か本当に卑小なものがあろうか。宇宙は叙事詩が詩脚に基づくように、小さな虫の足に基づいているのである。両者が英雄の詩に必要である。しかしその際詩人は炎の中でどんな小さな足[詩脚]をも支配しなければならない。至高の目の前ではどんな小さなものもまた最大のもの、宇宙でなければならない。部分性の無限は価値の無限である。君達はこの真理を散歩のたびにどの緑の葉の上でも見いださないだろうか。例えば最低の蚊でも目や血管が最高の人間よりも劣等に、不確かに用意されているだろうか。自然は惜しむことはない、力も、時間も、分別も、生命も惜しまないし、不確かなものもない、また何らかの外面的生命に対する偏愛もない。自我はニュートンの頭に意識的測量術を与えているように、蜘蛛の頭に無意識の測量術を与えている。

葉とその甲虫の昔からの永遠の構造は常設の摂理であるように、両生物と諸民族の歴史は変転する摂理である。

歴史は幸運と価値の間の均衡ではない、全体の進行と個々の飛行の間のゆっくりとした均衡ではあるけれども。それ故世界史の日時計は、君達の人生という月光の中にいる君達を十分に正しく示すことはめったにできないことだろう。強力に配置された楽器の自然は生きた歌声の自然と一つの譜面の中で一致するべきであると君達は要求する。しかし君達の歌曲は、君達に自由に伴奏する器楽曲とは高く低く全く別様であるけれども、しかし調和がとれているのではないだろうか。

極めて謙虚な心であってもそれでも彼岸的なものに対する率直に信仰した目を有して、未来の花粉や花粉を含んだ雨を自分達の単なる街路の塵と見なさないようにすることが人間にはふさわしい。偶然の機知的思いつきに似たように見える出来事に思いを深くすることが我々にはふさわしい。偶然の機知も人間の機知同様に結局は規則と思慮に基づいているからであり、我々はピラミッドやペルセポリスの廃墟を、例の学者のように、盲目の自然の築山と見なさないようにするべきである。何千年にもわたって磁石が同じ天の方位を我々の肉眼に空しく示してきたというのであれば、精神的エーテルの方向を変える風はどんなにかより容易に我々の視線や感情から逃れていくに違いないことか。間近の人間の場合でもその外見と意思とを区別することは我々には難しいのである。　ー　しかし静かな敬虔な心の中では歴史の神は騒がしい世間の中でよりももっと声高に現れよう。

絶望は唯一真正の無神論である。思慮ある超信仰を抱いて信仰に構えることである。自分の科や品位とは関係なく再来し、精神のように現れ、動くもの、滋養を与えるかあるいは穏やかに癒すマナ[神与の食物]として突然夜中に落ちてくるものに専ら注意を払うことである。自分の最も神聖なものの中にこのような確かさが与えられたならば、信頼し、沈

黙することである。しかし試してはならず、単に敬虔な行為を通じて捉えがたい行為に祈ることである。

罪のない超不幸な者よ（君がこのような稀な場合であれば）君の瀕死の床にあって、途絶えがちの声で、自分の摂理はどこにあるかと私に尋ねないで欲しい。余りに大きな幸運の背後では復讐の女神が罰しながら歩み寄るとすれば、この女神は余りに大きな不幸の背後では報いながら近寄るのである。死にさえすれば、女神が見えるに違いない。

*1　マグナ・カルタをロバート・コットンはそれを全く別の寸法のために裁断しようと思っていた仕立屋の許で見つけた[(9)]。フィエスコの没落はよく知られている。
*2　一七八三年の『ドイツのムゼーウム』、一〇四頁。
*3　現筆者はここで自らの、しばしば証明されている迷信を暗示することにするが、これは何年も前から戯れに抱き、告白しているもので、その出典はというとむしろ自分のささやかな生活史に属するもので、つまりこういう次第。すべての立派な（それに悪しき）事柄は三つではなく（これは真の迷信であろう）、単に二つであり、幸運や不運、鷲、議会の両院、ディオスクロイ[離れがたい友]等は三つ子ではなく、単に双子にすぎないというものである。というのは三番目の者は常に双子の対蹠人であるからである。例えば二回の勝利に三回目の勝利は続かない。

1
小さな薄明かり

A
民衆の十分の一税

蜜蜂の女王よりは養蜂家に似ていたいと願う国父は臣下を蜂のように扱うもので、（Varro、Ⅲ、16　によれば）、蜂が運んできた蜜の単に十分の九が取られるだけで、十分の一は（あるいは十分の一税）は免除されるのである、これは蜂に自ら餌をやりたくないとか、以前行われていたように、巣を硫黄で燻べて始末したくないときの話である。

B
新たな諸政府

新たな諸政府は翼を有していたアウローラの馬車の馬で進む。より長い道を行かなければならない日輪の馬車の馬には翼が欠けている。

C
自主性

馬は駝鳥と同じくらい速く走る。しかし馬は騎乗者の拍車を受ける。駝鳥は翼に棘を有

していて、これで自らに拍車をかけ、刺す。　一一　私はむしろ鳥の方がいい。

D

歴史の品位

ミルトンやヴァルトマン[21]と共に私も喜んでこう信じている。偉大な行為を描くことは（つまりそれにふさわしく）その行為を遂行するのと同じほどに崇高なことであり、作家と英雄との間に違いはないか、あっても少しである、と。それ故我々の民族も再び若干、少なからぬ歴史家によって勃興することだろう。歴史家達は十分にふさわしく我々の民族の敗北と、従ってそれに敗北は勝利なしにはすまないので、最高の栄光を表現するもので、それで我々は常に一人のナポレオンに対して十人の歴史家を対置すればよくて、かくてこれを打ち負かすのである。私自身でさえここでひょっとしたら表現者をまたふさわしく表現していることになろう。かくて名声に名声が重なる。

E

民族の補償

ある国の戦争の傷を、国を拡大したり、侯爵に弁償したりして癒すのは、政治的好意が幸い卑俗な感応療法から借用している方針である。この療法も同様に[創傷用]軟膏を傷口に塗るのではなく、単に傷をつける道具に塗って、かくて癒すのである。

F

何人かの貴族の名誉

自分とは別様に自らの名誉に対して行動し、罪を犯すのが全く我慢ならない貴族、それ故他人ではなく自分に信用借りの金[名誉の負債]を負っている貴族は、全く英国人の利点を得ている。英国人は途方もない国債をほとんど単に自らの許で借用していて、負債者と債権者が同じということで、上述の貴族同様に、真に栄えて戦えるのである。

II

ゲルマン人魂とフランス人[ガリア人]魂[*1]

カール大帝が私を彼の息子のルートヴィヒ敬虔王と見なして、こう嘆く夢を私は見た。「汝らドイツ人はどうして縮んだのか、汝に始まって、私が征服したザクセン人や他のドイツ人に至るまで。私の気質を受け継いでいるのは何と少ないことか。以前は（コンリング）によればドイツ人は私同様に七ラインラント・フィートであったし、少なくともツィンマーマン[*2]によれば六フィート三、五 の長さであった。しかしこのようなポツダム人はどこに見られよう。それ故汝のような信心ぶった者は汝の子供達と共に打ち負かされてしまうことだろう。我らの先祖は何という屈強な体を有していたに相違ないことか。すでにアーデルング[1]がそのドイツ語の正書法の第二版でドイツ人の強壮さ故にその子音が

多い、例えば同志[Genossen]の代わりに昔は Chinothzsson と言ったと述べているのである。

ー　一体どこに今なおカエサルのローマ人が我々の周りに見られるであろうか[*3]、彼らは皆、ただドイツ人の高貴な姿と魂、ドイツ人の眼光によって、何人かのフランス人の陳述によれば、戦争の護民官から下々の者まで大いに恐怖を感じて、号泣し、何人かの者は別れを願い出、他の者達はテントの中で嘆き悲しみ、陣営全体が遺書を書くほどであったのである。ルートヴィヒよ、このようなローマ人に似た者がどこに今なおいよう。まずこれに似たドイツ人がいさえすれば、十分沢山いる（と期待できよう）。　ー　ドイツ人を打ち負かすことができなくて、それ故自分の民をドイツ人に変装させて、それから公然とこの似而非ドイツ人あるいは仮面のドイツ人に勝ったカリグラのような者がどこに見いだされよう[*4]。今でもこのカリグラが見られるが、しかし単に本物のドイツ人を相手にする場合のみである。しかしまさに往時にのみヴィアルダの的確な推測は　ー　ドイツ人の名前についての彼の本、Fr.ニコライ出版四五頁　ー　妥当したのであって、それは Germann は接辞 Ger とか Gar とか Ker、つまり非常にとか全ての意の接辞によって、他ならぬリューゲン島で非常な男、即ち最も素晴らしい者と呼んでいるものしか意味しないであろうというものである。汝はこれに対して汝のドイツ人同様に取るに足りぬ男、私の帝国での大勢ではなく、少数の者に属している」。

ここで夢を終わり、養子のルートヴィヒのことは忘れ、目覚めることにしよう。しかし目覚めてもドイツ人の退化についての同じ嘆きが上がらないだろうか。様々な世紀の、いやそれどころか数千年のドイツ人が比較考量されないだろうか。我々の傍らの全てのヨーロッパの土壌で他の民族も卑小化していることを考えずに、我々はいつも最古のものと同時に最新のものを共に欲して、我々は十分に我々から遅れて暮らしていないし、また十分に我々から進んで暮らしていないという嘆きを結び合わせている。しかし最古のものを　ー　普段は格別尊重しないのに　ー　欲して、呼び寄せる、まさに新しいものが枯れ、最新のものが花咲いているというのにそうするのは民族の永遠の過ちである。

巨人は通常小人同様に頭が弱いものである。パタゴニア人は教授団ではない。小さな体つきのローマ人やギリシア人は大柄な野蛮人を無視していた。我々は新しいドイツ人の利点を売りに出しているくせに、古代ドイツ人の長所の喪失をひどく悲しむ必要はない。精神的な、数世紀分蓄積された文化の酒精は巨大な樽に詰められることはなく、逆に樽から瓶に詰められる。

ドイツで古いドイツの時代を模写し、模倣しているのは、単に民族である。しかしこの民族はその代わりポリフェモスのようにフランス人ユリシーズ[オデュッセウス]よりも一つ目が少ない。顕著なことにフランス人の教養は　ー　すでにカエサルによるとガリアがゲルマニアを覆い尽くして形成されていたように　ー　我々の教養を覆い尽くして育っている。単にフランス人の下々の者とドイツ人の将校を比較してみるといい。殊にフランス人兵卒の粗野は多くのドイツ人守備隊員の野蛮さよりも小さく思えるのであるから。

*1　この論文の文体に非難が寄せられるならば、非難に値するよりは非難を避けるのがより容易であったと述べておく。

*2　その『地理学的歴史』等々。

*3　『ガリア戦記』第一巻三九。章全体を読むべきであろう。これは古代ドイツ人の戦争の内実についての賞賛の記述で、ローマ人の率直さと並んで、それ以上にカエサルの兵団にあってさえも重要なドイツ人について印象深い見解を述べている。
*4　十七世紀でも単なるアレマン人[ドイツ人]の喧嘩[理由のない喧嘩]は殺戮の意味であった、マイエロットによる。

＊

フランス人魂

フランス人の神は瞬間や外観、小部分の神である。万事が彼らの攻撃や勝利のように素早い、万事が彼らの綜合文のように個別で短い。それ故彼らは作品よりも思いつきを愛する。ひょっとしたらこの外観に対するセンスのために彼らはより良い外科医とより劣等な医師を有するのかもしれない。彼らは芸術の個別のものを把握するが、全体は余り把握しない。それ故彼らは機知や英雄的対立、人生の要約の簡潔な図書という個別のものを求める。それ故彼らは現在の音によってではなく、単に過去と未来によってのみ理解される音楽に向いていない。彼らはこの現在の音をフォルテシモとピアニシモに対する偏愛によって（ライヒァルトによれば）欲している。それ故彼らにとって、歌によって話からそらされる場合を除いて、音楽会場は談話室である。というのはフォルテシモの圧倒的な雷鳴かピアニシモの小さな雨音が彼らの耳目をまた奪うまで、何もすることがない、つまり何も話すことがない限り、彼らには余りに退屈だからである。瞬間を享受する友はいつも談話を愛する。談話で耳か口が元気になる。ひょっとしたら舎営したフランス人はしばしば余りに多くを要求して、大いにそのことについて話したり、聞いたりして、それから腹ぺこでベッドに行くのかもしれない。彼らはそれ故詩作の長さよりも行為の素早さのために適しており、(フォス[(2)]による）ホメロスの神々のように、ヘパイストスの足裏を有しており、これが翼の個所の代わりとなるのである。それ故彼らは政治的誕生の際にも天国の回教徒[*1]のようなことを欲しており、回教徒は天国で子供を望むと、子供を一時間のうちに授かり、かつ生まれ育った姿で得るのである。しかしドイツ人の温かさの方がフランス人の炎よりも長く続く。

*1　フリュッゲ『不死の信仰の歴史』第一巻[第二巻]。

＊

ゲルマン人魂

メンデルスゾーン[(3)]は苦痛を常なるものとの別れと定義しているが、彼は少なくともドイツ人の苦痛について正しく記述している。我々は昔からの状況から出ることを好まない。賭けてもいいが、ドイツ人はベッドの中でフランス人よりも寝返りを打つことが少ない。中国人によれば、木がすべての要素の中の要素であるならば　ー　彼らの政府憲法の要素であるように、　ー　この根源の要素を蓄えていることを我々は自慢してよく、自らをほ

とんど木製[不器用]と称していいであろう。しかし木質化は少なくとも、インド人がその最高の存在、不動の者の存在を記しているときのかの完全性に達するための一つの方策である。

不動性に対するこの能力の上に、ヨハネス・フォン・ミュラーがドイツ人に寄せている長所を私は築きたいと思っている。つまりドイツ人はいつも大きな改革、例えば建築や古典文学等々のものを単に余所の民族から導入するが、しかしこれらをその後神々しい形姿に高めたというものである。かくて我々はローマ人に似ていて、ローマ人はすべての敵の民族からその戦争術を採り入れて、ただそのことによって勝利を収めたのである。我々は今この戦争術さえも借用している。ただ雷雨や戦争の最中にやっと避雷針を築いたりしたら、容易に打ち負かされてしまう。それ故、少なくとも火事の二、三日前に消化器を調べて用意するというかの市長の助言ははるかにより合理的であったろう、その後では火事に注意を払うだけですむのである。

こうした遅滞に我々の名誉にふさわしいものを認めるのに私に勝るものはいないだろう。すべての強力なもの、北方的なものは晩成である、頭脳から木々に至るまで。トーツェンによれば、選帝侯は十八歳でようやく成人し、スウェーデン国王は二十一歳で成人したが、これに対しフランスやスペイン、ポルトガルの皇太子はすでに十四歳で成人した。ドイツ人が戦争のすべての秘蹟等を後になって受け取るとすれば、ドイツ人と、第二の洗礼をほとんど大人になってから得ていた先の皇太子達の間にたいした違いはない　ー　あるいはドイツ人と、人間がすでにこの世の生を終えた歳に、つまり九十九の歳に割礼を受けた父祖アブラハムとの間に、あるいは両秘蹟を　ー　我々の最も小さな子供達よりも何十年も後になって得たキリストの最初の弟子達やキリスト本人との間にたいした違いはない。

しかしドイツの政治的緩慢さは平和の中で深い底を築き、豊穣さを残している。セーヌ川は十五マイルほどしてようやくパリからほんの半マイル離れているサン・ジェルマンに達するけれども、その代わりかなり長い道のりを経ているだけに一層豊かになり役立つようなものである。しかしかくて悪しきものは良きものと結びつく。戦争は素早さを欲する、平和が緩慢さを欲するように。戦争は、　ー　それが良きものならば　ー　耕し、種を蒔く。平和は育て、水をやり、守り、時間を欲する、戦争が永遠を欲するように。戦争は永遠へ送り込む。

木材という中国の源要素は我々の許ではいろいろな現象となっている。一つの現象は、我々は国家の番人に、都市が市門の番人をそうするように、活力を失った老人に任せるのを好むということである。老将軍が王座を守っている、老俗人が市門を守っているように。

より良い現象は、我々がクセノフォン[(4)]によるスパルタ人のように戦争に対してゆっくりとしていることである　ー　戦争のときゆっくりしていることは勿論より劣等な現象であろうが。　ー　しかしタキトゥス[(5)]によれば素早さは臆病を証し、ためらいは持続する勇気と確固さを証しているそうである。

そのかぎりで我々は敢えて紋章のある武具を持ちたいが、それは昔のトラキア人[*1]がその貨幣に記していたもので、つまり投げ槍のことで、これには勇気の印に、キリストが十字架、墓、天国へ行く前に乗っていたかの動物の頭部が付いているようにしたい。しかしこれがなされるのは単に、古代の人々は印された動物を打ち負かしがたい動物と呼んで

いたからにすぎない。

再び悪しき現象に戻ることにしよう。我々ドイツ人はすべてを長ったらしく、長時間、退屈に話す。我々はレーゲンスブルクでしばしば高い書類の山を必要としてきたが、それは単に二つの母音を、つまり然り[ja]を発するためにすぎない。三つの母音、然り[oui]を遣うフランス人達は、直に終わっていた。我々はエスキモーのように（言語についてのモンボド[7]によれば）「沢山」というために短い言葉、wonnaweuktukluit を遣い、「少々」というためには更に短い言葉、mikkeuawkrook を遣っている。しかしこの水っぽい多くの単語を遣っても、同様に水っぽい女性の言葉がその精神性を失っていないように、我々の精神性も失われるわけではない。ちょうどガル博士によれば、四ポンドの水で一杯の頭全体がそれでも偉大な魂の力を宿しているようなものである。勿論フランス語が、単に五〇〇の単語を有する彼らのオペラの辞書に似ているとすれば、その代わりドイツ語は真の多言語の言葉に似ている[*2]。

*1　『一般辞書[6]』第七巻、二〇頁。
*2　本の中でほどこのことが的確になされている所はない。[K.W.Kolbe]『ドイツ語とフランス語の語彙の豊かさについて』、ライプツィヒ、レクラム社、一八〇六年。ドイツ全土にかかっているドイツの価値の立派な輝かしい戦勝アーチである。

＊

フランス人魂

どの三つの事が戦争で最良の事であるか尋ねられたら、三回続けてこう答えることができよう。速度[8]、それが戦争では人間の力学として、素早さの尺度であり、力の尺度である、と。このこともフランス人は、　ー　結婚生活を除いて　ー　万事を早期に素早く始めて、立証している。戦争は一つの馬上試合である。しかしすべてのヨーロッパ人が馬上試合をまずフランス人から、戦争の辞書を得たように得たのであった[*1]。　ー　フランス人は冥界の王を自分達の先祖と見なしていた[*2]。戦争がその影の帝国を最大に拡大するものであるならば、子孫にふさわしく自分達の先祖をよく考えていることになる。冥界の王[プルートー]にはただ黒い動物のみが犠牲に捧げられたというので、黒い宮廷服や流行色から精神的色彩に至るまでその類似性を考えだそうとしたら、それはむしろ冗談というものであろう。　ー　ひょっとしたら彼らの頻繁な戦場は彼らの立派な外科医の養成所となったかもしれない。

フランス人の戦争力にはその精神的若さと肉体的若さの選抜がある。ドイツ人の場合、自分自身がもはや立っておれなくなるほどでなければ、それ以前に数千[幾つか]の連隊に命令し、配置を命ずることが許されなかったとすれば　ー　要するに、侯爵を除いて、何百万回も髭をそって貰ったことがなければ、それ以前に一軍を賢明に指揮できなかったとすれば、フランス人はむしろギリシア人に似ている、ギリシア人は（ヴィンケルマンによれば）軍神マルスを全く若く、髭なしに描いたのであった。　ー　ひょっとしたらそれ故多くのドイツの兵士の若者は、できるだけ上手に昇進の年齢をあるゆる種類の娼家や妓楼

で禿になったり衰弱したりして大いに先取りし､遡らせようと試みているのかもしれない。ひょっとしたらそれ故また、多くのやっと髭の生えた兵士の若者はさながら自分達の若さと顎の仮面として頬髭を伸ばして披露しようとしているのかもしれない。かくて　ー　月桂冠がカエサルにあったように　ー　頬髭が禿を全くよくカバーすることになる。

*1　ピストリウスのドュフレーヌによる､『愉快な法律史論叢　全六巻』
*2　カエサル VI. 18.

＊

ゲルマン人魂

その者達自身を相手に、つまりドイツ人を相手に描写しがたい人間の階層というものがあるが、ドイツ人の許ではこの階層が多数を占めているからで、この階層はいつも我らの角張った地球に存在していて、それは単に、全生涯やすべてのタボルの山、テンペの谷を不毛な平板なリューネブルクの荒野に変え、打ちつぶすためにすぎない。つまりこの人々は　ー　例えば偉大なる自由国家のように　ー　古いものが存続するのを望むことはなく、日常的なものが存続するのを望んでいる、この日常的なものは自由国家にとって時に大いなる変革となりうるものである。

魂のこの精神的乞食教団に別の教団が鋭く発言するとすれば、こう言うことだろう。「これは人生に対して、人生を送り、それから従来の儀式で人生を去り、また別の者が始めるということしか望んでいない。その際これは必要な工場組織、政府組織を要求し　ー　更に自身が有するほどの哲学や詩、無私、利己を要求し、青春時には青春の過ちを、それからしっかりした大人の男を要求している」。　ー　この人々の心室はどのような陶酔も寄せ付けない紫水晶のように見える。いや感激した当人も彼らを前にすると拒絶され、色あせて、痩せるだろう。ちょうど霜のときにはどんなに太った顔も痩せた顔に縮むようなものである。七世紀イタリアで死滅させたあくび病をかの無感動な者達は、できることなら、精神的にまた我々の許にもたらすことだろう。

彼らによれば人間世界は永遠に今までの通りである。ブランデス[(9)]が精神のこの凍えて焼け落ちた者のことをその『時代精神』の中でこう主張して語っているのは残念なことである、つまり人類の進歩に対するカント的、フィヒテ的（本来ヘルダー的）信仰がまさにドイツをこれほどまでに後退させた、と。このようにして宇宙を　ー　というのは何故我々の中央惑星がまさしく最劣等で何も変わらないであるべきなのか私には理解できないからで　ー　不治の者達の病院としてしまうのは、不死への不信仰と同様に単に救いようのない不信仰にすぎない。自由の精神にとっては　ー　下僕のような肉体とは対照的に　ー　進行する劣化とか、いや改善の方が絶えざる不変性の沼よりも容易に考えやすい。幾つかの民族には進歩を認めざるを得ないのであれば　ー　冒涜的懐疑的言い方をしてよければ　ー　似たような民族のたまたまの過半数が、持続、沈下に勝る増大する高貴化を獲得し、確定することがないとどうして言えよう。　ー

ちなみに確かなことは、今なおこの卑小な地上でなされてきたすべての偉大なものはた

だ地上での隆盛に対する熱狂的な信仰からのみ生じたものであるということである。ただダナイデス達の世界史のみがあるのであれば、ロビネ[10]の憎むべき見解、つまり常に万事は、善と悪、真理と誤謬、幸福と不幸は、地上に二つの等しい部分として水平にかかっているという見解が妥当するのであれば、すべての犠牲は無効になってしまう　ー　すべての英雄は目標のない、よじ登る夢遊病者となり　ー　時代は単に囚人達の代わる代わるの交替となり　ー　地球は職責務のない聖職禄となり　ー　人生は狂った羊の回旋病となる。

しかしこの件はきっと別様であり、神は単なる悪魔の代わりに本当に存在するであろう。

＊

フランス人魂

フランス人は、夙に女性の神々の従者、偶像の従者として著名であったが、これまで我々ドイツ人を、すべての国民の中で最も敬意を表する女性同様に丁重に扱ってきた。彼らは我々に対して女性に対するように最も快適なことを言うと共に奪ってきた。彼らは礼儀正しいことと命令とを、利己心と優美さを一致させてきた、要するに多くの者が、ポーランド人には似ず、ポーランド人は（シュルツ[11]によれば）子音のせいで眼前に厳しく叫ぶように現れるのであるが、生活では優しく穏やかであるのに対し、彼らはむしろこの二つの点で逆であった。

＊

ドイツ人魂

次のことはまさしく利点にしろ欠点にしろドイツ人の平均性の象徴である。ほとんどすべての国民が、自分達の名前を　ー　いずれにせよ国土を　ー　ある病気に貸し出さざるを得なかった、イギリス病、ポーランド病、ハンガリー病が知られている。それに（さながら四ヵ国の代父を置くかのように）フランス病、アメリカ病、スペイン病[*1]、ナポリ病が知られているが、しかしドイツ病はない。しかしその代わり、新ドイツもない、新フランス、新イギリス、新スペイン等々はあるけれども。　ー

*1　梅毒は昔のドイツ人の間ではスペイン痘瘡と呼ばれている。

＊

フランス人魂と同時にドイツ人魂

ドイツ文芸に対するフランス人の批評には、我々が学問の分野で戦場同様の敗北を認めたがらないという厚かましい苛立ちが見られる。またフランス文芸についてのドイツ人の批評にはドイツの文芸の勝利という極めて大胆な祝典を通して政治的敗北に対する苛立ちが現れている。「少なくとも」　ー　とこう書かれる　ー　「誓ってどんな君主も、その

臣下の文書が我々ドイツ人を強く満足させ楽しませると命ずることはできない。我々は本の中で大胆に剣を鞘から抜いて、我々の心臓の有り様を、さらには趣味の有り様を示すことにしよう」。現筆者も皇帝に面と向かって　ー　この本がその面前に現れるのであれば、　ー　筆者は幾多のドイツ人の作品を（筆者自身のも例外ではなく）多くのフランス人の作品よりも、特にその中の惨めな作品よりも高く置き、評価していると宣言することにする。しかし筆者は自分の大胆さのいかなる結果にも言いようもなく冷静に対処するものである。

＊

ドイツ人魂とフランス人魂とカトリック魂

新聞の検閲は新教主義と合わない。ただフリードリヒ・ヴィルヘルムは後世に対して一七一三年から一七一四年[*1]のすべてのベルリン新聞を取り上げた。しかし後のプロイセンは戦争の最中にも敵の攻撃同様に執筆者の攻撃も甘受した。読者を信じていた。それだけに一層奇異に思えるかもしれないのは、フランス人達が　ー　あたかも外国での戦争は故郷での革命に似ているかのように、そしてまたこの上ない検閲の自由があれば、戦場での自分達の勝利よりも何か別のものを紙上に載せることを許すものであるかのように　ー　快適な真実の洪水の最中に鬱々としてどんな不快な真実をも新聞から追放し、それに加えて執筆者も追放しているという事実である。フランス人達は我々に対しては　ー　自分達の勝利[*2]という最も真実らしい報告に対する最終的不信の他には　ー　何も案ずることはないので、それにフランス人達が三六五日間、そして戦場の全地理を通じて称賛されていたいとは思えないので、だってカエサルやフリードリヒ二世すら自分達の敗北を自ら広め、永遠化したのであり、それでこうした自由の拒否権、新聞の検閲で感じられる意図は、我々ドイツ人を敏感にするという意図、つまり書き手と読者とを調教して、劇場でのフランス人のようにただ半分、あるいは八分の一の言葉で全ての考えを理解し、穴から取り出すようにするという意図に他ならない。事実新聞記者は見る見るうちにより繊細に紡ぎ出している。ただしかし残念ながら繊細な者はより繊細な者によって勇気づけられるというよりは罰せられており、私は半ばげんなりしている。

他面ではまた驚くことに　ー　いつでもフランス人は鳥のように飲食の間に賢くおずおずと見回しており　ー　商人達の相場記載帳が、即ちこの国家の外科診断書、告解メモ、喜劇ポスターが自由に出回っている。どのような取引の新聞も生来政治的新聞といえるからである。商人は意図しない新聞記者である、新聞記者が更に強力な商人であるようなものである。

侯爵達の行為が余り目撃されるべきでないとすれば、国は韓国[*3]といったものにならないだろうか。ここでは国王が路地を行くとき、窓やドアが閉められなければならないのである。それ故それらはまさに開けられなければならないだろう。

最近私は『ドイツ人の国民新聞』の中で　ー　ほとんど重複のタイトルであるが　ー　ある侯爵[12]がその小国に政治的会話を禁じたということを読んだ。周知の格言によれば、守られた法律は守られなかった最良の法よりも良いのであれば、この法は良い法律であろう。サン・マリノ程の小国である国で法は罰せられずに破られることはまずないからであ

る。しかし大国家では、古代ローマとかイギリス、フランスでは、政治的対象に対する、即ち祖国についての遠近の関係に対する箝口令は、政治的礼拝の禁止に他ならないだろう、あるいは相場にとって取引禁止を話すことの禁止、あるいは宗教局にとって禁止された段階について話すことの禁止に他ならないだろう。とても大事な安寧について、つまり広範囲の安寧について関心をもって話すことには非難する代わりに報いるべきではなかろうか。君主たるもの、その市民が処罰によって、冷たく黙って統治国家に対処する、従って君主自身に対してそう対処するように強いていいだろうか。侯爵達よ、歴史を顧みるといい。市民達に愛されるのは、どのような非難をも許す侯爵達を措いてない。プロイセンの国王達のことを考えてみるといい。

本来全面的禁止は、政治的専制行動を政治的会話と取り違えることに他ならない。専制的行動にとって禁止と処罰は自明のことであるが、しかしこの取り違えは単に革命のときにのみ取り違えと言えないものである。

ちなみにモニトゥール紙[(13)]が購入者に対して（過半数を傷つけずには）自らの出自と異教の風とを禁ずることができないのであれば、そしてそれでも自らの昔の破廉恥な説教は今や何の害もなく読まれるのであれば、モニトゥール紙が、昔の民衆本のように本年印刷と印すことによって何か害があるだろうかと尋ねたい。

*1　グドリングの『生涯』参照。
*2　小さな不運を隠すことによってフランスの新聞は幸運への不信の種を蒔いてきた。この不信は結末と和平条約によってようやく消えた。新聞がこれまで証明してきたことは、フランス人は自らを称えるとき、真実を語っており、何も言わないときは、真実を言っていないということであった。そもそも二つの敵対する勢力の通常の戦争報告では、それらが墓をまた埋め、自らの凱旋者を、ローマ人がそうしたように、凱旋車で更に飾り、敵の凱旋者を少なくとも当地では誹謗するかぎり、両方の読者の党派は同じ程度の不当な不信と軽信とを分け与えることになる。すべてを語れば、人々はすべてを信じてくれよう。自己崇拝にさえ自己中傷によって信者を作れるであろう。
*3　ド・ラ・ポルトの『旅行』第六巻。

＊

最後のフランス人魂とドイツ人魂

ひょっとして我々兵站係、荷物運搬人からフランス人が見習っている長所の一つに我々の逃げ足、軽快さ、しばしばの移り気というものがあろう。これまでフランス人達は、硬直とまでは言えなくても、頑固で、多くの点で唯一の新たなカトー達であった。かつてはいかに長いことデカルトの哲学を保持してきたことか、更に今なおヴォルテールの哲学を保持してきたことか。いかに彼らの聖なる悲劇の三人の王、つまりコルネイユ、ラシーヌ、ヴォルテールが全くの不動の祝典、世紀にわたる文学の流行全体を彼らに与えていることか。彼ら、この多くの不動のものの発案者、常備軍からステレオタイプに至るものの発案者は、悲劇のときと同様に、関心（彼らの昔からの楽しみごと）の一致を目指して働いて

いる。どんなに重要な最新のことも、彼らに影響を与えることはなくて、与えるのは最も重要な最古のもの、彼らの名前である。夢遊病者はピストルの発射で目覚めることはないが、自分の名前では目覚めるようなものである。

これに対置すべきは、我々ドイツ人という曲芸師、エーテルの綱渡り師、我々ヨーロッパの瞬時の塩[機知]、帝国共同体から帝国共同体に至る輪廻者である。余りに固定した耐火性のフランス人に対する我々の判断でさえ、我々は一世紀のうちに五回変えている。ルイ十四世のときの我々の判断、それからルイ十五世のときに変えた判断、それから国民会議のときにまた変えた判断、それからコミューン会議のとき、それから最後にナポレオンのときに変えた判断を考えてみるといい。一方十六歳のフランス人は今の九十歳のフランス人とは大して変わらず我々のことを話すであろうし、これについては私は勿論称賛の方がより多くて、追従はより少ないだろうと予想している。ある時は我々はゲルマニクスや（イギリスの紋章の）獅子に似ていた、これらの二、三の雄鶏の鳴き声が我慢ならないのである。ある時はまた革命のとき、回転する風見鶏が我々の羅針儀となったり、あるいはペトロの場合のように懺悔日の説教師となったりしたが、しかしこれは単に、我々が我々の君主を　ー　否認しないということについての懺悔であった。

かくて我々はいつでも容易に、我々を絶えず携えて行く時と共に進んで行く。まず文学のことを考えるがいい。今までどの民族もかくも立派に軽々とわずかな復活祭の市の間に、さながら二つの高跳び用棒の上にいるかのように、三つの哲学的体系を通って、つまりきちんと三つの審級、あるいは三つの悟性の活動[14]、カント、フィヒテ、シェリングの活動を通って進んでいったことはない。何とすみやかにカントやフィヒテの倫理的厳格主義から最新の者達の審美的政治的自由主義に移っていったことか。何と巧みに我々は自分達の好きな詩人達の間を飛び跳ねて、容易に（余りに自負することはしないが）最新の詩人から、中世を飛び越えて、古代の詩人達に戻っていくことか。しかしフランス人は最近と古代のこの跳躍の点で我々の模倣を拙劣にするか、あるいはほとんどせず、その中間で座礁して、例えばヴォルテールに落ち着いている。我々ヨーロッパの活発な丸いおはじきは、イタリア人やイギリス人についても同様な過度な重さを主張できよう。

勿論、これまで我々を一つの皇帝の都市や首都の意見に縛ってこなかった我々の個別の分裂した帝国憲法のために、我々にはどの民族にもなる自由、ドイツ民族にすらなる自由が与えられていた。かくて我々は十分に多面的にコスモポリタン的になり、すべての世界の国民となった。それ故我々はどの国でも別様に呼ばれる。ゲルマン人とかアレマン人とかテデスコ人と呼ばれる。我々がもっと自分自身に惚れ込んでおれば、すべての地理学的人名簿には、我々がもっと評価するような諸民族の美点は存在しないであろう。

しかしどの美点をも好む人は、自分自身を数えても時に一つの美点しかもはや見つからない自宅にはほとんど留まらないものである。勿論我々はすべてを真似る、我々自身をも真似る。従って我々は以前模倣者というよりは原像であり、コピーというよりはオリジナルであった。最大の天才も自分より他の者は真似ないようなものである。　ー　我々の民族を他の民族に移し、他の民族を我々の民族に移すには、同時に劫罰を受けた者と浄福の者とを運ぶカロンの昔の渡し賃で十分である。要するに我々はヨーロッパの真の模倣者、伴奏者として、すべてを我々の中に取り入れたがっている。我々が犠牲を供え、香を焚く我々の祭壇はポータブルで、それを我々はすべての諸国で行商し、それを任意の神々の前

に供える。我々をオランダ出稼人よりは世界の出稼人、巡礼者として、すべての岸辺の流氷にしているのは、同じような敏捷なドイツ人の血に他ならないのではないか。国外追放は（我々には陽気なザクセン風緩調ワルツで）我々にとって、それで神々を失うことになった古代人とは違って罰ではなく、素敵な報酬であり、親方になるための遍歴時代という贈り物である。しかし知って欲しいのは、諸国や人間を変えることほど、我々の逃げ足の観念を十分に思い知らさしめるものはないということである。この変化はまた流行や風習の必須の交替を用意しており、これはダンスにまで至る。このダンスでは我々は外国の豊かな一揃いの踊りを真似て踊っており、それで我々のドイツのアルマンド[ドイツ舞曲]ですら外国の名前の下で出現することになる、アングレーズとかエコセーズ、ポロネーズ、カドリル等々である。実際単にこの面から、どのような外国の幻日であれ、そのまた幻日であろうとする我らの努力を評価するとすれば、もっと我らの名誉は増えることになろう。我らの社交の広間が外国人の美点や風習の鋳型陳列室となれば、笑い事ではなくなる。我々は我らの多面性ということに関して　ー　動物とは対照的に　ー　すべての食事やすべての気候に耐えるという単なる人間に似ることになるからである。外国に対しては外国の流行の模倣者であるけれども、我々は自国では自国の流行の対極者であって　ー　つまり単にもっと変化を強いている。というのは他の人々と同様でない人は、まさにそのことによって他の人々となるからであり、新しい流行に同調しないということは、最新の流行をもたらすことに他ならない。

ちなみにそれ故我々をヨーロッパの猿と呼んで、ヨーロッパのより高貴な真面目な陰鬱なオランウータンと呼ばないのでは、どの動物学者も正当と認めないことだろう。

オランダ人はドイツ人の堅固な密接な商社員なので、なぜ七つの地方[オランダ]は十の圏[ドイツ]の跳躍の真似をわずかしか、それに下手にしかせず、一覧払手形よりも別な手形[変化]を引き受けて支払おうとはしないのか、そしてなぜオランダ人のすべての政治向きの力業は　ー　あるいは文学的力業でさえ　ー　我れのと比べたらほとんど歩調とはいえないものであるのか、ひょっとしたら尋ねたくなるかもしれない。しかしまさにオランダがドイツの道化師であるのであれば、ドイツはまず本当の曲芸師であろうか。道化師はすべての曲芸師の空中の業をわざとまことに不器用に演じて、かくて後から登場する曲芸師がその対照でそれだけ一層立派に輝くようにするのではないか。

ひょっとしたら今やもっと以前より戦争のことを自慢してよく、両民族は互いにその捕虜よりももっと何か自由なもの、独自なものを交換して、かくてフランス人の鈍重さと沈殿物はドイツ人の揮発性の精神と混じって、両国民の間で国民的天秤の傾きが人間性の平衡へと戻るような具合になっていると言えよう。さながら頑固な軍神[マルス]と軽快なヴィーナスの和合である。ただ変わりやすいドイツ人はこの件をもっと固着したフランス人にとっていくらか辛辣なものにしている。というのは印刷された『即席ラテン語[入門]』があるように、ドイツ人は即席ドイツ人たらんとして、現今の世界史の天球の譜面ごとに、「急いで譜面をめくれ」と弁解しながらめくっているからである。上述したように、人生においても舞台においても、場所と関心の一致を主張するフランス人とは違って、我々は単に三番目の一致、時の一致を我々のために採用し、配慮して、すべての我々の喜劇的悲劇的変化を最短の時間に押し込める。その戦闘を伴った我々の悲劇はしばしば舞台上でも人生でも同様にすみやかに演じられる。

更にドイツ人の快走帆船の証明をして終わりにしよう。

クロプシュトックやカント、フィヒテ、ヘルダー、ヤコービ、シラー、それにすべての高貴なドイツ人の読者が　ー　プラトンやルソー、モンテスキュー等々の読者はいうまでもなく　ー　突然その空の広がったエデンの園から当世の作家の奴隷市場に足を踏み入れ、そして読者がそこから、ただ人間にのみ息吹を与え、動物には息吹を与えない教え、自由な人間の精神について、享楽の犠牲について、またすべてのより高貴な魂がこれまで有してきて、分かち与えたすべてのことについて、幸福のときには牧場から目を上に上げ、不幸のときには砂漠から目を上に上げるすべてのことについて、ただ人間を互いに尊重し、人生を尊重するように教えるすべてのことについて語る教えで一杯の耳と心とを持参するならば　ー　そして読者が突然奴隷市場では金や取引や政治的機械制度、腕に諸民族を抱いた熱い観念のモロク達[子供が犠牲に捧げられた]の呼び声しか耳にしないのであれば、このような読者は、その胸の広く抉られた傷口に、ドイツ人と時代とがすみやかに崩落するのを感ずることであろう。米の不作のために突然穏やかな畑から魚油やアザラシの毛皮、氷の眺望で一杯のグリーンランドのパオに投げ出された婆羅門という按配で、この婆羅門は単に物質的比喩のみをかの感情に対して述べることができよう。

このようにすみやかにドイツ人は哲学的主の祈りを、魔女が福音書の主の祈りをそうするように、逆に唱えて、魔法を行おうとする。

上述の取引に関しては、我々はこの点で真のユダヤ人である、我々がユダヤ人のように商取引を行い、望んでいるからというのではなく、立法家のモーゼが、今ではユダヤ人のやめようと思っていない商取引を、ユダヤ人にまさに禁じたからである。古代人は商取引において商取引そのものを評価したことはなかった。岸辺のために商取引が有利であったギリシアで商取引を行ったのは奴隷である。商業のカルタゴでは軽視された商人は市民の許には住まず、隔離された地区に住んだ[*1]。偉大な古代人や古代の偉人は、それどころか高貴な不毛さを卑俗な有益性よりも尊重した。ちょうど彼らの聖なる杜では[*2]（この意味では英国庭園も）単に実のならない木々が植えられていたようなものである。単に精神的内実やより高貴な犠牲の力が過大に評価される限り、これは商取引よりは戦争に向いていて、この点で外面上でさえ商船は軍船を前にして旗を降ろすのは正当なことである。名誉より利益を求めるのは容易であり、戦うよりも勘定するのは容易である。最小の戦争である決闘は自らに大きな商取引よりも倫理的犠牲を要する。商取引は（とモンテスキュー[15]は言っている）諸民族を結び付け、個々人を分裂させる　ー　戦争が、私の言では、その逆であるようなものである。　ー　そして国民が商人根性であればあるほどまさにかの分裂がヨーロッパの植民地では一層残酷に現れており、例えばオランダ人やイギリス人はデンマーク人やフランス人よりもこれまでのところその植民地の人々を厳しく取り扱ってきた。兵士の利己心は商人の利己心に比べて小さい。すでに兵士は　ー　犠牲の祭司よりは夙に犠牲の動物で　ー　必須の気高い自己犠牲によってその短い享楽を買い求めるからである。商人は何度か今までその印刷された商業の報告や嘆きで、いかにあれこれの小品の実入りは少ないか、自分が投機上有利なときに獲得する希望を抱いていたときよりも我々顧客から得るものはいかに少ないか述べたものである。何千人もの顧客のこの幸運についての嘆きを通じて商人は客の目に二、三の涙を誘い出せると思ってきた。　ー　勿論涙は、笑ったら、浮かぶだろう。しかし筆者は動ずることなく涙は出ないままであった。

しかしかの人間の分裂を防ぐために、商業国家は同時に自由な国家でなければならない。そうなると国家における利害が商人の利害をどの個人とも均衡がとれるようにする。

商業の自由は行為の自由がなければ、無意味であるか害がある。自由なイギリスやオランダ、ハンザ同盟、その北方の後咲きの花や秋の花を考えてみるといい。政治的自由と商人的自由は互いに要求し合い、癒し、補完する。トルコではフッガー家は不可能である。彼らは一五三四年から金貨や銀貨を印造することが許された。イギリスでボルトンが銅貨を許されたようなものである。しかしかの専制の地では、単に頭部の代わりに胴体が刻印されよう。かくて例えば、ローマ人は単に奴隷達と国王達という商品しか扱わなかったというのは地理学と時代の一つの偶然であった。勿論勇敢さがすべてを無料で得て、売り渡すところでは、どんな商取引も欠けてしまうだろう。

今何人かの作家達が我々を狂人のように押し込んでいる従僕の拘束チョッキ、非常チョッキについては苦痛あるいは軽蔑故に黙っていることにしよう。私は前もって牢獄の賛美者としてのラン ゲ(16) であるよりは、バスティーユ牢獄のランゲでありたい。というのはすべての奴隷根性は単にその根性を愛することにあるからである。ソクラテスのような人が牢獄を支配する。勿論多数の人は別で、まさにその多数という名前のせいで、多数の人は専制主義の黒い洞穴の中で互いに毒を盛っている。それ故これまで最大の諸国家は専制政治であったし、ローマのようになった。ただ最新の国家のみが珍しい諸状況のせいでその例外となっている。最高位の中国人あるいは高官が本や命令を記している竹簡でもって、中国の皇帝はその高官を憂愁の騎士に零落させたり、一億以上の人々を羊の群れに落魄させている。

ペルシア人の許では、犠牲を捧げるとき、神々から自分一人のために何も望んではならず、皆と国王のために同時に望まなければならなかった[*3]。この風習は自由の最も美しい定義である。人間の安寧にとってこれを個々人の観念の下位に置き、従属させることほど、危険なものはない。理念がまさに最高の広大な安寧を目指す場合は別である、つまり自由がその結果であり、条件である人道主義というまさに消されない性格を目指す場合である。

勿論全能の、脱生化させる死同様に、単一化、平等化、直線化は簡単である。ある老人は曲線を、どの部分も残りの部分に影を投げかけない曲線として描いた。直線はいつでも影を投げかける。自由の線は美曲線同様に曲がっている。鎖でつなぐ線は、引きつけて保つどのバンドもそうであるように、厳格に真っ直ぐである。ある一人の者の観念の許で数千人の観念が亡くなる。

まだ我々は自身より他に恐れるべきものは少ない。未来は現在によって脅かされるよりはもっと約束されている。　ー　少なくとも我々がもっと　ー　フランス人を模倣する場合、約束されている。

これは冗談でもなく、向こう見ずな命題でもない。祖国愛のことを私は話しているのだから。フランス人はどこで会おうと同胞を熱く愛している、その際更に　ー　ひょっとしたらまさにそれ故　ー　自分の君主を愛している。フランス人は英雄的に自分の兵士とその君主を擁護する。　ー　しかしドイツでは祖国愛の木蔦は周りの土壌よりはむしろ王座の上の方に伸びていく。つまり我々はいつも偉大な侯爵を　ー　地理学的にか英雄的にか倫理的に偉大な侯爵を　ー　必要としていて、ようやくその君主を頼りに祖国を愛する。

まだ我々に対して　ー　上述した侯爵の影響を別として　ー　幸運がフランス人達に対して残したほどの、いや添えたほどの祖国愛を不運は与えていない。それとも金や商業や戦勝運、戦略、愛国心等の欠如についての我々の紙上でのあるいは口頭での訴えは、愛国心を立証するのであろうか。他方この愛国心は　ー　少なくとも小国や、比較的大きな国々での遠くの田舎の外塁では　ー　入魂の炎で、つまり全体や市民階級に対する無私の犠牲等々によって活動しているとはいえないのである。例えば、多数の者の戦争の難儀の際に、自らの肩を荷受けのために差し出す代わりに、誰もが肩を引き抜いて、皆の難儀が担がれていないと単に嘆くのである。

しかし君達ドイツの君主よ、君達の愛国的影響の力は、君達に、ただ単に君達が君達をまことに　ー　愛するよう仕向けることによって、君達の王笏をドイツ民族の創造的魔法の杖とするよう呼びかけている。国父のために生き、そして死ぬことから祖国への生と死が生ずるようにするためである。父親がその子供達に愛を要求するのは単にその子供達の子供達に対する将来の子供達の愛の保証、源泉としてにすぎないのであれば、君達侯爵はドイツに対して、愛するドイツ人を残しておくことだ。君達の王座はこれまでしばしばドイツ人の眠るケスティウスのピラミッド[17]だった。王座は将来、陰鬱な集雲の気象境界となって欲しいものである。　ー

*1　アグリッパ『女性の高貴さと優越性について』［ベーレントによればこの引用は正しくない］。
*2　ポッター『考古学』
*3　ヘロドトス　Ｉ. 132

2
小さな薄明かり

A
より高次な国家同盟

オリュンピア競技のためにすべてのギリシアの民はその戦争を止めて、楽しく平和にミューズと血を流さない諸力のより素敵な戦いに参加した。今困窮や空間、王座、更に戦場のために敵対して分かれているドイツも、また高いミューズの山、つまりその下で地球は小さくなっており、上では単に詩文と英知の太陽のみが出現しているミューズの山での民族同盟へと結ばれて欲しいものである。ドイツの詩文や哲学は、アテネ人がスパルタ人に、スパルタ人がメッセニアの戦いで自分達の司令官を欲したとき、嘲って送ったというびっこの学校教師テュルタイオスに当たるのではないだろうか。私が言うのは、スパルタ人は詩人で勝利を収めたからである。

B

より安価な大砲

かつてローマ人は（ヴィンケルマンによると）ハドリアヌスの墓場でゴート人に対して、立派な彫像を攻囲軍に投げおろすことによって防衛しなければならなかったということを考えると、我々は今や、単に生きた彫像、つまり人間を敵に投げ出しさえすれば、より安価に、ほとんどただで防衛することができるということであり、一層喜ばしく思える。

C

専制君主の推し当て

世紀が続くにつれて暴政や圧政は我々にとって分かりやすくなっている、ちょうどがらがら蛇が年々新たな警告のがらがらを身に付け、それで正体を告げるようなものである。かくてある程度､他人の力の進行と自分の衰弱の進行に対して洞察力の進行が対置される。今やある民族が思いがけず従僕になることはほとんどない。

D

侯爵達に対する呼びかけ

中国の皇帝達は重要な行動をとる前にはいつも昔の前皇帝達に犠牲を、さながら模倣の問いかけと依頼として捧げている｡我々のドイツの侯爵達は過去の彼らの偉大な先祖が、かつての両手で指示し、合図している立姿を目にしていないだろうか。侯爵達よ、彼らの墓は君達の祭壇である、この祭壇にはただ不正だけを犠牲にして欲しい。　一　彼らの棺は君達の聖遺物箱である、この箱の上では正しいことしか誓えないはずである。

E

戦争の利益

戦争生活が人民にとって多くの精神的内容を投げ棄てるのであれば、子供の時分から高齢になるまで戦争にしか行かなかったような個々人は、他ならぬ老いたカモシカ猟師や老いた死刑執行人に似るに違いない。その一方は命の危険を冒して、他方は法の命令の下、破壊する者達である。しかしそれでもその両人とも晩年にはほとんど穏やかさが残っていないだろう。同じようにティムールにとって民族の涙は単に彼の心を化石にする（大理石を張る）水にすぎない。血の雫、涙の雫を彼は紅海、白海として船で通り抜けてきたのである。

Ⅲ

戦争に対する宣戦布告[*1]

私は奇妙な事実を読んで以来、よく口にしている。つまり私はこの世ではバンベルクでシュテファン教授[*2]が耳から槌で叩きだした以上の太鼓を使うべきではないと願っている、ほとんど聞こえないと仮定しても。しかし残念ながらベローナ[ローマの戦の女神]に

とって現在生きているエウロペは広すぎて突撃の太鼓を使えないということはない。女神は次々に大陸の皮を剥いで、連隊太鼓の上に皮を張っている。

戦争に反対して書くということは、勿論印刷紙上で厳しい冬やあるいは原罪を鋭く非難するようなものである。というのはこれまで歴史の章は戦争で一杯であり、平和はその下で若干の注を形成してきたからである。創世史以来悪魔のこの永久機関は破壊史を築いている。平和はこれまで戦争という砦の前の単なる別荘や庭園からなる花咲く郊外にすぎず、戦争が機会を見つけては撃ち落としてきた。古い歴史では一二〇年戦争[フランスとイギリスの？]というものに遭遇するけれども、蒼古とした飽き飽きした平和に遭遇することはない。

それでも戦争に賛成する言葉は、戦争に反対する言葉が実りのないものである以上に救いのないものであろう。今の時代、ヴォルテールの『アンリアード』では機械仕掛けの女神である人格化された不和が今日の叙事詩ではまたプロンプターとなっている時代、（ささいな戯れの言葉がそれ自体ささいな戦争劇にふさわしいのであれば）、釘付けにされた[頑迷な]頭と釘付けにされた大砲とは同じことと見なされようとする時代、民族のすべての花が鉄の轍の上の軍司令官の鎌の戦車の下敷きになる定めの時代におけるほどに賛成の言葉が救いのないものはない。勿論雄弁で詩人肌の歴史記述の民族は、戦争を継続する責任を若干、その戦争賛美の演説という共同の継続に負うている。もとより雄弁家にとって　ー　それ故若い俳優と老いた侯爵は同じことを欲するが、　ー　平和的侯爵より暴君を描くことの方が容易である、ピアノの初心者が長調を最も好んで演奏するようなものである。すべての善なるものは空と同じくわずかな色彩しか有しない。好戦的侯爵より平和的侯爵を描く方がもっと知識を必要とする。

しかし人類も、すべての人間に似た動物　ー　犬や馬や象、この我々の側で共に戦う動物の[巨人]ゲリュオンや地獄の番犬と共に　ー　永遠に戦場と戦時体制に立っていることだろう。そして永遠の平和のための平和の説教は何の役にも立たないとしても、それでも私は説教を行うことだろう。意志に改善の余地はなくても、ひょっとしたら判断には余地があるかもしれない。

*1　この宣戦布告は『レヴァーナ』Ⅱ、一八八頁等の別の宣戦布告の単なる補遺と考えて欲しい。

*2　この男は、槌と呼ばれる耳小骨で恣意的に鼓膜を叩いて、それで他の人々もその音を聞き取れるというほとんど信じがたい情報が、フォークトの『生理学雑誌』第九巻、第六篇五四一頁に載っている。

＊

勿論クロプシュトックでさえも、自由なスイスが、あるいはタタール人に倫理的ヨーロッパが襲われることになれば、最も荒々しい戦争による傷と炎への自分の賛同を述べなければならないだろう。攻撃する野蛮人が、単に姿を見せるだけで勝利して、うなだれて従う民を細い奴隷の鎖につないで、捕らえられたライオンのように背後に引っ張っていくの

を認めたくないのであれば、そうするだろう。

勿論攻撃戦の後には放逐戦が続くことになるが、残念ながら攻撃戦が放逐戦に見えることがある。攻撃は最良の防御であるからであるばかりでなく、政治はまた予防戦争の形もとるからである。つまり国家の正当防衛で、個々人の正当防衛に似て、個々人は自分を待ち伏せしようとしている殺害者に前もって待ち伏せしていて、致命的打撃を与えようとするが、しかしこれが失敗すると、また殺害者を然るべき正当防衛の状態に置いてしまいかねないのである。哀れな我々人間である。我々の悪徳は（ここで殺害が殺害を組織するように）我々の徳操よりも互いをより必然的に組織化する。永遠の平和を弁護し、今永遠の平和の眠りにあるカント[(1)]の防衛のような、胸の中、頭の中の防衛の中で、人はこう主張することが許されよう、つまり人類は、愛の神が同時に殺害の神であってはならないのであれば、いつか永遠の平和に達しなければならない、と。戦争は遂には自ら戦争で倒れる。戦争の完成は戦争の否定である、戦争はその強化によって短縮されるからである。シュヴァルツ[黒]が　ー　これはその火薬と火薬の目的や買い手を予言した名前であるが　ー　今やすでに戦争の時間を戦争の力の中に融合させているように、将来はもっとうまく行って　ー　それでシュヴァルツは、　ー　戦争の力が力学同様に時間と反比例して増大するのであれば、　その別名、コンスタンティン・アンクリッツェン[絶えずパンと鳴る]を再び得ることになる。結局今のように七年戦争の代わりに七日戦争が生ずるのではなく、三十年戦争の代わりに三十時間戦争が生ずるに違いない。機械工のパリのアンリは　ー　認可された　ー　散弾銃を、つまり一回装薬の後十四発続けて撃てる銃を発明した。　ー　化学と物理学の測りがたい発展の下、遂には地雷のように一発で会戦を始め、終え、それで敵は単に二発目を撃っただけで、夕方頃には戦役は終了しているというような殺戮兵器が発明されることはないと誓える者があろうか。かくて将来の天国の鍵は　ー　これに相当するものとしてマホメットは剣を挙げたが　ー　我々が陰鬱な空の下でも青空の下でも必要とする下界の空の鍵ということに今以上になろう。毒はその器を、胃液が食べ物のない胃を侵食するように侵食することだろう。善なるものは発生するためには時間を必要とする　ー　悪しきものは滅びるために時間を必要とする。永遠の、時間のおかげで癒えることのない非倫理は、人類の非人間性への組織化ということになろう。平和で地球は終わらなければならない。というのは平和で地球は始まったからで、直線が曲線よりも古いようなものである[*1]。それ故ひょっとしたらそのために、黄金の平和な時代の誕生日であるサトゥルヌス神の祭のときには宣戦布告は許されなかったのであろう。

常備軍は互いに増強し合って、それで結局国家は武装に疲れて、一致してその重装備を脱するということになり得る。現今の武装した中立、つまり平和の代わりに、アンリ四世の意味でのより高次の中立が現れる。小さな地球上では単に一つの国家があるべきで　ー　倫理と政治の間の、人間愛と国土愛の間の、内向きなイギリスと外向きなイギリスの間での醜い争いは消えるべきであろう。　ー　しかし必ずしも一つの普遍的王国である必要はない、これは少なくとも内戦を許容するであろうからである。そうではなく、十三の合同の属州からなるというよりは、数千の属州からなる一つの普遍的共和国、あるいは地球の一つの侯爵同盟、国家同盟、それに連邦組織であるべきである。このようなことが全く不可能であると思うのは、教養ある諸民族の中央広場を野蛮なままに取り巻く未開の諸民族の証明されざる持続を前提としているのである。しかしロンドンが村々を次々に自分の

路地に編入していくように、絶えず漸次、文化は広範囲の野蛮を自らの裡に解消していくものである。まずはせめて一大陸が自ら純化し、秩序正しくなってしまえば、残りの三つの大陸では王笏がやがて大砲の球抜き用の棒から生じて、機械仕掛けの爆弾を、現今のように作動させる代わりに、作動させなくするだろう。すべての戦争は不信心の者に対するマルタ島騎士団[(2)]の戦いにすぎないわけだから、戦争はマルタ島騎士団の戦争のように止むことだろう。

*1　曲線は直線に由来する。直線はむしろ中心部にあって隠れているが、曲線は表面を走る。S．シュトランスキー『生理学的等々の対象の照明』一五四頁。

＊

何ということか。倫理は決闘命令を単に個人にのみ与えて、諸民族には与えないつもりなのか。倫理は数百万人の戦いよりは決闘に立ち合うべきであろう[逆？]。というのは決闘はむしろ名誉を生み出し、数百万人の戦いは不幸を生み出すからである。

地上の不幸はこれまで、二人が戦争を取り決めて、数百万人が戦争を遂行し、耐えているということにあった。しかし数百万人が取り決めて、二人が戦った方が、結構とはいえなくても、ましであろう。民族[(3)]はほとんど自ら全戦争の荷を挫傷の上に引き受けて、平和の素敵な果実の籠はわずかしか引き受けず、しばしば月桂冠をピッチ[照明用]の輪で購っているので、　ー　それに民族は殺人の籤に肉体と財宝とを賭けて、最後の籤のとき（平和の籤のとき）しばしば自らを引いたり、あるいは空籤となったりするので、分捕る少数の者がはるかにしばしばその負け組の多数よりも莫大な犠牲と流血を取り決めることになるからである。現在戦争は多数の者のためではなく、ただ多数の者に反して、そしてほとんど多数の者によって遂行され、耐えられているとすれば、　ー　しかしこれも司令官がすでに自らの民族に強募を始めなければならず、そしてこの強募はあらゆる財宝を利用してよく、ちょうど火薬工場長がザクセンの硝石を使っていいような按配で、その気になったところで掘り求めてよろしいが、しかし夫婦の下ではいけないという段階であるとすれば、　ー　確かに現在の国は、豊かにするよりは犠牲の多い戦争に対して、かつての野蛮な飢えた民族よりははるかにゆっくりと同意していることになろう。この飢えた諸民族は手にフォークとしての剣を有していていくら食べても満足しなかったものである。　ー　貧しい強壮なスイスは、豊かなハンザ同盟同様単に防戦するだけで、攻撃することはなかった。新たな諸国を得ての国家の隆盛はしばしば民衆にとっては十字架を上げることにすぎない。実際百万の人間は、更に百万の者が支配のために来るとき、より良く支配されると期待できない。これは一人の教師に生徒を増やしてより良く教えることを教えるようなものである。侯爵にとって自分の手や腕が長くなっても、まさにそれ故視力は短くなるであろう。　ー　それに自分や他人の所有欲は、つまり戦争の間近さは、鷲の爪と獲物が大きくなるにつれ増大する。帝国の村々は以前帝国の町々よりも併合されるのはまれであった。侯爵が諸中隊から新たな中隊を買えば、より長い国土は敵の球にとってより当たりやすい長い九柱戯の柱となろう。どの諸国の案件も侯爵自身にとって単なる戦争のトランペ

ットへの契機にすぎないということ、それに余りに多く有する者ほど、飢えている者はいないということを民衆も知っていよう。フリードリヒ大王は全体的に立派な例外の例であった。彼は国土を広げるよりは高くして、かくてオーストリアは巨大な山脈に、ロシアは赤道の山脈になるためには、大王の真似をして、自らを平和的に征服する他必要ないことを示した。フリードリヒが自分の戦争の現在のフランス人の模倣に自分の平和の模倣を見いだすとしたら、全能の力に対してどの力が抵抗するであろうか。

いやはや何についてであれ、何のためであれ、しばしば戦争が布告されてこなかったか。つまり苦しみの平和を分娩するために、何年にもおよぶ陣痛が諸国に指令されなかっただろうか。　ー　諸国を増やすためとか、まとめて分割する諸国のためといったものではなく、アフリカ的理由のためであった。つまり二人の黒人の王[*1]が、野蛮な戦争を、二人の妻達が所有して被りたいと思っているヨーロッパ製のグラナダ織の帽子のことで互いに始めたのであった。何ということか。何と多くの戦争が全歴史の中でグラナダ織の帽子のためにグラナダ織の帽子を通じて行われてきたことか。しかし誓って。対の侯爵の肺葉が国家を飛膜として付着して、彼らの呼吸がモンスーンのように人々を動かすということで十分ではないか。更に偶然の病的鼓腸が哀れな国家船の旋風として加わる必要があろうか。しかしこれには喜ばしい副次的見解が見られる。というのは摂理が個人の神経や繊維の蜘蛛の糸の許に、すべての人民を、ジュピターの鎖[(4)]さながらぶら下げたり、奴隷の鎖で引っ張っていて、それでも地球はこの偶然の全能の下、我々の目にしている太陽より一段高い太陽の周りを回っているのであれば、きっと多くの摂理や多くの神がこの糸の混乱の中で支配し、治めているに違いないからである。　ー　しかし全能と全知の　ー　両言葉は一つの意味であるが　ー　無尽の救いは地球を血の小球の上に置くことがありうる。しかし無分別で鈍重な人間は偶然を国々の王座に置いてはならず、単に普遍的法のために行ってよく、この法に反して行ってはならない。戦争は、と君達は言う、偉大な民族や偉大な人間を発展させ明らかにする、ちょうど雨のとき遠くの山々が見えるようになるようなものだ、と。そうだとすると我々は偉大な民族だけを有しているだろう。すべての荒くれた民は教養層まで戦ったからである。ザイームやティマリオ[(5)]は、トルコ人の許で彼らの騎士領のため絶えず戦闘に従事し、子供のときは籠の中にいて、老人のときは輿の中にいて従軍しなければならないのであるが、彼らは共同の精神的巨人の会合といえるであろう。しかし何世紀も人民の血の中というよりは血の上を船で渡っていった最も偉大な好戦的民、ローマ人は結局どこで降りることになったか。ローマ皇帝の王座の下、王座の虫類としてであった。長いペロポネソス戦争がスパルタ人を作ったのではない、しかし多分リュクルゴスが作ったのであろう。偉大な民族は単に偉大な人間の許でのみ生ずる。ある偉大な観念、一つの律法は民族を戦争の年月よりも発展させる。プロイセンの王国は短い戦争によって、戦争の中で形成されたのではなく、この短い[七年の]戦争の背後で、戦争にもかかわらず、長い平和によって形成されたのである。ただ我々には平和の冬穀は、鬱陶しい戦争の夏穀同様に容易に見える。しかしクセルクセスとの不滅の戦争がまずギリシア人を創ったのではなく、ギリシア人が戦争を創ったのであり、戦争はギリシア人を前提にしている。

戦争は、平和そのもののために導かれても、平和を失うか、平和を奪ってきた。これに対して偉大な律法家は　ー　これには偉大な兵士ではなかった何人かが、モーゼやソロン、

リュクルゴス、キリストに始まって、存在したが　ー　別な民族を鎖につなげることはなく、自らの民族を解放している。マホメットの戦争による占領さえ、それ以前に彼の宗教的占領が基になっていた。

人々が更に平和の効果の他に戦争の効果と混同しているものは、戦争の理由、あるいはそのために戦争が行われる観念であるが、この観念はしかしまた平和、例えば宗教とか憲法に属するものである。平和を愛するスイス人はオーストリアやフランスに対するその稀有の勇敢さを長い戦争から得たのであろうか、それともむしろ祖国愛から得たのではないか。　ー　革命下の女々しい不慣れな戦争の新参者達にとって勝利の力を創ったのは、最初の遠征であったろうか、それともむしろ自由の炎ではなかったか。極めて長い平和そのものは、スイス人の例が示すように、利己的に臆病に軟弱にすることはなく、仮死状態の国家に炎のような観念で息吹きを送らず、国家を孵化することのない統治方法が軟弱にする。専制的オリエントは永遠の戦争と同時に永遠の無気力の中で暮らしている。しかしイギリスでは陸戦もなく、臆病も見られない。

*1　ツィンマーマンの地理学的『旅のポケット版』[一八〇二年五九頁]。

*

「平和は人民を軟弱にする」と、錯誤と真理が平和に共存し、自ら隠れん坊をしている公共の広場の一つで言われている。ある肉体的軟弱さは空腹に耐えられないが、別の軟弱さは飽食に耐えられない。寒さに耐えられない軟弱さがある一方、汗に耐えられない軟弱さがある。気候による鍛錬は大抵部分的である。古代ドイツ人は単に空腹と寒さに耐え、南方の民はむしろ発汗と渇きに耐える。しかしどの民もその気候上の軟弱さと鍛錬の双方を通じて、対峙する民に別の弱さと別の強さを見せる。ちなみに戦争は平和よりも大してより強壮に鍛えない。というのは平和は農夫や海の男、商人、職人に、つまり多くの者に鉄剤入りの乳清を、幾年かの戦時の短い、享楽で中断される辛苦が兵士に飲ませるよりも長く飲ませることになるからである。それに鍛錬ははるかに強壮化に劣る。モンゴルの民は鍛錬を有するが、ケルトの民は強壮化を有する　ー　とマイナースは証明している。戦争が与えることができるのは鍛錬のみで、強壮化ではない。

弱虫のアルキビアデス[(6)]はペルシア人とスパルタ人を同様に上手に演じた。すべての時代の司令官や侯爵がその身分の溶かすような雪解けから真っ直ぐに運良く、戦争の厳しい狼月[十二月]に入って行った。新たな徴募兵達[(7)]もロシアの気候の間近な所でロシアと戦った。豊饒な暑いアフリカからの遠征のカルタゴ人はフランス人同様に寒いアルプス行軍に耐えた。彼らは従ってカプアでは自分達を去勢し、軟弱にするような肉体的に新奇なものを何も見いだせなかったのである。しかしカプアの影響そのものが証明しているのは、戦争によって兵士を強めるのは、(譬えが許されるならば)　ーー　下着によって強めるのと同様もろいものであるということである。

それだけにプロイセンの平和のような、短い、戦争や軍備で置き換えられた平和な時代を、国家機械に対する解体的パパンの[骨をゼリー状にする]機械と見なすのは一層奇妙で

ある。冷たい太陽や乏しい食料、わずかな金、永遠の仕事に関して、軟弱というのが全く皮肉というものではない場合のことであるが。その他にも戦争や人間性にとって、以下の主張、つまり七年間の辛抱がかくも短い間に消え去るとか　ー　人間は皮膚を鞭で打たれて初めて硬い皮膚を得るとか　ー　喜びではなく苦痛のみが苦痛に対して強くするとか、何人かの英雄の種を蒔くにはまず国々を墓場へと耕し直す必要があるとかいう主張は嘆かわしいものであり、真実ではない。

しかし軟弱にし、魂の要塞工事を取り壊してしまうものを、戦争と平和は同じように上手に送ることができる、つまり観念に対して享楽を支配させることである。肉体は長患いで、柔らかく、軟弱で女々しいかもしれない。しかし例えば母親の心を入れてみたまえ。すると肉体は山城となって、子供達はどんな嵐でもびくともしなくなるだろう。乙女の心に愛の火をつけると　ー　ハンニバルの心にローマ人への憎しみを点すようにすると、ー　乙女はアルプスを越えて、死ぬことも殺すこともできるようになる。従って平和は観念によって　ー　それは自由であれ、宗教であれ、名誉であれ　ー　さながら勝利する精神の前に、甘やかされて、享楽に飢えている肉体を馬としてつなぐことができよう、ちょうど戦争がこの観念なしには精神を、鍛えた肉体の中にさながら甲冑をまとった患者として仕舞い込むようなものである。　ー　絶えず戦火が続いても皇帝のローマ人はより頑固になって燃え尽きてしまうことはなく、世俗の黄金との汞和によってただより流動的になって溶けてなくなるだろう。

ちなみに支配的な享楽という脂肪の染みは、大理石の柱に見られる脂肪の染みのように、絶えず侵食して行き、巨人における致命的な箇所、つまり竜の血を浴びて角質化したニーベルンゲンの歌のジークフリートに見られる、強壮化の血を浴びている際に百合の葉[8]で覆い隠されていた小さな傷つきやすい箇所を露呈することだろう。というのは嘘や略奪や殺害は自ずと自らの敵を集めて、かくて自らを妨げてしまうように、享楽欲も自らの隣に単なる類似の者を見いだして、大気中の毒のように、仲間によって大きくなるからである。

しばしば未来のウリヤの手紙[9]となる講和条約締結にもかかわらず、一般的には、どの平和もより強固な平和を作るために単に犠牲にされるものと前提できよう。平和と戦争の中断はより高次なものと関連している。しかし平和が勝っている。永遠の戦争は永遠の平和とは全く違った具合に衰弱させるであろう、ちょうど全生涯をただひたすら戦場で過ごした人間は死の天使というよりは鳥の性質、百舌[殺害者]の性質を帯びるであろうようなものである。

平和に対してその善行を偽造し、貶してしまうのは、まさに平和は古い戦争の傷を閉ざし、新たな傷への準備をするという言い草である。大きな国家がせめてその戦争の薪の半分を平和の薪へと消費しさえすれば、この国家がその半分の費用を、非人間を形成するためではなく、人間を形成するために使いさえすれば、半分を迷うためではなく、発展するために使うならば、人民は全く別様に、より強く立脚することだろう。

小さな、より平和なアテネは世界のために、殺害の巨人ローマより何とはるかに多くのことをなしたことか。神がそれに反対してキリスト教と北方を送っていなかったならば、狼のローマは世界に対して泡を吹きながら猛り狂ってひたすら多くのことをなし、世界に傷を次々と付けていたことだろう。自ずと戦時の力が強くなれば、この力はやはり同じように強くなろうとする別の敵対する力を少なくとも消耗させる。これに対して平和時には

諸力は諸力の許で一層高くなるだけで、一つの力も消滅せず、すべての精神的時計仕掛けがますます長い時計の時報へと巻かれる。

かつて例えばアレクサンダーや十字軍の戦争が学問の種蒔き機械、打穀機械であったとすれば、今や争いの斧が認識の木[10]に打ち込まれている。平和であればその木を倒さずとも木を収穫することになり、その木に、埋葬された死体でするよりももっと安上がりに肥料を与え育てることができよう。勿論民族の発展は、ユダヤ人の家族のように、血の犠牲を払って、その最初の荒々しい段階を越えていくことになるかもしれない。しかしより高度の発展は、キリスト教と同様に、肉体的犠牲よりもより高度の犠牲を必要とする。『象形文字』の立派な著者[11]は、中国や日本の例を挙げて私に反論しないで欲しい。さもないと私は平穏なスイスと不穏なイタリアを反論として挙げることになろう。この著者がまたこれらの例に対して統治形態を挙げて反論するならば、彼の立証している国々に対して私も同じことをする。専制というものは、その魂の泥土から剣によって盛んになることはない。

勝ち組の民族を二つの部分に、戦争を率いる部分と戦争で苦しむ部分とに分けると、ひょっとしたら苦しむ部分が敗北や鍛錬等々で大部分を占めるかもしれない[*1]。しかし博愛の侯爵は単なる平和によっても　一　人間を殺さずとも　一　同じ力を自分の臣下に発展させることができないだろうか、つまり侯爵は単に厄災や欠乏、徴発、いや服への若干の暴力行為を臣下に経験させればすむのである。侯爵は税を徴発へ引き上げることができないだろうか。どんなに容易に穏やかに侯爵はすべての、戦争による強化を血を流さずに享受させることができることであろうか、例えば兵士を宿営させる代わりに、ただ市民自身を営舎から追い出せばいいのである。（損害は同じであろうから）。　一　敵の行軍の代わりに味方の休養の年を、都市の類似の攻囲の代わりに、都市の守備を、戦時運搬の代わりに夫役運搬やもっと同様のことを選べばいいのである。侯爵が自らの名前で、攻囲された諸都市で草木がほとんど育たないのと同じ程に、あるいはそれ以上に鹿や他の人々を通じて緑を刈り取るようにさせたら、正規の糧秣徴発や救援の草の王冠[*2]に値するものではなかろうか。

*1　『平和の説法』参照。［八八三頁下段参照］
*2　パンキロルス『遺物論』周知のように要塞の解放者達には、攻囲の間、要塞内で育った草の王冠が渡された。

＊

戦争の毒に治癒力があるとする信仰は、単に新たな威勢のいい民族によって圧迫されたり受胎させられたりした衰亡の民族の歴史にその真実性を置いているにすぎない。虚弱者の血を抜いて、動物の血を注入して虚弱者を新たに元気付かせたように、野蛮な民の注入によって衰弱した民は強化された。かくて時々ヨーロッパは打撃によって堅振礼が施された[*1]。かくて戦争は、取り替えられた民族が戻ってくるべく、民族の[悪魔に取り替えられた]奇形児を鞭打った。ちょうど悪魔のすり替えた奇形児が、すり替えられた子供

を悪魔が戻すまで、鞭打たれるようなものである。　ー　しかし我々ドイツ人はまだ取り替えられていないし、悪魔によってこの事態に置かれているようにも見えない。

教養ある民族は戦争によってひょっとしたら教養の風土的独自性をお互いに交換できるかもしれない。しかし交易や本、旅行、現今の一般化によって、人間という神々しい似姿の戦闘的像の来襲は　ー　単に似姿を新たに描くためならば　ー　無くてすむのではないかという質問が自ずと生じよう。個別の諸発展は全体の紛糾を補うだろうか。それとも戦闘的諸力の花盛りはすべての平和的諸力の凋落を補うだろうか。　ー　ちなみに私は比較して長く戦争に明け暮れるローマよりも短い生活のギリシアの方により多く偉大な人間を見いだす。フランス革命以来どんな会戦も単に一人の新しい偉大な男の母球根あるいは産婆となっているのであれば、また戦場の沢山のされこうべの地と引き替えにいつも一人の偉大な頭脳を購ったのであれば、不幸中の幸いと言うべきであろう。しかし時代は目下その時代の人間達よりも偉大である。偉大な男達は大抵自由の広場、受難の学校、学問的平和の学校で育ってきた、戦争の学校では育たなかった。ソクラテス[12]は戦争に参加して初めて、三十人の暴君や毒杯に抵抗する術を学んだのではなかった。

勿論戦場は何か偉大なものが育ち芽生える肥土を有する、単に棘で育つひもサボテンに似ていて　ー　それは戦場の英雄である。

*1　あるいは棒によって叙任された。一つ注があれば二番目は必要ない、さもないと注は終わらない。

*

しばらくの間英雄達の平和的観察をしてみて、賛嘆は後回しにしてみよう。大砲の閃光を前にして、以前百姓達が稲妻のたびにしていたように、むやみに帽子を取るという新聞共同体が人民の間で、いや人民の支配者層に至るまで、次第に下々の方から育っているだけに尚更のことである。そのため現今ではまた、中世同様に、天才というのは戦争の投石機を操作する術のことになりはじめている。

多分現今の国家にとって偉大な将軍は神の贈り物であろう、現今の野戦病院にとって偉大な軍医が神の贈り物であるようなものである。しかしその見かけの偉大さやその偉大さはどこに存在するのであろう。勿論下々の者にとって、ベッドの中にいて、国々を国々で掛け算をしたり割り算をしたりする一人の男は崇高に見える。というのは下々の者は思案済みの大きさを思案中の大きさに、対象の大きさを努力の大きさに数えるからである。この基準によれば、測量士にとって太陽の動きを計算することは燕の動きを計算することよりはるかに難しい。ジルバーシュラーク[13]は燕の動きにその計算器で追いつくことはできなかったのであるが。同様に単なる数の大きさでラビ達の神話は[*1]　ー　他の民族の事柄や像の大きな神話とは対照的に　ー　びっくりさせて描こうとしており、ラビ達は商人や子供達のように神や地獄等々の大きさを数字に求めている。

同様に賛嘆の妄想も、それが一つの舌小帯に民族や馬、馬車を引き入れ、支配することを英雄の力の中で偉大なものと思うならば、卑小なものとなる。というのは、王座の先端

に収まって、この舌先の力、筆の力を得ているのは、ほとんど自分の王笏を握れないほどの極めて小さな若い小男であるからである。一人の王座の子供が完成した国家の計算器、紡績機械を操作できるのである。エペソの神殿の放火犯[15]は神殿の多くの建設者よりもなお不滅な存在となった。この放火犯がいなければ、神殿は今、現に暗示者にとってそうであるように、多くの倒壊した神殿の中でかくも多くの言及の対象となることはなかったであろう。

しかし戦場の英雄はどんな王冠を被っているか。教皇のように三重の王冠である。最初の王冠は戦争の静力学、力学の数学的王冠である。ロンドンでは船に乗ったことのないジョン・クラークが自分の新たな海戦術のわずかな部数を試し刷りさせた　一　若干の購入された部数がイギリス海軍の法典となって、書斎の人間が椅子の上で世界の海での勝利を分配したのである。後に将軍が不名数の代わりに名のある人間達を師団実例[割り算問題]で積み上げることになる同じ数学的力を、立派な戦略、戦術の記述者は本来、地図を見ながら、在宅で所有していたのである。多くの偉大な将軍はチェス、この戯れの数学、推理計算をとても好んで理解していたという『アナスタジア』におけるハインゼ[16]の見解はここから説明できるかもしれない。この面を考えれば、英雄を描くには、英雄であるよりも時にもっと力を必要とするであろう。ニュートンやラ・プラス[17]は彼らから応用の戦争幾何学を学ぶ者の最初の王冠よりももっと高い王冠を得ている。

*1　例えばどの地獄の住まいにも七〇〇の穴があり、どの穴にも七〇〇の隙間があり、どの隙間にも七〇〇のサソリがいて、どのサソリにも七〇〇の関節があり、どの関節にも一〇〇〇樽の胆汁があって、劫罰を受けた者達を苦しめるのである[14]。フリュッゲ『不死への信仰の歴史』第一巻。

＊

しかし将軍は第二の王冠を頭に被っている、勇気の王冠である。臆病と勇気は伝染する。しかし民族が臆病になるのはごく稀でしかないことが容易に証明されるのであれば、軍勢は将軍に、将軍が軍勢に与えるのと同等の勇気を与える。そもそも数千の輝く軍人の目に囲まれた高台にいて、そこから遁走するのは難しいことである。大勢の前より一人の前で臆病になったり、他に何か不名誉なことをしでかすことの方がより容易い。軍勢を前にしているときより、王侯を前にしているとき、青ざめる者が多い。更に勝利者は名付けられるが、[大勢の]勝利者達が名付けられるのは稀である。命令に従う者より命令を発する者の方が名付けられる。そして戦死者達の月桂冠は生き永らえた者達に遺贈される。全く英雄自身、丘の上に立って、自分の不滅性を他人の死によって勝ち取るのを目にしながら、自分を下々の者に対する本来非凡な者と見なすことはできない。この下々の者は自分のむき出しの頭を栄光もなく大地に沈める者であり、英雄にとっては分数の分子に値するものである。しかし名声なく死ぬことは、名声によって生きるよりももっと栄誉ある勇気ではなかろうか。にもかかわらず、下々の個々人の勇気は、流血の翼にのせて、大勢の者が地球の前の天へと無事に運んでいく非凡な個人の勇気ほどに顕彰されることは決してない。

下々の者はその将軍同様、栄光を単に一塊の大勢を通じて得る。しかし大勢の者とか数千の頭脳と心とが一つの理念と一つの力に溶解し、合体するというこの不滅性の称賛は永遠の栄光であって、これは宇宙の中で兵士達よりも早くに諸太陽を率いるように命じていた全く別の存在に属するものである。

あるフランスの兵士は（ある逸話集によれば）ライプツィヒの劇場で上の桟敷から見ていたフランス人の将軍に対する賛嘆の人々の視線にいくらか立腹したそうである。「ふん、何が偉大な男か」とそのフランス人は賛嘆者達に対して答えた、「我々（フランス人）は皆偉大なのだ」。しかし彼はひょっとしたら虚栄心と同等の正当性を有していたかもしれない。

真の勇気は劣等な民族や善良な民族、新兵やそれどころか動物に対して浪費された戦時の勇気や負傷の反抗心ではなく、平和時や家庭内、王座の前、長い不幸に際しての勇気である。しかしソクラテスやカトー、古代キリスト教徒のこうした要塞を精神の周りに築くのは単に宗教や英知、性格である。何人かの英雄は家庭内とか断頭台では臆病者であった。しかし真の勇気は若干の危険あるいは通常の危険に抵抗するものではなく　ー　というのは誰も臆病の余り、自分が容易に攻撃する重要な危険を察知しないということはないからであり　ー　そうではなく、すべての危険や通常でない危険に抵抗するものである。このような精神の樫の木を植え付けるのは平和であり、原則であり、自由である。モンテスキュ[18]ー は言っている。女性は家庭を治められないが、しかし多分王座では治めることができよう、と。（つまり一人よりは多くの者を良く治めるということである）。多くの征服者や将軍も同じような具合で、控えの間の個人や自分自身よりも外国の大勢をより大胆に支配するのである。

英雄の第三の最後の、従って最高の王冠は現在の嵐の中での分別である。ただドイツ人の冗長性のみがここで読者に、危機における戦闘的分別と平和的分別を比べて吟味するという簡単な仕事を奪ってしまうかもしれない（その代わり辛抱というより煩わしい仕事を課すかもしれない）。

革命の血塗られたコミューン会議を前にして、君は首を刎ねられるという言葉を聞いた後でも、しっかりと冷静である者は、すでに死や没落を前にして戦いに勝っていることになる。

＊

フランス人の国王達の遠征を旅行と呼ぶ[*1]昔のフランス人の語法を一つの純然たる真理にしてしまう世紀の英雄はそれ故、この英雄が自分の将軍達とは共有しない全く別な、より稀なる諸力によって自分の月桂冠を求めているのである。一つの高い王座に登るのは、それに座しているよりも多くの努力と運動を要する。　ー　アレクサンダーやカエサル、カール大帝、フリードリヒ二世は単に不可欠の英雄であったばかりでなく、すでに孤独な英雄であった。革命以来いかに多くの有名な将軍が忘れ去られているか、このことが戦場の名声の内実を明らかにしている。ちょっと昔のオーストリアの戦争やフランス、イギリスの戦争で、何と偉大な将軍達が、王笏や文筆を通じて墓場の外に遠く身を置かないかぎり、その犠牲となった軍勢の後を追って埋葬されたことか。ツィーテンやティリィ等々は

その圏外では、つまりかなりの時代を通じて、何とありふれた人間だったことか。　ー　後の事例はその魔力の圏外でのどの芸術的天才にも妥当する、例えば子供の天使のようなモーツァルトに妥当すると反論する人がいても、まさに次のことは認めるだろう。つまり単なる将軍はそれ自身では少しも偉大な性格や人間ではなく　ー　というのは偉大な人間はその全本性や生涯を越えて伝わっていくからで、　ー　巧みな芸の過剰な太った若枝であるということである。芸術家は普遍的存在である必要はない、しかし偉大な人間は普遍的存在でなければならない。

*1　マイナース『女性の歴史』第二巻。

＊

シェークスピアが将軍達を描いたとき、その原像よりも若干多く力を有していた。いずれにせよこの原像達の仕事は俳優の仕事同様に短い瞬間と、副次的俳優の共演とに依存しているのである。偉大なソフォクレスがそのアンティゴネ故にサモス島での将軍職を得たとき、これは単に周知のように二度とこれ以上のものはない彼の仕事への報酬であった。アイスキュロスが自分の墓石に詩人としての名声ではなく戦争の功績を記させたとき、これはひょっとしたら謙虚さ故であったろう。

＊

本が征服者達を征服し、説得することはないであろう。しかし征服者達への有毒な賛美に対しては語るべきであろう。シェリングは「征服者のほとんど神聖な権利」について語っている。しかし彼にとって不利なのは、この件に関してアレクサンダーやカエサルに面と向かって同じ事を自分達のために主張した追剥達がいることである。しかしまたこの追剥達はマルクス・アウレリウス皇帝を有していて、有利である。この皇帝はダルマチアで捕まった盗賊達を兵士に昇進させたのであった。

「私は一つの理念を有する」とソクラテスは言う、「それに私は自分の人生の安寧と人生そのものを賭ける、他人の人生を賭けるわけにいかないから」。　ー　「私は一つの理念を有する」と征服者は言う、「それに私は民族や村々、諸都市を賭け、私の領民や敵の領民を血への渇きや肉への飢えで満たし、トゥルトゥル[拷問]という名でない余所の村や、惨めな[外人]路地という名でない余所の路地[*1]には我慢ならず、サハラ砂漠を倍にしてみせる[*2]。一つの理念のためにはそれだけのことをする覚悟がある」。しかしこのことは征服者が哲学者よりも理念を利用していることを立派に証している。カリグラは単に切り落とすために、民の一つの頭を欲した。征服者は単に被るために、一つの精神的頭を欲している。しかし歴史の説教はすべて何の役に立とう。すべての血の滝によって流れ寄せられた、あるいは結合された国々　ー　例えばアレクサンダーやカール大帝、野蛮人やオリエントの怪物達の国々は　ー　決してまとまって残ったことはなく、しばしば結合を手伝った国々さえも後には分割し、引き裂いたと常に歴史は繰り返し述べていないか。刺し

傷だらけの、剣によって互いに結ばれた国々はいつも、それを保っていた血染めの手が死を前に沈んでしまわざるを得なくなると、またそこから滑り落ちてしまうのだった。国家はガラスに似ている。最も厚いガラスが最も容易に暑さや冷たさの中で砕けるのである。

歴史や血の呻き、あるいは投石の叫び声は一体何の役に立とう。アレクサンダーのような人間はローマの民衆のように国々に飽きる前に喜びに飽きてしまうことだろう。アレクサンダーならば、跳ね橋を架けられるのであれば、小さな地球の小さな衛星、つまり月にきっと満足しないであろう、まさに此岸の惑星帝国の首都たる太陽を目指していて、そこで征服の後、シリウスの軍用地図を要求して、そのため実際征服者達には（きつい言葉となるが）ユダヤ人の言う（アイゼンメンガーによる）我々キリスト教徒と同じ運命が待っていることだろう､キリスト教徒には別世界で罰として歯が二十二エレに伸びるのである。自らを養うよりは守るのに適した歯である。

巨大な国々に驚嘆する者達に尋ねるがいい。どちらの国がより幸福で、より堅牢で、より賢明であったか、大きな国か、小さな国か。アテネやスパルタ、ハンザの共和国、個々のイタリアの国家を　ー　オリエントの帝国、中国、先のロシアと比べるがいい。巨大な国家は巨大な貝に似ている、その貝の殻は六ツェントナーの重さなのに、その中身の肉は二十五ポンドなのである。

*1　トゥルトゥル、即ち拷問は（ミリンによると）高貴な者達がしばしば処刑される南フランスの小村の名である。大抵の古い町には所謂惨めな路地がある、かつては外人は惨め［Elend］といったので、とニコラ イ[19] は言っている。
*2　サハラ砂漠は周知のようにヨーロッパの大きさである。

＊

勿論戦争はアテネやマルセイユのペスト同様に崇高なものである。現筆者はすでに以前［*1］この我々の平和の中に住む殺害のスフィンクスにライオンの魅力を認めたことがある。ローマ人とカルタゴ人が、自分達の下で地震が起きていることに気付かずに大地の上で戦ったのは、崇高である。ムティ ナ[20] の近郊でマルィア兵団の老兵達が二つの別の老兵の兵団に近寄って、五つのティロの歩兵達をより純粋に戦うために退去させて　ー　年老いた英雄達のこの二つの軍勢が､雄叫びも上げずに黙って死の天使のように互いに虐殺し、相手に対する殺戮の天使となって　ー　それから暗黙の約束で疲れた武器を数分間使わずにいて　ー　そして両軍が最後にようやく引き上げ、それぞれの軍が自分の半分を死体として残しているのは、更に崇高なことである。

この人間的崇高さはしかし、春全体を同じような静かな動物どもの入れ替えの殺害で受け入れる動物的崇高さに幾らか近い。あるいはいつも立っている人間は死者の人間の上にいなければならないのか。あるいは人間の英雄は人間の怪物に基づかなければならないのか。天国ではかつて天使は悪魔を前提としていなかった。更に我々は何を必要とするのか。シュリ ー[21] は　ー　並の将軍ではなく、将軍達や自分の大事な英雄アンリに対する勇敢な後見人であるが　ー　戦争意欲を鋭く軽蔑しているのであれば　ー　ダヴィ デ[22] は戦争を

指揮したので神殿を建設するのが許されなかったのであれば　ー　初期のキリスト教徒は戦争を自分達の宗教の品位に悖るものと見なしたのであれば　ー　血に酔ったローマ人達は戦争の後、心の血の汚れを洗ったのであれば　ー　ローマ人達は死刑を陣営の外で行って、自分達の鷲は血しか飲まないけれども、鷲を血で汚すことのないようにしたのであれば　ー　ジュピターの祭司は武装した軍を決して目にしてはならなかったのであれば　ー　スパルタ人はいつもただゆっくりと（新たな国王のように[フリードリヒ・ヴィルヘルム三世]）戦争を決意したのであれば　ー　そして動物どもが動物に対して、人間に対して、人間の傍らで戦うのであれば、ひょっとしたら私の戦争そのものに反対する一言も大目に見なされたかもしれない。

*1　『巨人』Ⅳ[一〇五周、ハンザー版五八四頁二四行以下]

3
小さな薄明かり

A
緊急の国家の義務

国家の戦火の下では勿論国家の浄化は難しいものであり、必要なものである。しかし煙突掃除人は煙突を、暖炉の炎に燻されて、黒くなっていながらも、綺麗にする。誰であれ、侯爵であれ、神聖なものを、清めるものを、一分間も延期してはならない。神聖なものそのものは時間を知らないのだから。

B
国家の歴史

ゴールドスミスによれば歴史的珍事の欠如はある国家の幸福を意味しているというのであれば、我々にも勿論この欠如は欠如してはならないだろう。それでも彼の言は正しくて、我々は　ー　有利である。というのは八〇年の健康は医師に八葉のカルテを必要とさせないけれども、一つの治癒のためには歴史[履歴]が一杯ということになるからである。

C
人間と政治家の一致

同時に政治家であり、重商主義学者であり、公使であり、兵士であり、国王の寵児であり、真の敬虔者であり、真理と国土の友であり、それどころか幸運児であった、これらを一身に体現することが何か不可能なことであると思う人は、衷心から歴史を覗いてみたことがなかったのである。歴史にはこのような自己合唱団員、侯爵の同盟者がいる、シュリーである。　ー　彼の真っ直ぐな力は俗な比喩で描かれよう。つまり国家でも、固定する

釘の中で真っ直ぐな釘ほど深く、頭まで入って行くものはないのである。（ぐらつかせるとか攻める場合はちょっと別である）。ガラガラ蛇は真っ直ぐ伸びているときは決して噛まず、とぐろを巻いているとき噛む。

D

窮余の効果

窮すれば祈る。古代イタリア人[23]は（『アエネイス』第一巻）岩礁を祭壇と呼んだ。我々は教会を、ただ悪天候のときにのみ通り抜けの権利[24]を行使する家と見なしている。

E

宮廷人と学者の目

隣人や恋敵、現在に対する宮廷人の鋭い目に関して、そしてまた大抵の宮廷人の遠方の民や時代に対する鈍い目に関して、適切な範例を求めるならば、ただ手に家蠅を取って、近くのものに対するその目　ー　それは八千ある　ー　それに遠くのものに対する目を数えるといい　ー　それは毛の下に三つの副次的目を有するのである　ー　逆に書斎の人間は、古代の人々のように、遠くのものに対する目をむしろ有して、鼻先の事物はそれにぶつかってしまわないかぎり、めったに気付かないのである。

Ⅳ

政治的葬儀の提案

最近の者達の心ない機械性が明らかになるのは、その祭儀の無味乾燥性を措いてない。ある都市から、町の鍵、凱旋門、無礼講、砲声、油ランプ、花を持った二十四人の白い服の娘達を取り除いてみるといい。すると町は英雄に対して「賛嘆しています」と告げるときのすべての言語器官、炎の舌を失ってしまい、英雄は寂しくこっそりと町に入り、出て行くことになる。私は行軍中のナポレオンでありたいとは決して願わない、どの新たな教会の塔を前にしても、それらが私に対して忌々しい退屈な忠誠の人差し指、旅行用バロメーター、遠隔通信として自己紹介して、かくて私の果たした英雄的行為に対して報いる代わりに、それをはなはだ苦いものにして、遂には私が何の奇蹟をももはやなしとげなくても、不思議ではない具合になって、私はげんなりするに違いないからである。現代のドイツの諸都市よ、いずれにせよ諸君の退屈をなすがいい、しかしこれらの退屈の若干の入れ替えを考え給え。

政治的歓喜の祭典に創意が欠けているように、悲哀の祭典には勇気すら欠けている。二人の君主[1]に葡萄収穫、圧搾の月の或る日を悼んで祭るべきであると言うと、君達は驚いて、誤解してこう言う。「そんなことまでしなくてはいけないか。我々はそんなに臆病ではない」。しかしローマ人は祭ったのであった。しかし勝利から始まった彼らの祭典の行列は、単に祭りの対象ばかりでなく、祭る多数の人々をも高めたこと、そしてローマの人々は偉大な敗北や、その他の都市の事故の日（厄日）も厳かに祭る力と勇気を十分に備え

ていて、彼らはすべての祭司的、行政的、その他の公的仕事を休止して、町の生活を短い仮死状態に変えたということは、まさに民族のこの百手の巨人、世の禿鷹の偉大さに他ならない。何という民族か。不幸の祭典によって打ちのめされず、高まっていった民族である。

我々に関しては、我々も国家の若干の火災の日曜日を体験して祭る　ー　我々はオルガンの音を少なくし、鐘の音を強くして、宮廷の者であれば喪服を着て行く　ー　つまり侯爵の亡くなったときである。しかしこれが祭典的なものとして挙げられるすべてである。しかし何と別様に、何ともっと力強く、敗戦や亡国等の喪の祭日であれば次々に心を捉え、揺さぶることだろう。痛みの許で何と勇気の炎が点されることだろう。すでに個人が不幸の際には偉大に見えるのであれば、何と民族全体は大いなる過去を悼むとき何と高く立ち上がることだろう、過去はまさに悼むことによって、現在となり、未来となることだろう。

ー　我々は子供っぽくて、うぬぼれが強くて、ローマ人以上に歴史を恥と思うのだろうか。　ー　我々の政治的歓喜の祝典は国家と偉大さを卑俗な悦楽の酩酊に沈めて、まさしくより深く、かの享楽欲、我欲に浸してしまう、本来祭典はこの逆を行わなければならないとしても、これとは対照的に国家の喪の祭典は贖罪日以上に　ー　さながら一民族の万霊節として　ー　個々人の、地上の営みを越える埋葬よりも更に高く、祖国愛の翼と炎の上に乗せることだろう。　ー　個人的な痛みではなく、皆の痛みから偉大なものが生ずる。どの灰からも不死鳥が蘇るわけではない。

我々の西側の隣人は　ー　今や他の羅牌に従っても隣人であるが　ー　機械よりも精霊をむしろ動かすこの古代風な感覚を有する。ヴェルサイユの王侯の宮殿[*1]には時計があって（ひょっとしたら今もあるかもしれない)、それは王の存命の間は止まっているが、その死後から新たな王の戴冠までは動き、それから古き王の死の時刻に合わせて止められた。さながら王座にあっての墓の永遠の指針であり、王の灰を告げる占い棒である。別の、非キリスト教的な、心を突き刺す指針は、革命時の年ごとの王殺害の式典[(2)]であった。しかしローマ時代の偉大な蛮行に近い。何かもっと崇高ではないけれども、もっと心を高揚させるもの、ローマ時代の喪の祭典にはただ離れて近しいものを眺めて、考えることにしよう。それは、数年前から戦火の地震の下で沈んでしまった王座の国王[フリードリヒ・ヴィルヘルム三世]が、それでも　ー　自分の威令の行われる　ー　わずかの所で、自分や国家、高められた新教主義と名乗っていいこの国家に敵対して書かれたことをすべて許したということである。不運の最中、敵の最中にあって、国王は新教主義の統治憲法にすべての不運の予言者、口真似者だけでなく、不運の告知者に対する解毒剤を託した。王は正しかったのである。すべての論敵が民衆の服従心を克服できなかった。追い詰められた侯爵は、幸運な侯爵達がしばしば尻込みすることを敢行して良かったのである。プロイセンの印刷された晒し台は名誉の神殿の階段となった。君達は　ー　イギリスの例では十分でなくて　ー　報道の自由は単に思考の隷属のときにのみ害があるだけで、他に決して害はないことのより大きな証明を欲するのだろうか。　ー　君達は、過去の孤児院から結局男達や英雄が育って出ていくことを信じないのか。　ー　君達は、沈んだ宵の明星の思い出のために暗い喪章を付けて式典を行ったローマ人達はまさにそのことによって明けの明星の登場を出迎えることになったということを信じないのか。君達はそのことを信ずべきであろう、両星は一つの星なのだから。

要するに、同じ涙ではないけれども、十月十四日[イエナの戦いの日]を祭ることのできる諸国家がフランスの他にもあることを、君達は信じないのか。誰もこう思い描けないのだろうか、例えば十月にはアドニスの祭典を祝うが、その際には周知のように最初の祭典は消滅という名であって、その日には瀕死の青年の絵や種蒔きされた花で一杯の壺を持ち運んだのである、と。アドニスの祭典の二日目は（発見）まさに純粋の祝典で、すべての希望が戻って来て、美の女神が登場し　ー　地上の生は一つの天国となったのである。

*1　ザンダー『オランダとフランスを通っての旅行』第一巻。

4
小さな薄明かり

A
イギリス

はるか昔にイギリスの海岸をフランスの海岸と切り離して、運河の長い溝を切り開いたかの地震ほどドイツを震撼させ、荒廃させた地震はなくて、それでドイツはハンガリーに似ることになった、ハンガリーは諺ではドイツ人の墓地と呼ばれているのである。不幸なことに我々はまさに我々がイギリスに対してなした二つの贈り物で苦しんでいる。というのはまず第一に、他の者達が証明したように、イギリス人達はハンザからそのイギリスの現今の商取引のシステムを、第二にドイツの森からその統治形式を（モンテスキュー[3]の著名な陳述によれば）導入したからである。我々としては躊躇なく両贈り物を忘恩の徒から取り返すのが賢明であろう。ブルートゥス[4]がまずイギリスを発見した。暗示としては珍しく　ー　また十分に豊かなものである。

B
短い戦争

戦争というものが、地球が神と悪魔の前で上演する本来の最も偉大な悲劇であるとすれば、悲劇の作家でナポレオンほどその規則を守っている者はいない。第一に最も守っているのは時に一致で、彼は戦争の数年を戦争の数ヵ月に短縮している[*1]。ただ場所の一致に関しては彼は大いに反している。

*1　スカーリゲル（詩学Ⅲ）は悲劇に八時間以上を欲していない[5]。

C
報道の自由

どの国家も意見、つまり政治的宗教的意見の検閲官として、ドン・アントニオ・デ・ウリョア[*1]の言うコイバの蜘蛛を思い出すべきであろう、この蜘蛛は攻撃したとき潰してしまうと致命的毒を与えるのであるが、皮膚から単に吹き払うと害を与えないのである。

*1　『すべての旅行者の一般的話』第九巻

D

諸民族の繊細な名誉心

民族の羞恥心は乙女の羞恥心同様に没落する。つまり含羞草（繊細な女性）が余りに触られ、抵抗を強いられると、萎れてしまうようなものである。精神的なものは最も容易に揮発しやすい、純粋な金は最も容易に曲げられやすい。　一　人間は、動物が人間化するよりも素早く動物化する。奴隷が自由民に緩慢に変身するのに比して、何と素早く自由民は奴隷に変身することか。かくてカトーやブルートゥス治下のローマ人は短い期間のうちに次の皇帝達治下のローマ人とはなはだ異なってしまい、かつて以前民族は個々の暴君を恥じていたとすれば、ここでは暴君達が一つの民族全体を恥じることになって、踏みつけられもしないのに曲がっているほとんど直立していない虫けらに暴君達は怒りを放ったのである。

E

世紀の祭典[6]

以前はいつも各世紀は贖罪の日や祈祷の日、断食の日で締めくくられた。この中止された宗教的懺悔の日の代わりに運命は政治的懺悔の日を我々に定めた。

F

書記国家

木製の国から石造りの国となったローマ[7]の代わりに、まさにその逆の我々の広間を模している国家がある、つまり大理石をより快適な生活様式のために、美しい大理石模様の一　紙の壁紙で、即ち書物や命令状で代用している広間のことである。

G

コーヒーの代用品[8]

コーヒーというものがある限り、コーヒーがその構成要素となっている代用品が相変わらず作られるであろう。私のは必ずしも最も安価なものではない。すべてのこれまでの代用品を合わせたものの中から三十二分の一を取り出し、およそ三十二分の三十一の正規のコーヒーを加えてみると、どんな繊細な舌も見分けられないコーヒーを得ることになろう。

しかし夙に最も安価な最も単純な代用品がオランダでは知られていて、導入されている。単に一・五リットルの純粋な水を用意して、それをしっかりと沸かして、半ロートのコーヒーを入れてみると、とても良い味の偽物が得られるのである。

H

歴史の再来

何という真理、賢い事例が（並びに人間の昔からの害のみすぼらしい再来が）革命以来、アリストテレスやプラトン、タキトゥス、マキャベリ、モンテスキュー等々の中に明らかになっていることか。古くなるほどますます明らかになる本がある。ひょっとしたら精霊は単に最後の審判の日の前の夜に最も良く理解されるのかもしれない。

I

復活する国家

リュクルゴスの墓に雷が落ちたとき、これは良い徴候と見なされた[*1]。ポツダムでは同様に戦闘的な立法家の墓に稲妻が走った。ここでも稲妻は悪しき徴候ではなくて、それは立法家を目覚めさせたのではないけれども、神々しい法を目覚めさせたのであった。

一　周知のように聖人の聖遺物は生前のこの生きた男性全体よりも常により大きな奇蹟を見せる。同じことを国家の聖遺物についても考えることができる。その限りで戦火によってしばしば大砲による民族の氷流が告げられるというよりはもたらされる。

*1　リュクルゴスの章のプルターク。

K

イエズス会士とフリーメイスン

イエズス会士とフリーメイスンはこれまでイエズス会士やフリーメイスンの探偵達から、単にこれらの教団の神秘性故にであるけれども、若干の悪意をもって国家への秘密裏の影響が言われてきた。イエズス会士には悪しき影響が、フリーメイスンには良き影響が言われてきた。しかし現今の激動の時代は彼らに対する最良の弁護となっている。彼らはここで何もなしてこなかった。

L

民衆の軽視

宮廷国家あるいは王座の国家とそれに兵力は輝かしい円の二つの回転する円である。両者が立派なワニスによる輝きを有するとすれば、隠され退かされた奥の民衆はほとんど無である。同じようなことが庭園の椅子でも見られる。目に見える前の脚はワニスを塗って

腐らないようにする。しかし後ろの脚はむき出しのままなので、輝くエデンの椅子は後ろ向きに折れる。

M

国家の処罰

運命は民族に対してヘリオガバルスがその料理人に対して行ったように振る舞う。ある料理人ができの悪いスープを持って来たとき、彼は、もっと良いものを思いつくまで、料理人がそれで生きるように強いた。

N

フランス人の欠如［欠点］

情感的なフランス人がしばしば行為の欠如した言葉を有するのに対し、戦闘的なフランス人は両動詞の欠如した二つの行為を有する。立っている（Stehen）と馬に乗る（Reiten）の欠如した歩兵［Infanterie］と騎兵［Kavallerie］である。

O

民族

教育と授業は、あたかも我々がギリシア人並に育つべく、我々の中に美しい芽を育てる。後に我々を待ち受けているのは、庭師ではなく、国家という醸造所の親方である。かくて人々は大麦の芽をまず生き生きと育てて、それから乾燥炉で乾かし、立派な麦芽にする。我々の国家はほとんどすべてモルタルである。高い要石はいくらか例外であるが。古代人は切石をモルタルなしに固く積んでいった。しかしその遺構はほとんど破壊されずに残ってきた。

V

天才達の上級試験委員会の提案

普通学校に新しいドイツの苗木仕立て場を作るというフィヒテの提案[1]は、古い国家の中で新しい国家を分離して組織し、国中から青少年の全体を十六年間隔離するという途方もない困難さを考えると、教育し続けられるべき大勢の民の代わりに、これらの民を教育し続ける単にわずかな数の民を教育することによってある程度この困難さを回避できよう。最新の戦争の民衆の勇敢さは、大勢ではなく、選抜された者が、統治されている者達ではなく、統治している者達が悪いということを証明している。大勢の民は、私がすでに別の箇所で主張しているように、自分自身によって偉大なもの、自由なもの、賢明なものになることはなく、いつも偉大で自由、賢明な合唱指揮者によってそうなったのであった。太陽を据えるといい、惑星は自ずと進行する。

それ故フィヒテやブランデス[2]に対してこう答えよう。あたかも我々が、我々の時代精

神よりきっとましなものではない外国の時代精神に屈したかのような、ドイツの時代精神に対する諸君の弔歌を止めよ、と。ある唯一の男[ナポレオン]が我々のトップの側に、我々のトップに敵対するのではなく置かれさえすれば、諸君は突如ドイツに対する告発者から賛美者に変わることになるだろう。そもそも時代精神に関しては、それを発声しているのは、戦闘の勝利ではなく　ー　これは時の申し子であり、心の力よりは計算の力による近世の被造物であって　ー　そうではなく、単にどのように戦争がなされ、敗北に耐え、勝利を享受するかについての方法、様式にすぎない。

それではいかにドイツ人はその長い戦場で血を流してきたか。犯罪者のようにではなく、フランス人のように名声と共に血を流してきたのである。

従って幾千の歯車ではなく、単に動力の渦巻きばねのみが新しいドイツの愛国的予備校の中でまことに厳しく鍛えるのである、官吏や君主、軍司令官等々のことである。勇気が実直さと密接に関連しているのであれば、そしてどの民もドイツ人を一八〇九年までは実直な民と呼んできたのであれば、高貴なドイツ人の養成学校によって、更に広く深く教育を続ける学校によって何ということが我々によって我々のためになされることであろう。

これで上書きの箇所に至る。

民の不幸は天才の目覚まし時計（とても高価な）であるとこれまで言われてきた。しかしこの目覚ましは、不幸を弁償するためではなく、不幸を予防するために、むしろ前もって国家によって置かれ、目覚めさせられるべきであろう。なぜ国家は強壮の滋養となりうるものを、単にまず修復する薬としてのみ使おうとし、ワインで熱くさせる代わりに、単に治そうとのみするのか。上述の高価な天才の目覚まし時計（大砲や悲嘆の叫び声、瀕死の喘鳴等からなるもの）を国家の時計に設置するべきではないだろう。

しばしば一人の天才的男が現在の民衆や世紀に匹敵し、そのことによって次の民衆や世紀を残すのであれば、一人のカントが教師団を教え、教師団に勝るのであれば、そしてすべて偉大なものは単に一人の偉大な男から発して、すべての地上の春は単に一つの太陽によるのであれば、このような太陽をもっと崇めて、見積もるようにするべきであろうと思われる。

どの時代をも救出し浄化する一つの宝がある。それは自然が母親達を通じて送る宝である。ある古人[*1]が、長く機知的に何人かの天才がいつも突然出現すること、そのことは何故か、一方その後数世紀空しく経過して、何ももたらさない、砂金も銀鉱の船隊ももたらさない、と語っている。しかしここでは単なる偶然では豊かになることはできないので　ー　というのは偶然は決して五つの五度当たりを次々に引かせることはないので、　ー

自然は同じ気候、時間の中で同じ数の天才を金鉱脈同様に結晶化させるけれども、ただ我々には発見の占い棒が欠けている、従って単に何らかの奔流のみが若干の砂金を出現させると仮定しなければならない。しかし数人のより高い人間達が出現したら、これらの人間が他の既に沈潜している者達を後から見いだし拾い上げる。一つの磁石は他の磁石の占い棒である。勿論天才は抑圧されることはない、しかし歪められ、植えそこなわれることはある。村のニュートンは自ら職人、親方となって、時計工となるかもしれないし、ピットは居酒屋の亭主[(4)]となるかもしれない。

すべての、自然によって蒔かれた天才は芽が出て、立派に生長するという悪しき間違いは実用的天才と理論的天才の混同から生じている。つまりこうである。学校では容易に学

問的詩的頭脳の諸力は力を発揮する余地と素材を見いだし、この両者を通じて自分自身を発見していく。その上学校教師が自分達に近い磁石山の軽やかな磁針として登場する。これに対して実用的天才、世界を倒壊させ、鋤き返す精神、偉大な司令官、国家の大臣、その他の実業家は学校では自分達の深い鉱脈の探査人を見いださない。これらの天才達は、それ故、運命が彼らを単に精神の貴族として扱い、宮廷での貴族として扱わなければ、大抵は世間にとって、自らにとってではなくとも、失われてしまう。シュリーとかコルベール、ピット、ナポレオンといった人々は村の重要な小作人として留まるだろう。

これまでは先祖の貴族証明が子孫の証明、あるいは精神力の証明より大事にされてきた。そして自分の市民階級の前アダム派から最も遠く離れている者が　ー　というのもどの貴族も一人の市民から始まって広く伝わっているに違いなく、一方市民の者は一人の貴族に収斂するようなものであるからで、　ー　政治家や実業家にさながら生まれついて選ばれているように見えたものである。しかしこれまで小さな、しばしば不健康な貴族の島に多くの偉大な司令官や政治家が育ってきたのであれば、いかにもっと多くの司令官等が（すでに単に空間の面からも）市民階級の広大な大陸上に見いだされたはずであろう。というのは貴族は我々にすべての面で勝っているかもしれないが、ただ数の点では勝っていないからである。全くすべての家族の隅石として不可欠の系統樹は死に絶えてしまうのに、市民階級の草は自ずと新鮮に後から芽を出す。

こうしたことすべてが真実で、国家は単にわずかな数のアトラスの肩に収まり、昇っていくのであれば、すべての天才は民族の魂である、神が動物の魂であるように。何という一つの偉大な精神の力が、千もの他の、単にこの精神の力によってのみ動かされ得る肉体の諸力よりも優先されることか、このことが昔のより高度な国家では夙に洞察されていたのであれば、人々が天才の輸出を容易に認めているのは確かに不可解なことである、スペインは厳しく種ロバの輸出を、プロイセンは金の輸出を禁じているというのに。しかしもっと不可解なのは、人々が国家の真の生命の精霊、根源の精霊を少しも求めていないことである。人々は彼らが単に偶然に泳ぎ着いてくるのを待っている、例えば寒いアイスランドの人々が名も知らぬ豊饒な暑い国々から薪の着くのを待っているようなものである。

しかし筏検査官を雇えないだろうか、つまり先の表題の天才上級試験委員会を設置できないだろうか。イエズス会士探査人の代わりに生きた額・観相測定器さながらもっとより良きものの探査人、将来の世界発見者の発見者、要するに学校教師よりももっと別の人、学校教師も含むけれども、こうした人々を雇えないだろうか。転倒され再興された王座で一杯の最新の歴史は我々皆に大衆に対する個々人の過大な重さを説いている。

ただその際面倒なことがあって　ー　つまりそのような精神の査定者を見つけるという面倒がある。子供時代の天才を観察するためには、まず誰が天才となるか見きわめる必要があろう。後になってようやく後年の体験を早期の経験のせいにできよう。それ故私は偉大な人間の少年時代の方を大人の時代よりも知りたいと思う。そうなったら将来のダイヤモンドの秤を得られるであろう。

それでも、学校教師が単に将来の偉大な学校教師や詩人の精神的高さを測って、自分とは無縁な毛色の異なる頭脳の測定をしないならば、そして例えば兵士が子供の戦闘能力を、財務大臣が子供の財務能力等々を測るようになれば、何かがなされることだろう。精神的血縁者は自分の親戚を、肉体的血縁者が自分の親戚を推し測るよりもはるかに容易に推し

測る。
　しかしこれまでの無責任な、至高の国家的諸力の浪費、最も大きな国家の動脈のこの結紮をどのようにして防ぐか　ー　どのような手段を用いてか、少年の頭脳のより高度な上級試験委員会の設置か、特別な、単に少年の月々の試験学校を通じてか、それとも他の方法か、　ー　私はこれについては提案しない、このようなより高度な頭脳試験、このような、効果のあるべきカント的理性批判、並びに私の対案の精神的死体検死、つまりその提案というものは、コーヒーの代用品に似た、新たな鋤機械、砕土機械、種蒔き機械、その他の機械の第二の模倣発明に他ならないからである。人々は自分のコーヒーを飲む。その代用品は金である。

*1　ヴレーユス・パテルクル[(3)]ス

5
小さな薄明かり

A
祭儀

　大砲の轟音なしには侯爵は町を通り抜けられないし　ー　誕生しないし　ー　結婚生活に入れないし　ー　埋葬されない。この地上の轟音は天の雷鳴に似ていろいろなことを意味しよう、結実、降雨、雷、玉の霰を　ー　あるいはそもそも戦争への侯爵の決意を意味しよう　ー　あるいは、球なしに轟くので、意味のない空騒ぎ、示威運動を　ー　あるいはそもそも格別なことではなくて、単なる矛盾を、一つの爆音で歓声や悲哀を表したり、同一の炎の舌で生誕や死を告げる矛盾を意味しよう　ー　あるいはこれだけで人間の鳴子猟や講和条約の[黒白の球による]秘密投票や球投票がなされる大砲の球に対する敬意を遠回しに言語化することや　ー　あるいは人間の戦闘的通奏低音への音楽的愛好からもの申すことを意味しよう　ー　あるいは何も意味せず、単に鳴っているだけかもしれない。

B
服従

　古代ザクセン人は戦争のとき侯爵にすべての服従を果たした。平和のときには独立した平等を取り戻した。後にあれこれの国家がこう言った。「我々はこれを逆転した方がいい。
　ー　平和のときには我々の兵士は忠実な兵卒である、戦時には平和の諸侯である。というのはどの戦争も平和より短い以上、我々は短く支配するよりも長く支配したいからで、この際更に我々が失うであろうものは　ー　戦闘だけで、戦闘はいずれにせよ少なすぎることはないであろうからである」。

C

当世の倫理機関

近代の倫理機関は、古代の監査機関(ケンソル)と比べると、この利点よりは（というのは倫理的汚物を妨げるというよりは隠しているので）トイレらしくない不気味さのない宮中庭園の小部屋に似ている。このような小部屋を優しく仮装させて、造園家は趣を出そうとするからで、それは泉の施設であったり、壁龕であったり、オベリスクであったり、記念碑であったりする。人々はその中で鉢合わせると、互いに全くあっけにとられて見つめあう。

D

ヴェストファーレン

ラテン語のヨハネス・フォン・ミュラーの年代記[タキトゥスの年代記]はまずヴェストファーレンで見つかった（シャトーブリアンによる）。それ故ドイツ人のタキトゥスが今からすぐに、ドイツ人の出身ではないけれどもゲルマニクス伝、『ゲルマン人の風習』といったものを著して欲しい。すでに今でもヴェストファーレンの裁判(5)は以前のような秘密裁判ではなく、逆に公の裁判を意味している。

E

利己心の解毒剤

利己心がとてつもなく広大にヨーロッパの大地に広がり、青春の愛の時代は短く、家族の愛の場所は窮屈で、愛する精霊の心（心の心）はまれであるけれども、しかし硬直した時代になお温めるわずかな愛は、この時代を溶かし、動かすに十分である。ささやかな温かさが氷河から、実りをもたらす河川を溶かすのであり、例えばある健康の泉では[*1]温かい源泉が凍える小川へ流れ出て、その小川が波を起こし、水車を動かすべく温めるのである。

*1　例えばヴィースバーデン

VI

侯爵のために、ほとんど無償で知らせる新たな使節団員の提案

財務大臣が人間を除く動物には似ていないのであれば、というのはキケロによると人間は計算のできる唯一の動物であるからというのであれば、そして正しい財務家は計算して国家を沈めるよりは浮かばせるというのであれば、現筆者はひょっとしたら実直な財務家として官房にとても気に入られるかもしれない、筆者はここで侯爵達にほとんど無料の新たな使節団員を提案する者であるからである　ー　いずれにせよ、歳費も、急報の郵便料金も、銀の食器も考える必要がない。この団員はヨーロッパ全体に無料で滞在していて、毎年確実な急報をすべての国々から送ってくれて、それはそれどころか出生簿や点鬼簿、

国の憲法等々の細部にまで踏み込んでいるのである。これらの大地圏の圏使節はその得難い急報の中で、通常の侯爵達の大使達が一言も知らないような事柄を伝えてこなかっただろうか。彼らはフランス革命を予言していなかっただろうか　ー　更にはこの革命へのドイツの介入の嘆かわしい結果を　ー　フランスの隆盛を　ー　ナポレオンの隆盛等々を予言していなかっただろうか。しかし称賛を止めることにする、私自身　ー　公使館参事官としてではないけれども　ー　この名誉ある大使職の末席の会員として連なる者であるからで、この大使職は八六六二名の会員から成り、　ー　著作家と称する者で、その急報は作品と呼ばれるものである[*1]。侯爵達はこの真の使節や教皇大使（教皇の使節もこう呼ばれるが）から何の教皇大使職の争点もなく自国や他国の幸運や不運について、力や病気について何と経験することができたことか、例えば　ー　第一級の大使、プラトンやアリストテレスといった人々は挙げなくても　ー　より低いランクの大使、アルヘンホルツ[(1)]やブーフホルツ[(2)]、ビューロ[(3)]等を考えてみるといい。他の大使達はしばしば戦火の坑道の羅針儀となり、光を与える丸い窓ガラスが容易に炎を点火するのに対し、我々全権大使はむしろ、嵐を防ぎ、生長を促進する温床の善意の窓である。　ー　フリードリヒ唯一王が（残念ながらこの添え名は一つの予言となったが）謁見を許すのを好んだ我らの名誉ある外交団に何が欠けているだろうか。解読局といったものではない（解読局を侯爵は王冠の下の頭脳に有する）。　ー　信任状でもない（時代がそれを与えるから）。　ー　知識でもない（というのは我々はすべてを知っていて、他の大使達は我々から初めて多くのことを解読し、入手しているのだから）。　ー　光輝や品位でもない（というのは我々の使節の団員の中にはしばしばフリードリヒ二世やカエサル等の支配者本人が見られるからである）。　ー　しかしこれらの長所ではないとすれば、何が我々に欠けているか。それは単に使節の取次人である。これは侯爵の上級や下級の図書司書のことではない。彼らは採用されており、時に、通常奴隷であった最初のローマ時代の図書館司書に似ている。更に直接閲覧係を含む公的侯爵の図書館司書も雇用されているが、しかし彼らは情報を単に製本工に与えるのみである。同様に侯爵の朗読者のことでもない。侯爵達は彼らをより高度な、より正しい肩書きの朗読者、講師という名の下に、つまり読者という名の下に有していなかっただろうか。彼らがその職責を家で一人っきりで良心的に耳を傾ける人がいないまま果たしているにせよ、あるいは侯爵達は朗読の際聴講の読者となるのを好まないにせよ、というのは侯爵達はここではすべてのより高い身分の人物がそうであるように、謁見の際のオリエントの君主達に似て[*2]、注意を払っているのではないかのように見えるのを礼儀と心得ているからである。その上朗読者は単に肉切り人であって、献ずる者ではない。

使節の取次人とはまずもって侯爵達によって採用され宣誓されるべき者達であって、つまり制限のない検閲の自由を有して、侯爵に自国や介入してくる隣国のことに関してすべての印刷された論考を良心的に印を付けて提出しなければならない神聖な男達の一団のことであり　ー　現在の侯爵にとってしばしば重要な雑誌を部分的に選び出して　ー　法制度や経済制度、戦時体制、統計学、統治哲学について傑作や時宜を得たメモを選び出さなければならない一団のことである。

いやはや、多くの諸侯にアルヘンホルツや　ー　ビュシュ[(5)]　ー　ビューロ　ー　モーザー[(6)]　ー　メーザー等の個別の論文を選び出し提出することが許されていたら、何としばしば災難が除かれていたことだろう。　ー　助言の選択、つまり侯爵に対する印刷され

た助言者の選択は他の人々の提案に発言を任せよう。十分である、というのはたとえ私が精神的選抜者のこのような一団の組織計画をその会員の数や学問上のランク、その会議日や外出日と共に述べることができなくても、その必要性はもっと詳しく証明できるからである。深刻にならず、また冗談を交えずに語るべき事柄である。

侯爵ほど読書の時間の少ない人間はいない、侯爵は執筆の短い時間もほとんど残っていない、つまり署名のことで、これは幸い姓名の欠如のせいで幾らか短縮されることになる。侯爵夫人達は侯爵よりももっと印刷物を読む、執筆の時間がもっと少ないからでもあるが　ー　署名の必要がなくて　ー　ただ危険な[関係の]ない知人に手紙を書くだけである。それでも侯爵が読もうとしたら、その場合何を読んだらいいか分からないし　ー　自分の臣下が述べるよりももっとひどい理由でそれを推薦され、持参されても　ー　なぜなのか分からない。その際侯爵は学問の途方もない天体から　ー　望遠鏡の発案者もいなければ、彗星研究者もいないので　ー　自分の目のためにまず何を手に取って最も良く注視すべきであるか分からない、殊に侯爵は皆を支配していても、すべての事柄を支配しているわけではないからである。

短い記憶のためというより、近視の目のために、ここで短く述べさせて欲しい。

多くの侯爵が、何の印刷された為替相場もなしに、入港し出港した船や拿捕された船の情報もなく、戦争や平和についての新聞もなしに取引を続け、投機を続ける商人であるとすれば、このような商人や原物は存在せず、単にその模倣者、つまり侯爵達がいるだけである。両極端はまた思いがけず一致する。支配という難しい技術は最も容易なものとなる。誰もが国の支配を任せる以前は国を支配している。しかし王座には時に王冠を戴く侯爵の横に王冠のない帝国代理が、代理さるべき者の横に代理人する者が座っている。

アルプスではしばしば三週間牧人が自分の家畜の群れを探さない。しかし王座はアルプスのようなものか。

まさしく国内は侯爵に対して、中国がヨーロッパに対するように使節を送らない、外国の報道からのわずかな人々を除いて。その代わり国の使節は侯爵に十分忠実に外国のことを伝える。かくて侯爵は外国の方をしばしば国内よりもはっきりと正しく見ている。国内に対しては自分の王笏で磁針をもってするように正しい天の方位を示すべきであるというのに。

本来侯爵は国内全体について、その中の他の人間よりももっと知っておくべきであろう、王座の高みは侯爵と大勢の者にとってそこからの落下をもっと深くもっと破壊的なものにしているのだから。「火と明かりの用心」は確かにすべての家所有者に言えることであるが、しかし最も妥当するのは火薬製造者に対してである。流血の全時代と全民衆は、侯爵が一つの真理といったものを、一頁半の真理を読んでいなかったという文の殉教者として我々の前に立っている。というのは侯爵達は、我々皆と同様に、悪しきことを求めるがためというよりは善きことを求めるが故にもっと罪を犯してきたからである。

一体誰が、多くの影や間違った明かりを投げかける王座の天蓋下の頭脳に対して真の照明を与えるべきであろう。　ー　少なくとも哀れな束縛された宮廷人を煩わせてはならない、宮廷人は十分に自己隠蔽を心がけなければならず、露見を全く考えたくないのである。宮廷がまさに立派のフルート学校であって、すべての憤怒、不道徳、すべての公の厄災が疥癬や粟粒疹熱の良き性質をとるならば、つまり両者とも（プラトナーの『治療法』によ

れば）決して顔に表れないという性質をとるならば、宮廷人は神に感謝する。すでに顔が十分に黙っていてくれそうにない宮廷人にとって、唇が話だそうとするならば、恐ろしいことに思えるであろう。宮廷人は君主を知っていると期待している、君主は鳳仙花、勿触草であり、含羞草（おじぎそう）で、強く触れると容易に不御辞儀草に変わるのである。「願わくば」と宮廷人は言う、「君主の叱責を意のままにできて、叱責を減少させることができたらいい。君主が祝祭のとき静かな嵐のように座していて、我々列席の者達に対して王冠を戴くメドゥーサの頭として、最後に皆の舌を石化させる者として、ちょうど聖パウロ[7]がマルタ島で蛇の舌を石化させたようにそうする者としているならば、これも単に、何らかの招かれざる蛇が君主に何か不快なことを　ー　それは本当のことであってもかまわないが　ー　予言したからにすぎないとしたら、どうして宮廷の祝祭が栄えよう、あるいは祝祭にせめて耐えることができよう、殊にすでに午前中から参列しなければならない祝祭の場合に。このような招かれざる者は、どのような湯浴みを自分の真理の暴露によって更にすべての請願者や官房の者達、いやクローク係の女官にまで至るすべての宮廷の従者に、ただ単に君主を不機嫌にさせることで準備することになるか多分思いがいかないのであろう。　ー　裸の真理という何とも素敵な楽しみごとである。私は少なくとももっと素敵な事例に遭遇した」と。宮廷人は自分を宮廷説教家に対しては余りに現世的であり、宮廷道化師に対しては余りに高尚であると思い、両者同様にすべてを語るわけにいかないと思うだろう。

しかし他に例えば誰がいよう。　ー　大臣とか官房参事官は十分にその特別な講演や真理の山の許で侯爵の耳や署名の指にまで任務を引き受け、十分にその聴講の好意（朗読ノ好意[*3]）を要求しているので、自分達をモーゼ的立法家たらしめている炎の茂みの許で、ある種の真理のせいで必要とされる接近によっても口が火傷することのないようにしている。

王座に対してしばしば最も厳しいことを言う数少ない三人の人間は単に、一）絞首台に行く者、二）さらし台にさらされる者、三）この両者に属する者　ー　つまりスパイ、誹謗者、中傷者である。

さて我々の他に誰が王冠に対して鉱坑と黄金の知識のために鉱山の明かりを固定できる者がいよう。我々より誰が侯爵達に対して真理をより非利己的に、より非党派的に　ー　というのは我々は皆に、まだ生まれていない者にも語るからで　ー　あるいはより繊細に、より透明に、より魅力的に語ることができよう。それ故我々使節はまた互いに交替で聴講するのであり、それは単に講演が楽しみだからである。文字は単に赤でないばかりでなく、色あせてもいない。本は大胆に皆に一切を語る。結局苦労して、正直さ故に宮廷人が君主のために上品な高い棒砂糖の上に滴注して、それで仕舞いにまた棒砂糖に対して何か止血させるものが処方されることになる辛辣な治癒の滴　ー　この辛辣さを著者は与えず、単に何か通じをよくする甘いマナ[神与のパン]を与えるだけである。

君達侯爵にも一度は真実が告げられる、少なくともきっと時代によって告げられることだろう。ただ時代は口当たりのいいことは余り言わない、時代は甘いことを（宮廷人と比すると逆に）辛辣なものに仮装させる。時代は好んでイヌサフランの酢やペスト消毒酢の中にその蜜嚢を浮かばせる。時代の治療法は通常反吐療法である。

歴史は定めている。見るか、泣くがいいと。見開かれた目か泣き濡れた目かの選択は、宮廷の愉悦の仮装舞踏会が君達を仮装の砲台の許へ踊っていくように強いるとき、もはや

できない。すべての隠されたもの、隠された道や馬車から秘密の品物に至るまで、戦争に通じ、属していることを君達が考えなかったからである。

モンテーニュは述べている（第二巻、第三十四章）、すべての大将方はいつもある特定の作家を愛読した、アレクサンダーはホメロスを　ー　スキピオ・アフリカヌスはクセノフォンを　ー　マルクス・ブルートゥスはポリュビオスをカール五世はフィリップ・ド・コミーヌといった具合である、と。これに近世ではカール十二世のクルティウス、ナポレオンのオシアン（少なくとも以前はそうである）、フリードリヒ二世のヴォルテールが加わる。フリードリヒ二世はほとんどサンスーシ宮、あるいはベルリンをヴォルテール埠頭にしてしまった。動乱の大将が執筆の翼兵達の方を見て、倣うのであれば、より平穏な侯爵は、この作家達をもっと見守るべき理由と時間を有するように思われる。

世界史が過去の逮捕状であり、未来の保険証であり、作家達は国々の監視団であるならば、従ってどの立派な本も皇太子使用版[古典本]のために侯爵のドーフィネ[王太子]のために書かれているのであれば、何かが読み取られるであろうと愚考する。

フリードリヒ二世によれば、作家は観客の支配者であって　ー　従ってかつて侯爵が征服し、従えたよりも大きな観客の支配者なのであれば、　ー　どの支配の君主も自分と同等の者に対してもっと名誉正しく振る舞い、すべての作家達、その職務の者達の安寧についてその共同統治者と協議すべきであろう。共同統治は　ー　時代によって　ー　立法権を有し、支配権は執行権を有する。

王冠の最大の負債の一つは、王冠の下に王冠を運ぶものすべてが[頭]が欠けている場合であろう。しかしこの欠陥は読んだ図書の償却資金がかなり補ってくれる。皇女化粧水[当時の銘柄]というものがある。印刷用インクは皇子の化粧水である。最も偉大な頭脳や天才でさえ執筆するのを恥とせず、カエサルのように王冠を戴いている者でさえ恥としなかったのであれば、単に王冠を戴いている頭脳は読書をためらうことはない、殊に一般の意見によれば、執筆するより読書する方が容易で変化に富むのだから。

見張りの塔はしばしば図書館に利用された。諸君にとって図書館を見張りの塔にするのがより容易であろう。

君達を囲んでいる者は、君達を盗むために、しばしば本を盗む。君達は知識に対して知識をもってする以外にどうして武装できよう。

フランスでは十二世紀には、学士以外の者は至高の国家官吏に就けなかった[*4]。至高の職のためには少なくとも若干の学士の技が結構である。自ら読者ではないのに、何百万人もの読者に命令するのは、大胆なことである。百万人が必要とするものは、一人の者も必要とする。製本機の締め木が民衆の鉄梃子であったとすれば、それはまた一人の男にとっての跳ね板である。　ー　そもそも読む必要のないものはただ一人であろう。それは自ら最大の本を作った、自然という本を作った者である。

私どもの中には、千年から千年にかけて、民衆から民衆にかけて、人々が引見してきている使節がいる。諸君は第三級の劣等な使節にまるめこまれて、時代の全権大使達を謁見させないつもりか。アレクサンダーは自分の使節アリストテレスを諸君の許に送っていないか。アンリ四世はそのシュリーを、イギリスに送るように送ってきていないか。キリストはその使徒を送っていないか。　ー　このような位階の人物には耳を傾けるべきであり、彼らは投票権を有し、一緒に食卓に着く権利を有するように思われる。

しかしお前の短い文は誰のために役立つと尋ねられるだろうか。読書する侯爵の手許には遅すぎることだろう。読書しない侯爵には全く問題とならない。結構なことである。まさにそれ故、私は使節の取次人を要求しているのである。かくて私は紹介され、この論考も紹介されることになる。

*1　一八〇〇年のモイゼルによる。[『学的ドイツあるいは存命のドイツ人作家の辞典』一七五三年]
*2　ヴァリス[(4)]による。『人類の図書』参照。第一巻、一八五頁。
*3　ローマではその著者が友人であったとき、本の朗読への丁寧のお世辞をこう呼んだ。
*4　メンケ『学者録』第四版。

6
小さな薄明かり

A
時代の錯覚

イギリスの皇太子は　ー　ヨーロッパの他の法律とは違って　ー　生まれたらすぐに、九ヵ月の微行(おしのび)の後　ー　成人となる。しかし同様にどの新時代も自らを成人と、従って支配能力があると見なし、未来の皇太子と見なす。

B
講和条約

戦争のすぐそばに今人々はその治療薬、平和を有する。かくてパリ[*1]では火薬庫の隣に傷痍軍人収容所があるし、あるいはあった。かくてトルコの銃の銃床にはすでに絆創膏が用意されている。かくて以前死刑執行人[*2]は、自ら強烈な車裂きを行うけれども、骨折を治すことの除外免除を有していた。要するに至る所で、人間が悪魔の祖母を何らかの天使の産婆としようとしている様を見いだせる。これは、思うに、素敵なことである。

*1　『政治的ジャーナル』一七八九年五月。
*2　『ベルリンの月刊誌』一八〇七年二月。

C
革命の欠点

革命あるいは転覆では必ずしも民族は救われない。君達は民衆を単に溺死者のように逆立ちにし、立っておれないようにする。あるいは凍えた民衆をすぐに暑い部屋に運ぶ。仮

死者はそれで亡くなってしまう。

D

今の時代

時代の嵐のときには、海での嵐のときに真っ先に投げ棄てられるものが、最初に鋳造される　ー　大砲のことで、かくてこのサーベルと銃剣の世紀はまた自然に近付く。シェリングによると自然の中ではすべての物質は単に鉄の変形にすぎないのである。

Ⅶ

未来の福音と哀歌

最も確実な予言は、歴史の六〇〇〇年の暦に従うよりも、むしろ天候の一〇〇年の暦に従うのが予言しやすいということである。私はすでに別な箇所[1]で　ー　別な言葉を用いてであるが　ー　こう質問した。今この瞬間にも女王が（例えばイギリスのエリザベス、あるいは七年戦争のロシアのエリザベータ[2]が）欠けてしまう、あるいは新たな士官[例えばナポレオン]が任命される（例えばパリで）としたら、戦争あるいはチェスの試合の結末を予測する自信のある者がいるであろうか、と。しかしそばに立ち見守っている死神ハインはこのようなことを毎日敢行している。資料なしで君主制について予言することは共和制の場合よりも難しい、君主制は一人の者の生命で興ったり沈んだりするのに対し、共和制では全ての生命を通じてそうなるからである。それ故私は私の予言では即刻矛盾することを言うことに決め、多くの政治的ジャーナリストのように、後になって遅れて矛盾することを言わないことにした。二つの相反する矛盾の中では、一つの予言の場合よりも、その一つが当たることは、何か別なことが生じないかぎり、蓋然性のより高いことでもある。

現実をただ写して模している者と見られないために、予言の日付を記すのが一番いい。今日は一八〇八年の十月の祭日[3]で、王座や山々が髑髏の地となった周知の国家の聖金曜日[受難日]である。私は確実なこととして予言するが、一、二の国が将来三つの役割の中で選択することになろう、まず再び蘇るか　ー　あるいは十字架の許で改宗するか　ー　あるいは十字架から悪魔の許へ行くかである。

一五二九年には我々はイギリスの汗と呼ばれる致命的な疫病に見舞われた、これは睡眠への癖を治すことによってのみ脱出できた。民衆の「覚え書」のように N.B.[ナポレオン・ボナパルト]と名を綴るある男は、確かにもはや眠らせない。しかし哀れなドイツ人は、ドイツ人の侯爵達も重商主義的眠りを禁じないならば、イギリス病に死ぬほど汗を流すことになろう。イギリスが平和に接して、我々に工場の贅沢品をはき出して、黄金や工場を押し流し、そのおびただしい商品の安い値段で我々の購買嫌気を取り除くと、自由な海のために我々は国の商人的隷属から抜け出せなくなるだろう。享楽の新奇さの次に更に工場的ユダヤ人の投機的購入が、直に値段が上がると確信して、金不足の最初の良き反動に均衡を保ち、従って金不足は倍増することだろう。ただ目覚めた侯爵のみが、常備軍の費用を偉大なイギリスの工場制度の模倣に応用して　ー　これは今、勿論大陸封鎖の間にそれ

自体最も容易になし得ることであり、　ー　そして侯爵達がまさにすべてのイギリスの贅沢品をその宮廷で禁ずるならば、援助の手を差し伸べ、癒すことができよう。イギリス製の服をまとう戦闘指揮の宮廷は哲学者達や苦行者達の鋭い集会に似ている、彼らは肉体に対し、つまり食欲や目の保養、肉欲に対して極めて自足した議論、いや公会議の一つを対置し、ほとんど別れようとしない、つまり彼らは食事のときと同様自分達の子供達や女房達、女中達とおしゃべりをしていたのである。このことは筆者以外の他の者達には論考の最初の哀歌に見えるかもしれない。ドイツ人やフランス人はイギリスの商品に関して、エジプト人が猫を扱うようにしている。古代の猫はエジプト人に崇拝され、保持されたが、その繁殖は妨げられ、子猫は溺死させられた。すべては、両民族が良きものは敵のであれ、見誤らず、むしろ身に着け、巻き付け、結び付け、被ることを証している。いやイギリスの商品は信用して　ー　楽園の中の禁じられた木のように（創世記、Ⅲ、３）　ー　ヨーロッパの市場の中でも有すべきものであって、しばしば購入者から売られるという具合に、販売者から二度も買われるという利点を有していた。かくてイギリスの商品は、かつてのスペインの貧しいユダヤ人のようには火刑にならず、スペインの金持ちのユダヤ人のように、貴族に列せられ、高い地位に昇進させられたのである[*1]。

イギリスは植民地や享楽の贅沢よりも販売された工場や虚栄心の贅沢によって我々に害を与えている。というのは工場の贅沢品を断念するのは最も難しいからである。女性はショールよりもコーヒーを断つことの方がやさしい。男性でさえ、例えば将校は、黄金の襟で空腹を我慢する。

私の未来の福音に属するのは、侯爵達が将来これまで食卓や宮廷に列していたイギリス製品の代わりに単に国内品のみを、それも最も高価なものだけを豪華な贅沢に高めることである。外国製品同様に高価な製品では多くの微光が発せられるからである。しばしば侯爵達が情けない流行服(5)を罪人に着せて罰してさらし者にしたのであれば、将来有益な流行服を廷臣に着せて報いて王座に導くことだろう。

戦争の受難週の後　ー　この週にはどの侯爵であれ自分や他人を最も良く改宗させることができるが　ー　平和の復活祭と共に所謂復活祭の戯れの説教が始まることだろう。鳩が（ほとんど鷲の姿をして）オリーブの葉をくわえてノアの洪水のドイツの上に飛んできたら、干からびた後何が出現するだろうか。いずれにせよ昔の緑で（というのはその他にどこから鷲の鳩は葉を持って来れるであろうか）、そもそも愉しい時代である。困窮の遺産の際の緊張や張り切りすぎの遺産であり　ー　安価な妨げられない生活の魅力と陶酔であり　ー　欠乏していた楽しみを取り戻して休息するという願いであり　ー　商取引や政治の力強い奔流であり　ー　購買意欲や販売意欲のある民の最初の集合であり　ー　これまで延期されていた結婚生活、いや延期されていた洗礼の増加であり　ー　こうしたことすべてが、大いなるペストで空になった十世紀の後の生活から多くを、そして生命より更に多くのものを奪った三十年戦争の後の生活から多くを、つまり豪勢な飲み食いの生活をまたもたらし、蘇らすことだろう。

しかし十一世紀にしても十七世紀にしても後に続く贅沢は単に遺産によって豊かになった結果であるばかりでなく、恐怖が消えた結果でもある。恐怖が取り除かれると誰もが快適な生活で元気になりたいと特別に思う。それ故下々の男は災難をしのぐと居酒屋に行き、高貴な者はクラブに行く。

侯爵は人民に対して自国の災難、自国の屈辱の後ほど貢献できることはない　ー　オーストリアやプロイセン等々の例が示す通りである。というのは人々は捕吏よりもむしろ天使に従うからで、戦火の後ではどの君主も常に平和の虹の許、守護天使として立つことになる。従って我らの侯爵にできないことがあろうか。殊に侯爵達がその力を単に内部にのみ向けて、外部に向けず、どのローマ時代の監査官(ケンソル)でも打ち勝った敵に対してのみ戦い 、そもそも外国のことは外国人に任せるならば、できないことはない。というのは私を侯爵として拡大して映す同一の凹面鏡が､私を燃え尽きたものとしても後に残せるからである。

福音。地球を覆うユダヤ人や牛痘の現今の市民権獲得は未来に対して計算外の金や人間の豊かさを約束している。ユダヤ人が純然たる自由国民となれば、国家の一部がユダヤ人の財布の農奴であることをやめることになり、ユダヤ人と共に同時に我々も変わる。数千年に及ぶ関係の廃止は、その最も大きな効果を再び単に大きな時間の中でのみ明らかにすることだろう。ただ大変動の中に立っている目のくらんだ人間のみが余りにしばしばその結果を間近なものと見る、ちょうど（ゲーテによれば)、山々に囲まれているとすべての対象がより間近なものに思えるようなものである。　ー　ジェンナーによって素早く増大する人間の洪水の影響はそれ以上に計算しがたい、これは氷流ともなり得るしナイル川ともなり得るものである。というのは気のいい兵士が殺戮の砲列で対置する低いダムは大してせき止めることにならないからである。すでに普通の、まだ接種によって力をそがれていない天然痘の毒の最中にあってさえ､その支援を受けた戦争は人間を根絶やしにできず、むしろ増やしているのである。徴兵や捨て子養育院が十分にそのことを証している。人間は将来マルトゥス[*2]によれば実際、アブデラ人[愚者]が蛙に圧倒されたように人間に圧倒されてしまいかねず、人々は結局人間の頭に対して雀の頭に対するように賞金をかけるに違いない。しかしこれは我々にとって恥であるがまずトルコ人のなすことで、彼らは周知のように頭で一杯の袋を持って来る。このことは若干役立つ。しかしはるかに慰めとなるのはフンボルトの情報で、幾つかの国民は土を食べ消化するというのである。　ーー

これは願わしいことである。かくて我々は皆、チーズの中の蛆のように、贅沢な脂の中に居ることになって、一度このような穀粒飼料、常食に慣れてしまえば、すでに長いこと我らの食卓兼ベッドである大地が我らの生来の寡婦分となって、見たこともないような最大の固形スープの一つ（巡回無料賄）を食することになろう。我々とミミズが（これは大して食べない）このような地球を食べ尽くしてしまうころには、我々は皆その中に休むことになり、ミミズよりも活動的ではあるまい。

次のことが福音であるか哀歌であるかは予言が難しい。つまり現今のオランダやパリのように、将来至る所で政治的夏の暑さに続いて政治的冬の冷たさあるいは無関心が生ずるであろうということである。すでに復興された取引が、フランスでは利益のためにドイツでは貧困のために増大せざるを得ない金銭欲のせいで、戦火の熱い石炭が支えてきた祖国への情熱を明らかに弱めている。その上多分ドイツの戦争はより少なくなるであろうという事情が加わる。今やナポレオンの方がダルムシュタット侯爵家よりも所謂帝国剣道師範なのだから。

ドイツの自由や教養はどうなるだろう。　ー　フランスとロシアは今確固とした国の鎖連弾[*3]を形成している　ー　あるいはもっと優美な比喩では　ー　政治的パルナッソスの二つの峰を形成している。　ー　ドイツは直に、フランスの戦争術を自らの戦争気質に

結合させて、フランスと並ぶようになるだろう。更に人民の数は優勢を形作るのではなくて、三万のマケドニア人はペルシア人を、四万のモンゴル人は（Paw によると）インドを、五万のタタール人は中国を征服したのであれば、そして高貴な精神モンテスキュー[*4]が自らのフランスの狭い境界に対して祝辞を述べ、その上更に大きな軍勢や船団は小さなそれよりも勝利するのが難しいと証明しているのであれば、ドイツ人は現在、その意志を恐れる必要がないように、将来その威力を恐れる必要もない。ちなみにモンテスキューの見解はもっとナポレオンの兜に月桂冠を授けるものである。ナポレオンは敵よりももっと強くて兵士の数が多いという欠点を有するにもかかわらず、しばしば勝利を獲得してきたからである。地球が水星と戦争すると仮定してみるといい。全地球の大元帥は十億の兵を勝利の戦列に配置するために、惨めな水星の司令官が自ら有するであろうわずかな人々に対して必要とするよりもはるかに多くの視力と力を必要とすれであろう。

まさに、ついでながら先の命題を別な命題、つまり兵士の数の関係は勿論その数が少ないほど、一層決定的であるという命題で若干制限をしなければならないと思う。というのは例えば三万人が一万人に対するよりも、ましてや三十万人が十万人に対するよりも、三人は多分一人を圧倒するからである。しかしこうした諸命題はすべてむしろ互いに証明し合うものである。

ロシアに関しては、この二重のヨーロッパ、この偉大な磁石は、その北方はいつものように南を求めていて、それでロシアはこれまでのところ教養のかなり低い段階から、停滞するトルコを越えて高みに昇っており、一度始められた進歩は（殊に支配者の恵まれた庇護の下で）易々と大股で進んでおり、将来ロシアが勝利したとしても文化を呑み込むというよりは文化を受け入れて広めるに違いない。だからその我々とは離れた粗野な民衆は、オーストリアが勝利したときのその無教養な東部の境界の集団同様、害をさほど与えるとは思えない。

自由は哀歌を告げるものか、それとも福音を告げるものか。　一　短い歴史を長い歴史と区別するべきであろう。第一に、印刷術の発明以前には単に明かりと温かさに満ちた国々の中心地のみがあった。これがローマのように粗野な周辺を暴君的に支配していた。今地上にはもはや火鏡の明かりはなくて、日中の明かりがある。というのはまさにこのことによって、我々の現今の世界は昔の世界とは対照的になっているのであり、それで、昔の世界は単に生活様式によって、つまり行動や支配形態から自由を生み出し、表現し、守ってきたのに対し、我々の思考世界、印刷世界はまさにその逆に、重い珪石から明かりを、隷属から自由を、要するに行動様式から、対立する思考様式を取り出しているのである。従ってヨーロッパでは、風習ではなく　一　これは容易に腐る　一　理念であるもの、どのぼろ紙にも記載されてあるものは、沈んでいくことはない。新しい地球は、本によって、昔の地球のように立法家に依存することは少なくなって、それ故単にすべて天才達の大きなバネによってのみ、生来自由に対して燃え上がり著述する天才達[*5]によってのみ動かされており、それ故不滅の抵抗を行う。

君達は更に時間による地球の拡大の他に、空間による地球の拡大も計算に入れていないか。つまり全ての新世界を古い世界に縫い合わせた磁石の針による拡大である。しかし民衆の多さと共にそれを結合させる難しさも増大する。

最後に、沈んでいく人間の性質は下の深淵では先の高さや明るさのすべての意識を失う

ように、逆に昇っていく人間の性質にとって新たな展望は日常の明るさに見え、他の人々には単に影にすぎないものが彼らには夜となってしまう。我々は今（廷臣やそもそも人間がそうであるように）、時代が我々に多くを与えるにつれて、時代から多くを要求するようになる。例えば今我々は、ある国が短い戦争の期間、戦争の暴力によって四回交互にその背教者、変節者となったことに耐えられるであろうか。にもかかわらずプファルツは三十年戦争のときそうなった[*6]。同様に我々にとって、ザクセン軍が以前仕えていた軍に対立するという電気的反転、あるいは天の稲妻によって引き起こされた転極は目下、同じことをしたフリードリヒ二世治下の同じ出来事よりも目立つものになっている。同盟国ではなかったイギリスのためにそして金のために先にヘッセンで北アメリカに人間を競り[(6)]にかけて送ったということは、ヨーロッパ諸国の中でドイツの連邦分担は全くのただ働きであったということよりも全く別様に驚かされることではあるまいか。しかしそれでも以前ドイツはよく切れる品（剣は切り裂くものである）を伴うかの人民・小売り[切断]・取引に対して、自らをはるかにもっと自由な民と見なすスイス人がそのはるかにもっと劣等な人民の卸商に対して注文を付けたよりももっと強く抗議したものである。ド・ルーヴォワ[(7)]地獄大臣は言った、借用スイス人に支払ったターラー貨幣があれば、パリからバーゼルまで街道を舗装したいものだ、と。ストゥパ将軍は答えた。その流された血でパリからバーゼルまで航行可能な運河を引きたいものだ、と。両者は正しかった。というのはスイス人はルイ十一世から十四世にかけてフランス人に 1146868623 グルデンの慰謝料、新兵金と引き換えに、1110798 人を供給したのだから[*7]。

十九世紀の初頭ではこのようなことにはもはや耐えられないし、招いてもならない。十八世紀の初頭ではプファルツのモロクにして死刑執行人（ルーヴォワ）とその執行人の従者、メラク将軍（それ故目下ブラッドハウンドではない最良の犬は当地でしばしばそう呼ばれている）が見られた。人々は二度自分の目が信じられないほどである、第一は紙上ですべてのプファルツの町や村が灰燼に帰した様を見るときで、第二に現実にその再興を目にするときである。三度の最新の広範なドイツの戦争の中でもかくも多くが大地に消え、空中に散ったことがあろうか。

ローマ人はそれぞれの小さなギリシアの国家に対して、許可という口実の許、独自の立法権を命じた、それはそのことでその中のすべての共同体を、従ってすべての防衛同盟を予防するためであった、とモンテスキュー[(9)]は述べている。主権の多様化、最小の諸国家であれ、その主権の多様化をこれに対置させると、新時代は何と別様のことを目指し、働きかけることができることだろう。

世界史に人類の進歩の足跡がどこかにあるとすれば、それは自由や明かりの途上に見られる。ギリシアやローマがその自由のより高度な集中を他人の隷属のより強度な拡張で購入し、さながら自由の家、自由の場をすべての奴隷市場、奴隷海岸を通じて購入したとすれば、そして男爵令嬢、男爵夫人、男爵[自由人]は、支配される多数の中の支配する例外にすぎなかったとすれば　ー　単にまた所謂自由人、死刑執行人は例外として、　ー　今や確かにむしろ君主制的であるが、国家の目的に従属した近代的な自由が法典によって植民地や黒人、ユダヤ人、代々の隷農民にまで広がっている。

私は福音を続ける。その王冠により小さな諸王冠がはめ込まれた宝石として輝いている多重戴冠の精神が、平和の高齢を体験したら　ー　これは歴史によればすべての幸運な世

界改革者や世界創造者に恵まれるものであるが　ー　この精神は、別の世界に移るとき、ヨーロッパの新しい世界を、つまり新しいヨーロッパというのではなく（というのはこれは既にもたらしているので）、他に新しい大陸を、アジアであれ、アメリカであれ、残すであろう。というのはこのような戦争の諸力は、平和の諸力として使われると、それだけに一層単に世界の新たな奇蹟を通じて、自らを語り、自足することができるからである。この精神は今戦争の痛みの中であってもついでに精神的国家を建設したのであれば、まず年月を通じて戦火が和らげられ、明かりが増すことになったら、予言されないものがあろうか。いや何も予言されない。というのは守護神の力でさえその創造を予言できないのであるから、ましてや観客はできない。しかしながら単に国家ではなく、諸国家を、単に家臣ではなく、その侯爵をも自分の力の援軍に有してきたある精神は、自国よりも外国の方がむしろ許しているこれまでの権力感情の享受を永遠の平和の中で断念するに当たって、自分が兵士の代わりに使節を送り、血によってではなく、インクによって、時代と敵対者を変えていく以外にはほとんど方法がないであろうし（そのように見える）。

偉大な兵士はスッラ等からフリードリヒ二世に至るまで、容易に時代の虐殺から次の海岸の沃野に上陸し、静かになる。世紀の研磨工の周りには、大きな研磨機械を相手する機械工の周りのように、多くの火花が飛んでいて、彼らは全体火の中に包まれる。しかし彼らは、永遠に炎を放つために研磨しているのではない。ナポレオンのような人の前には時代から抜きんでた時間にアンリ四世の高貴な精神が出現して欲しい。そしてナポレオンに言って欲しい、ヨーロッパのために私がなしたこと、そして汝のできることをなすがいい、と。

しかしながら精霊の出現は肉体の出現よりも予言するのが難しい。

ドイツの自国に対する不満は、最近自国に対する信仰が止んだように止むことだろう。カトリック教徒によれば、異教徒の不信の前では奇蹟は生じないということである。これに対して聖ヤヌアリウスの固い血[10]は[*8]、側にいる異教徒が改宗すれば、すぐに流れ出す。洗礼児には後悔ではなく、単に信仰のみが必要であると、同じカトリック教会が言っている[*9]。ライプニッツは神学者達と共に、異教徒は瀕死の際にすぐに信仰すれば救われるであろうと信じていた。今やドイツ人は自分達の恐れるものか、自分達の希望するものになれることだろう。しかし私は、彼らが希望することを、つまり彼らが信仰することを希望する。するとドイツ人にとって雨の星座[プレアデス星団]の代わりに幸運の星が昇ることだろう。それ故薬草を添えずに単なる傷を描くのはドイツに対する罪である。

鷲の飛行から予言する方が鷲の飛行を予言することよりも容易である。現今の紋章の鷲は予言者であり、同時に履行者である。しかし予言は単なる可能性の姿の下で終わるかもしれない。つまり現在のヨーロッパの軍神は、軍神がその甲冑と兜を長い平和に貸し出したら、その武器の上に築かれた帝国に多分もっと深くもっと広い基盤を用意することになるだろう（と予言は言う）、軍神は、単に人間の全面的倫理的性質に基づいてその帝国に強固な基礎を与えた歴史と古代人を承知しているからである。少なくとも平和時には、臆病ではかなわないが、兵士の名誉心だけで国家の正しい基礎付け、成熟がかなうようになる。戦争の名誉心は司令官によって点火されるか、つまり司令官の高い不滅の像はすでに存命時に後世から同時代のために輝き出てくるもので　ー　そうなると国家はその多くの人間同様に長く生きることになる　ー　あるいは教育と教養の途上で民衆そのものに、去

って行く形成者の偉大さが遺贈される。フランス人にとって勿論このような遺産が必要であり、フランス人の再興者はフランス人に対して、時代精神によって精妙に行われた幾多の聖物窃取をできるだけ賠償しなければならなくなっている。例えばフランス人は名誉のために身を捧げるが、他の民族は悦楽に身を捧げる。ひょっとしたら確かに、彼らは現在長いこと戦争の犠牲の祭壇のために備えているので、享楽の隙間の中で自分達の形成され鋭敏なものとなった利己主義が一層強く刺激され、それを見せているのかもしれない。しかしナポレオンにとって美食家の年鑑[11]の読者の胃よりもすべての港を封鎖することが容易であり、これらの読者にとって滴虫類にとっての如く腸管が心臓の代わりとなっていることを考えると、そして人々はすべての感覚的節制の彼の例をめったに模倣しないけれども、その行為の例だけはよく模倣することを考えると、利己主義の毒の樹の根ははなはだ深く張っていて、ナポレオンはその根を引き抜くためには新たな強力な根上げ機を必要としている。しかしまさにドイツとフランスの接合によって、フランス人の名誉心とドイツ人の善良さが互いにむしろ交換されることになって、いやこれがはなはだしく行われ、かつて地理学的にカール大帝の下で認められたこと、つまりドイツをガリアのより重要な部分として仮定し、確定した大帝の下で認められたことが精神的に生ずるならば、それは一つの福音となろう。

戦火は（福音史家的に言えば）きっと家々よりももっと何かいいものを点火したのであろう、つまりドイツに対する心を点火したのであろう。現在祖国愛とドイツへの愛は同一の情熱によってむしろ一つの愛に融合している、火災によって幾つかの金属から析出されたコリントの合金[12]のような収穫物である。ドイツの北部とドイツの南部は　ー　これまで時に双生児が背骨のところで合体して一つの体となるように、互いに反抗的なまま一つの国体に成長してきたが　ー　それにドイツのその中間の国家も含めて、今や互いにもっと親しい関係になり、苦しみの同じ茨の道、同様な自己改善の競争路、競馬場に居合わせている。立派な再生の霊が今や先の帝国墓地で働き、燃えていて、仮死者に生命を吹き込み、骸骨に肉体を与えている。一つの目標となるとドイツの国家間の差異は次第に消えていく。ドイツはそもそも国よりも観念であって、これが気候上の類似や非類似によるよりも観念によって結び合わされてきた。かくてかつて観念によってプロイセンとオーストリアは異なっていたのであり、かくて観念のために、ザクセンはプロイセンと結び付き、全く別様の全く異なった言語の諸民族がオーストリアと結び付いてきた。同じ方言の下の諸民族の差異、同じヴェストファーレン国王の王笏の下の差異は、オーストリアの王笏の下の差異とすると十倍も小さく、かくて一層喜ばしげに人々はドイツ人とのドイツ人の和解を迎え入れる。同様に苦しみの共同体よりもより素敵な共同体によって、国家船の船牽引あるいは船ポンプ排水よりもむしろ同一の、利益を求めて出航するブチントーロでの楽しい船出によって、これまでばらばらの民族はますます互いに、数少ない王笏や　ー　鷲ペンの下、親しくなるであろう。　ー　そしてここで我々は大きな錘に更に最も重い錘を添えなければならない、つまりドイツの民族にドイツの侯爵達を添えなければならない。確かに祖国の父祖にとってはかつて他の父祖達の場合のようにはいかなかった、他の父祖達は子供達が父祖を愛する以上に更に子供達を愛しているのである。むしろ領民[国の子供達]がその侯爵を、つまり周知の者、個別の者、より高位の者を、侯爵が未知の者、多くの者、より低い者を愛するよりもより熱く愛さなければならないからである。しかし今や、

上に自分の一族の樹が深く根付いている大地は、一人の侯爵にとってどんなに神聖なものであるに相違ないことか、小さな植物であれば単に小さな土塊を必要とするだけなのである。いかに侯爵は親族の群れの者達を愛するに相違ないことか、その教え子、代理人、救世主を自身は一身に兼ねているのである。市民の祖国愛はしばしば単に不実花である、侯爵の祖国愛は常に実を結ぶ。市民はしばしば単に一人っきりで、報いもなく犠牲を捧げ、戦う、侯爵は常に一同と共に、凱旋門のために戦う。かつてドイツの侯爵達がドイツ語で考えていたのであれば、今こそもっとそうしなければならない。ドイツ人達はとても自分達の侯爵を愛している。つまり侯爵達の一人にとって、数百万人の愛する心に対してただ一つの心で愛し返すことは難しいことであろうか。

すでにしばしば地上での宇宙君主制が恐れられてきた。我々の世紀では法と理性の君主制[*10]以外の君主制は考えがたく、両半球に今にも降りかかる雷雲は生じないであろうけれども、いつか我々の神以外の宇宙君主が、あるいは動物どもを考えて人間以外の宇宙君主が必要ということになったら、ここで宇宙と呼ばれる地上に対して願いたいことは、それがドイツ人の宇宙君主であって欲しいということであろう。というのはドイツ人の多面性、世俗感覚、コスモポリタン主義は最高の王座に最も適するであろうからである。

ある王制[プロイセン]の墓場のことが話された。この墓場が存在するということになれば、エペソにある聖ヨハネの墓に似ることになるかもしれない。これは、ベッドの中に眠っているかの如く、塚を息する胸で上下に動かしたのである[*11]。

我々は将来フランス人との異腹児財産同等契約、損益割当勘定によって我々の国民的性格を失い、色褪せたものにしないだろうか。しかし同じく混血するといってもフランス人は何故何もそのことを心配しないのか。　ー　そのように簡単に失われる性格というものは失われるのがいいのである。というのはそんなものは性格といえないであろうからである。勿論これまで宮廷人や世の紳士は体をパリから取り寄せて、パリの[人工の]胸、パリの尻[下着]、[付け]髪、腹、顔の白粉、その他体に必要なものを組み立てた。同様に内部の人間の髪や胸、尻もそうしたのである。しかしここでは先の中身のない、自発的な猿真似はまさに将来の反作用を前提としていて、従ってフランスオペラの下稽古コーチのリハーサル・コーチを前提としていない。言葉に関しては、おそらく我々は、フランス人がそのより貧しい言葉を忘れるよりも､そのより豊かな言葉を忘れることは少ないと思われる。それは単に、いつもドイツではフランス人の百姓よりもドイツ人の百姓が多いであろうからばかりでなく　ー　プロイセンの戦争捕虜でさえフランスから多くのドイツ語を持ち帰るであろうからで　ー　また単に、我々の多面的な力のある文芸は仕舞いにはフランスの文芸に浸透していく、この炎の民族がナポレオンや平和、ドイツの許で更に力を強めるにつれ、一層浸透していくからでなく　ー　また単に、文学的強さは模倣し、真似することはないが、ただ弱さのみが模倣するからでなく　ー　また単に、かつてドイツ語の演説に課されていた罰[*12]は、それでも我々にドイツ語を妨げはしなかったからではなく、そうではなく、フリードリヒ唯一王が立派なフランス語の詩を残したのは、その父親がただフランス語の散文を話すことさえも不快であると彼に禁じた後であったからという理由による[*13]。我々にドイツ語を話すのを難しくしたり、禁じたりするがいい。そうすると我々はドイツ語を腹蔵なく、この渇きと胆汁の源[腹]から離れて、話すことになろう。ドイツ人の猿真似は、ドイツ人の模倣へと崇高化されて、まさに最も容易に商売や関係を通

じてフランス人から我々の完成に欠けている長所を学びとることであろう。はるかに模倣することの少ない民衆に関しては、まさに気候と比例して民衆はドイツ的性格を最も堅固に維持することだろう。かくてドイツの北方は、即ちドイツのかなりの部分は、その力強い独自性にせいぜい外国の穏やかさを注入することだろう、そしてただ南部が西部の方にはなはだ顔を向けることだろう。オランダとエルザスを同時に考えるといい。

ライプニッツは言った。未来は現在によって孕まされる、と。ジュピターは霧の姿でイオを孕ませた。しかしこの現在と、従って霧の状態はまだ続いているので、予想はどういうことになろうか。しかしながら百姓は皆、霧のときに種を蒔くように勧めている。

*1　ドヌワ夫人の『十七世紀のスペインを通っての旅行記』(最良の旅行記の一つである、彼女はフィッシャー[(4)]のように外面を描かず、内面、高貴なものを描いている）の中で、二十人の貧しいユダヤ人が仮借なく火刑にされた同じ週に、金持ちのユダヤ人は宮廷で、侯爵、サンティアゴの騎士、国王の賃借人と、勿論金と引き換えに、なったと記されている。

*2　彼によれば人民は二十五年で（オイラーによるとそれどころか十二と五分の四年で）倍増する。人間は幾何学的進歩で増えるが、しかし食料は単に算術的進歩で増えるので、十億の人間を仮定すると、人口と食料の比は二百年では 256 対 9 であるが、三百年では 4096 対 13 となる。しかしすでにズュースミルヒがその『神的秩序云々』第一巻二九〇頁で、すべての大陸は創造後一六〇〇年には現在と同じ程の人口であろうと証明した。

*3　鎖連弾は周知のように二つの半球から成り立っている。

*4　『ローマの隆盛と衰退』二十章。まさに最も虚弱な民衆が（ゴート人やヴァンダル人)、最も強固な帝国を築いた。

*5　例えばフランスにとってのモンテスキューやモンテーニュ、ヴォルテール、J.J.［ジャン・ジャック］、ディドロ等を考えてみるといい。

*6　シラー。プファルツは六十年のうちに二回新教を誓い、二回カルヴィン派を誓わなければならなかった。

*7　この数値はシュレーツァー[(8)]の（目下再読できる）書簡集参照のこと。第六部、三十二分冊。

*8　『普遍文庫』第九巻、四二九頁。

*9　教皇教令　第三部、第四区分、九九章

*10　モンテスキューは（『法の精神』Ⅸ巻、六章、七章）で、ルイ十四世の下で宇宙君主制とならなかったことをフランスの幸運と称えている。

*11　アウグスティヌス『ヨハネ福音書注解』ＸＸＩ、23

*12　以前学生に対して（学生組合で）ドイツ語の演説には罰金が課せられていた。マイナース『大学史』第一巻。

*13　ペルニッツ『回想録』

7

小さな薄明かり

A

パスクイーノとしてのナポレオン

私の意志に反してこの表題は検閲官に二重の苦労、最初はこの記事を抹消して、次にはまた強調するという苦労をかけることだろう。というのは二番目の句点に行くまでは、ここで私がレッシングの『論文集』の第二巻から引用して、何人かの者はパスクイーノ[13]の美しい彫像をアレクサンダーと見なし、他の者達は軍神マルスと見なしているということを読み取れないからである。フランス人の軍神あるいはアレクサンダーは著者達によって、その像にプロイセンに対する諷刺を掛けるために悪用されなかっただろうか。

B

ドイツの秋播きの種

我々が真のドイツ的教育と文芸によって後世に二つの不壊のドイツの記念碑を残すならば、それで十分で、まさに聖職者に劣らず、　ー　諺に従えば、聖職者は本と子供達しか残さないそうであるが　ー　本と子供達を残すことになろう。

C

新聞記者

勿論新聞記者はビリヤードの記録係で、どの玉が正しく進んだか否かを我々に告げる人である。その人が正直な人であれば、その人を信ずる他何もしないでよく、一人の記者で千人の読者の用に十分である。これらの政治的証人が疑わしい、あるいは本当に嘘をついているとなると別の話である。その場合、通常のローマ・ドイツ法によれば、その話を信ずるに当たっては、記者の数はどんなに多くても構わない。というのは法的には二人の疑わしい証人は一人の立派な証人に相当するのであって[*1]、完全に信頼に足るものと証明するには、それどころか四人の信頼できない者達を準備し、用意しなければならないのである。それ故しばしば信頼できない勝利の信憑性ははなはだ新聞記者の数の多さに懸かっている。立派な政治は望むらくは、　ー　そうしてはならないのだから、　ー　他の記者と矛盾し、対立していない記者を除かないで欲しい。

*1　疑わしい証人二人は適切な証人一人に相当するので、疑わしい証人が四人いれば十分に証拠能力をもつ。ホンメル、『市井日常質問集ラプソディー』観察　二一[14]。

D

運命の倫理的影響

余りに多くの幸運は余りに多くの不運同様に非倫理の中に諸民族並びに人間を追い込む。かくて池の魚は過剰な冷たさと暖かさのときにのみ身を泥の中に突っ込む。

E

慰め

善は数世紀かかって育つ、悪は瞬時に育つ。善は時間によって生き、悪は時間のせいで死ぬ。これが別であれば、我々は楽園の後すでに煉獄すら失っていて、今やここ予備地獄[リンボ]に据えられていて、冷たい予備天国へ飛び上がる代わりに、ある深淵、地獄から次の地獄へと次々に身を沈めていることだろう。にもかかわらず露の命の者、瞬間の人間は、善が自分同様すみやかに生じ、悪が沈むことを欲していい。長い過去が人間のために集め、運んできたものを、人間のために須臾の現在は完成して築き上げるべきである。その後人間はその穀物倉を味わい、それから諸世紀の次のことは構わずに家の棺の中に帰ろうとするであろう。

F

現在の時

我々の世紀は溶岩で一杯の、またキリストの涙[ラクリマ・クリスティというヴェスヴィオ山麓のワイン]で一杯のヴェスヴィオ火山である。その山に登るときは、その灰の上に立ち止まらないようにしなければならない、下に滑り落ちず、絶えず上に登ろうと欲するならば。

G

組合と古参

なぜイギリスほどにより早い地位、郵便局長というものは他にないのだろう。これはイギリスでは誰でもそれになれるからであり、この地位に就くには　ー　かのペルシアの王[ダリウス]が王位に就くときと同様　ー　馬によって推挙されるしかないからである。これと組合制度、古参制度を比べるといい。

Ⅷ

金不足と非常予備金

勿論冗談で言うかぎり、差し当たり幾多のことが真実である　ー　発砲、爆音の金属は我々の現在流通の現金の貨幣である　ー　十八世紀のジャコバン主義者に似て、十七世紀のジャコバン貨幣も[戦火で]珍しくなっている（そう同時の二十四金貨は呼ばれた）　ー

というのは真の逃走[踵の金]はまさに軍税であって、銃剣は質草同様に持参人払いだからである。何ということか。善良なドイツの心からはほんの一片の賢者の石があれば、何という苦しみの石が取り除かれることだろう。そのほんの一グラン（0.06g）あれば、三億

四五〇万ターラーを金に変えることができるのだから[*1]　ー　とそう冗談を続けて言えよう。

なぜそうしてはならないか。冗談はここでは真面目さよりも高貴ではないか。ストア主義の冗談鳥はやるせないコノハズク[死を予告する]よりましではないか。

男達は今や全く恥知らずに嘆いている。国民新聞やドイツ新報、商業新聞は赤面することなく涙の中を泳いでいる、忘却のレテの川で和合する以前に。

ロンドンとかパリあるいはブーフホルツあるいは時代は我々から初期のキリスト教徒やちょっと昔の古代人の高貴な見解を抜き取ってしまい、それで我々は国家に対して金不足ほど大きな不足はないと訴え、嘆いている。

我々はかつて夙に早くより豊かにセネカ同様富を金の糞のように蔑んでいるのに、富が消え失せると、突然富は天上的な月の銀、太陽の金となってしまったのだろうか。もはや物質主義者のエルヴェシウス[*2]のように立派の者になってこう言えないのだろうか。貧しい民族は豊かな商取引の民族よりももっと名声欲を有し、幾人かの偉大な男達を有する、と。　ー　我々は戦場で肉鍋を失うとすぐに一切を諦めて逃走するトルコ兵に[*3]、鍋の代わりに財布が相当する点で、似ているのであろうか。似ているのか。　ー　勿論似ている、というのは金と肉の違いは金と心の違いよりも小さいからである。　ー　勿論この件は、我々が卑小な金と心とをハレムでの花言葉のように関連付けるならば、つまり恋する男が恋人に送る小貨幣は自分は恋煩いをしているという意味であるとするとき、幾らか穏やかなものとなる。商人的ドイツ人は、つまり彼らコーブルク人が、プロイセンや他の小貨幣を封印して送るとき、友人達にただこう言おうとしているのではないだろうか。私と商会は煩った心を有する、と。現今の小売商や他の臣下に、侯爵に対して何を望むかと尋ねてみれば、彼らは皆こう答えるだろう（ちなみに十分気の利いた言い回しである）、侯爵の頭部が首の上や貨幣の上で約束しているものを望む、と。つまり侯爵達は頭部に金で一杯の王冠を有するのである、ちょうど左官がしっかりした建物を築くために頭上にモルタルで一杯の桶を有するようなものである。しかし偉大な古代人は勿論よりしっかりした人間のモルタル、あるいは国々のモルタルを、つまりまた人間を有していた。

イギリスはこれまで我々に百年にわたる不可避の軍税を　ー　毎年の三回の市で支払えるものを　ー　課してきた。フランスはエピソード的軍税を課した。イギリスの[紋章の]豹は我々ラザロの傷口[(1)]を我々が眠っているときにすら、その吸血鬼の舌で休むことなくなめてきた。フランスの[紋章の]雄鶏は数回強く我々をつついて、目覚めさせた。死ぬほど永遠になめられるよりは、三回かまれる方がいい。ゆっくりむさぼり食い、神経虫のように、天から落ちてきて、もぐり込み、もっと深く散々穴をうがつ国難ほど救いがたいものはない。というのは偶然のおべっかとか瞬間的な好意は、敵の増長を隠してしまい、抵抗の激しさを殺いでしまうからである。それ故我々はイギリス人に対して、青虫が自分達に致命的な卵を生み付ける昆虫に（スワメルダムによる）対処するように振る舞う、つまり青虫は、自らそれで没落するけれども、自分同様にこれらを大事にしながら繭を作るのである。

練達の医師が下痢に対して下剤を処方するように、我々にはイギリスの金の下痢に対して下剤の軍税が命じられた。これは勿論我々の気に入らぬことであった、我々は下痢で死ぬ者は誰でも浄福になれると主張するタルムードを信じていたからである。ちなみに　ー

多くの方程式の項(こう)故に苦労が大きいけれども　ー　イギリスの商人的軍税の廃止とフランスの戦闘的軍税の設定とを比較し、一方の側の港や財布、胃の封鎖と他方の側のお金の流出の間の損得勘定をしてみることはやり甲斐のあることであろう。ただこの計算の秤では、不運な商家や町ではなく、単に国々や大陸の部分が量られるべきだろう、少なくとも最良の陸地、ヨーロッパが量られるべきだろう。イギリスが我々の将来の貧窮によって豊かになり、遂には我々が穀物商ユダヤ人のヨゼフの許のエジプト人[(2)]のように、　ー　あるいは賭け事の際の古代ドイツ人のように　ー　結局自分自身しか賭けに出し、差し出す他なくなるのであれば、容易に予言できるのは、イギリスの破産ではなく、ヨーロッパの破産であろう。ただそのことを通じて我々はまたより楽しい道を歩くことになろう。我々は、船で送られて、イギリスの植民地に自ら住むことになろうからである。これはひょっとしたら、彼らが遠方から所有するよりも何かましなことかもしれない　ー　そうなると我々はすべての植民地の品を当地の奴隷同様に、直接手にすることになるかもしれない、つまりそれを作り上げた手そのものから、我々自身の手から手にすることになるかもしれないのである。

急速なお金の流出は急速なお金の流入に似ている。ただ両者は瞬間的に対立した作用をもたらし、この作用を時間がやがて調停し、逆転させる。南アメリカで大きな籤を引き当てているスペインと刀で剃髪して乞食教団となっているドイツは役割をやがて交換することだろう。軍税というのは勿論、医師達が時に盲目に対して処方するかの失神にまで至る瀉血に似ていて、まさに大仕事に対してより強い麻痺を引き起こすことになる。しかし奇妙な治癒力を有していて、国家にあっては戦争の被害や火災の被害を受けた部分を修復する。放火犯ルーヴォワによって灰燼に帰せられたプファルツの諸都市を思い起こすといい　ー　七年戦争でのザクセンやプロイセン　ー　フランス戦争でのライン地方　ー　三十年戦争時のドイツ、このときは（シラー[(3)]によると）単にヴァレンシュタインだけで七年間で六百億ターラー（？）の軍税を徴収したのであるが　ー　金と平和に乏しいオーストリア　ー　アシニア紙幣の籠を有するフランスを思い起こすといい　ー　思い返して、そして前方を見て、いかに国々の傷が直に一人の戴冠の外科医の力で癒えるか知るといいのである。

小国でさえ何に耐えているか　ー　その上毎年の軍税に、ヴァレンシュタインも課さないような、より大きな軍税に耐えているか、このことは先のニュルンベルクの人々が証している。ニュルンベルクの誰もが毎年収入の六分の五を、例えば 4166 フロリーンのうち年に 3446 フロリーンを国庫に納めなければならなかったのである。　ー　その収入は二十幾つかの貴族の家庭を循環したのであるが、しかしついでに五千万の借金も[*4]、さながら動脈の横の静脈という具合に循環したのである　ー　それでもニュルンベルクは今なお存命であり、生き返っている。

大きな変革や新しい帝国に侵入するときはいつも昔から財布が空になっていたものである、ちょうど大都市（パリやロッテルダム、ウィーン）に到着した者が最初水のせいで強い下痢を体験するようなものである。フリーメーソンでは入会者は入会式の間すべての金属を身から離さなければならないのであれば、同様に戦争も　ー　これは正真正銘の「恐怖の兄弟[(4)]」で　ー　そのことを要求する。

今は金持ちよりも帝国の方が多いと言葉遊びでは言えるけれども、しかし今はオットー

一世の以前よりも二倍にいい。というのはまず第一に鉱山にまだ良い金があるからであり、第二に財布にまだ悪い金が残っているからである。この利点は以前のドイツに欠けていた、ようやくオットーの治下ゴスラー近郊の銀鉱と銅鉱が発見されたからである[*5]。

我々のイギリスとの金婚式により、そしてフランスとの銀婚式により、我々の金鉱脈が遂に尽き、不要の金が取り除かれるという希望が抱かれるならば、すべての食品の値段が、商品とお金の昔からの両替の重みに従って　ー　半分に下がるに違いない、これまで享受によって昔からの値段を維持してきた舎営が撤退されさえすればの話であるが　ー　しかしそうなると多分、品物よりもお金で支給されてきた各国家の公僕の住まいは、つまりいずれにせよ教授や裁判官、官房の官吏、年金生活者、資本家の住まいは、別荘となるであろう。いかに彼らが利潤や剰余金を得ることになるか計算しがたいほどである。しかし品物所有者、販売者以上に給与所得者が優遇されかねないとしても、上述の国家の公僕は現在戦時下では大して支払われてこなかったということで前もってかなり相殺されたことになる。若干将来の富が現在の欠乏、借財によって調停されるという規範である。

金不足は本の市に最も損害を与えたように見える。それでイギリスの雄弁はイギリスの借財と同時に増大したとすれば[*6]、我々の下では逆に貧窮が沈黙を支えてきたことになる。あたかも財宝と舌[教団教区]はマルタ島騎士修道会同様同じことを意味しているようなものである。クリゾストムス[6][黄金の口]の黄金の口をもほのめかすことができよう。にもかかわらず二つの事柄を述べることができよう。第一は、本の市はすでに戦前に支払われ　ー　なくなっていたということであり、第二に、本の市は以前から、圧迫された北部で失ったほどにも、戦火や兵を免れた南部では儲かっていなかったということである。全体に喜ばしい印である。本はつまり我々にとって最も貴重なもの高価なものである。というのは我々は本を、困窮の際には真っ先に犠牲にし、無くてもいいものとする貴金属装身具に勘定しているからである。

ヨーロッパは他の大陸と比べて、すべてを有するのに、分別や気候から、更に飼い慣らされた動物に至るまですべてを有するのに、金だけがないのは奇妙なことである。というのはヨーロッパでは例外なくどの国も金属が十分でないからで、単にスウェーデンだけではなく　ー　そこでは一ターラー銀貨を両替する方が稼ぐことよりももっと難しくて　ー　あるいはフランスでもそうで　ー　そこで戦争の四度大当たり、五度大当たりに当たるのはむしろその生命をさながら籤のように賭けている者達の方であり　ー　この両国ばかりでなく金鉱を有するすべての国を通じてそうであり、ロンドンにまで至る。ロンドンでは（以前のアルヘンホルツによれば）多くのドイツの町よりも硬貨の流通は少なくて、それでイギリスでさえその国家の翼は、デーゲン[7]が飛行機械の翼をそうしたように、接着した紙からできているのである。多分このようにして商業や学問はぼろ紙や亜麻に依存しており、民衆の徳操が絞首索や麻に依存しているようなものであろう。要するに我々が一部苦労して大地から掘り出している我々の金は、またそれを埋め込んでしまう所、つまり東インドに去って行くのであり、遂にはそこではもはや余り金は望まれず、必要とされなくなっており、我々は彼らの商品に飽きるほどになっていて　ー　国家がフィヒテの閉ざされた商業国家に昇格しているなんてものではなく、（より容易なことであるが）ヨーロッパそのものが昇格しているのである。

我々の金不足に対する我々の苦情は同時に我々の倫理不足についての苦情である。とい

うのは戦争は我々に大地や太陽、諸々の手、諸々の顔、諸々の心を残しておいたので　ー　従って金のないスイスの谷で浄福な生活を送るのに必要なほど以上のものを残しておいたので、それで我々の嘆くべきものは贅沢の剥奪を措いてなく[*7]、つまりより小さな部分、即ちより豊かな部分の剥奪や貧窮を措いてない。我々にはまだ噛みつくもの、砕いて浸すべきパンはある。しかし我々は欠けた歯には金歯を願うものである。（ヒュームによると）中国を除いて、すべての国家の欠点は、国内の商品を立派にするよりは、むしろそれ以前に外国の商品を取り寄せることであるが、この欠点を我々は維持しようとする。そして我々は、戦争時に攻撃の代わりになされる防御を通じてそうするように、平和時には活動の代わりになされる受動を通じて、立派に従順に耐えながら、遅かれ早かれそうなる結果に至る、つまりくたばってしまう。

それ故ナポレオンの王笏のような梃子でさえ、ヨーロッパを高く持ち上げ、東インドと釣り合うようにはできない。大きな、壁に囲まれた人民のバスティーユ監獄のせいで、つまり中国のせいであり[*8]、そこに我々は、かつて国王達がパリのバスティーユにそうしたようにお茶のために宝庫の金を預けるのである。人々はお茶と中国を批判して図書の半分を書くべきであろう、つまり最も高貴な大陸を吸い上げ、馬鹿にする風変わりに自己中心的な卑小な国を批判して、コーヒーがその愛飲者を炎のアラブ人に変えるように、その愛飲者を儀式的な中国人に変えてしまう飲み物を批判して図書の半分を書くべきであろう。ドイツがまだコーヒーの代替品の半分ほどもお茶の代理品を思いついていないのは結構なことである。というのもそれは、大勢の者が、インドの火酒がようやく生気付けるに違いないような、予言や執筆や中傷に役立つ黒いコーヒー時間に匹敵するほどの、多くの気の抜けたお茶の時間を享受する必要はないことを証しているからである。中国だけでイギリスは　ー　自国や他国の償却資金が援助しないのであれば　ー　貧しくなることだろう　ー　というのはイギリスは　ー　全プロイセン、オランダ、デンマーク、ドイツ、スイス、それにフランスの一部が毎年六万箱以上のお茶は消費しないというのに　ー　自国だけで二十五万箱毎年飲んでいるからである[*9]。

*1　『医師のためのバルディンガーの雑誌』の中のメーゼンによるトゥルナイザーの生涯。第五巻、第五分冊。

*2　『精神論』第三巻、23.

*3　フェリエール・ソーヴブフ伯爵による。

*4　この信じがたい話は、というのはドイツ新報によれば一千万であるからで、ヘッセンの『飛行』第四巻、五〇頁に載っている。

*5　ハッヘンベルク『中部ドイツ』、普遍文庫　VI.　三六〇頁。

*6　ヨーロッパの年代記である者が主張している。ブーフホルツは『日輪[(5)]』の中でちょうどその逆を主張している。

*7　植民地の薬物の略奪は、植民地の毒物の略奪によって、より小さな略奪となる。毒物が薬物を一層必要にしたからである。

*8　モンテスキューが（『ローマの隆盛と衰退』二十章）要塞を勇敢さの堕落の印と見なしているとすれば　ー　それ故まず没落していくローマは要塞の壁を頼りにしたのである

が、　ー　そして自由なドイツ人がすべての壁を回避したとすれば、中国の壁は三億三千三百万人の格子垣として明らかに、そこで成熟し這い回る人間の植物を表している。
*9　『北方の雑録』X. 五。

8
小さな薄明かり

A
検閲の自由(8)

インドの女性は夫の本当の名前を生前に発音することを許されなかった。同じ畏敬の念故に家臣は、多くの侯爵や勝利者の正式の名前を逝去以前に呼ぶことを許されていない。それでなるほどと思われるが、侯爵の行為は、以前フランスの皇太子達がそうであったように、二度の洗礼を受ける、誕生後の略式洗礼と後年成熟してからの固定的名前での洗礼である。

B
政治家としての学者

近代史では公使や大臣、大元帥達が最新のことを予見したり、予言したりすることはなかった　ー　さもなければ近代史が歴史となることは全くなかったであろうからである、ー　そうではなく閉じ込められた著者達がその鵞ペンで予備歴史を書き上げて、後の歴史としたのである。それで彼らは残念ながら敵の襲来を告げたカピトリヌス丘[ローマ]の単純な鵞鳥に似ることになるが、一方特にこのような告知のために飼われていた賢い犬はガリア人が登ってくるのに一声も発しなかったのである。それ故ローマ人は何世紀も毎年一匹の犬を接骨木(にわとこ)の枝で打ちすえ、突き刺すのを公正なことと考えた[*1]。

*1 Flor. Ⅰ. 13. 15.

C
宮廷の言葉

現在フランス語を間違って話すことは、ほとんど愛国的行為であると、そのようにかつて自らのゲルマン主義はただのフランス語的語法に存在していた者にかぎって言うことだろう。

D
国家の思慮

ローマの元老院が思慮の敗北の後[*1]、神殿を建てて、激しい情熱に対する賢明さの優勢を敬うことにしたとすれば、そして勝利の後でさえナポレオンは同じく賢い神聖さの神殿の通り抜けを禁じているとすれば、我々ドイツ人はこのような教会を築くための募金を呼びかける二つの理由を有する。というのは我々には勝利も敗北も欠けていないからである。

*1 『普遍文庫』第六巻、九八頁。

F

タンプル(9)

周知のように神に見離された革命の下にただ一つの神殿、タンプル刑務所があった、ここでは神々のために犠牲にしたのではなく、神聖なものそのものを犠牲にしたのであった。それでもこの名前は十分学問的に納得のいくものである。というのは以前テンプルム[*1]という名はまさに偉大な精神が生を享けるか生を離れる場所の謂であったからである。タンプルでも十分同様な精神が出現し、消滅した。

*1 リヴィウス(10) I.7. アウグストゥスの項のスエトニウス、５章。

F

フランス人の語学

フランス人が新しい外国語、つまりこれまでほとんど知らないでいたことに、これ程習熟したことはなかった。多くの人が今やドイツ語を解する、それもフランス語を知らなかったドイツ人を通じてのことが多い（ちょうどドイツ語を知らなかった親方からフランス語を学んだ先のドイツ人達の模倣遊戯のようなものである）。エウロペ[ヨーロッパ]の乙女は、そのフランス語の女性家庭教師、つまりポーランド語、ドイツ語、イタリア語の女性家庭教師となった。この語学の子守はこれらの語学学習者達を、その素早い授業課程を通じて、方言から方言へと案内していった。ただ彼らは英語だけはまだ自家薬籠中のものとしていない、しかし彼らは三つの補助言語に強いので楽であろう。 ー しかし生徒達の間違いに関しては生徒ではなく教師を罰すべきであるとするクウィンティリアヌスの規則を守るのはいかに有益であるか人々は気付いている。 ー かつてドイツの教育施設では生徒はその持参してきた銀のスプーンやナイフを残すものであった。これに対しエジプトでは、イスラエル人達(11)が十分にエジプトの英知を修得したら、生徒達や卒業生達は旅立ちの前に神的命令によって講師達の銀を持ち去るのであった。しかし軍税という言葉ははるか後年の（多分ローマ時代の）発明である。

IX

宗教の現今の冬至[夏至]について

勿論今では改宗した未開人が我々自身にまた異教地伝道者を送ることができよう。　ー

以前写本の聖書には五〇〇グルデン金貨が、最初の印刷された聖書には六〇グルデン金貨が、後には三〇グルデン金貨が支払われたとすれば[*1]、少なくともある種の身分の人達の許ではむしろこれは逆転していて、印刷された聖書は現在彼らの許ではかつての写本の聖書並にほとんど見られなくなっている。教会はかつて十字架の形で建てられていたが、その姿で今日の運命を表現している。　ー　今では宗教的偽善者よりも容易にあらゆる偽善者が、無宗教の偽善者さえ見いだされる。ディドロは食事の際、空いた席を置くことを要求している、子供達に目に見えない神を思い出させるためである。　ー　空いた教会の席で我々は十分立派に遍在の神の住まいを表象している。　ー　宗教はより長く自らを紡ぐほど、一層薄くなった行かないだろうか。神学を教えるルターでさえ三人の息子の中で神学に身を入れる息子は一人だけで、つまりマルティンだけであり、ヨーハンは法学を、パウルは薬学を修めて、ヨーハンは大法院参事官として、パウルは枢密顧問官として、両人ともヴァイマルで任官されたのではなかったか。しかしマルティンは任官されなかったのではないか。

特に以前からより高い身分の王座や王座の段は教会の席となることはまれであった。教皇の席は、時代にさえ反して、ひょっとしたら世俗の王座同様に多くの無神論者が座っていたかもしれない。そもそもすでに昔から高貴な南方人は高貴な北方人ほど宗教的ではなく、ましてや卑俗な南方人は宗教的でなかった[*2]。教皇達や枢機卿達、フランスの国王達をスウェーデンやドイツ、デンマーク、イギリスの宗教的侯爵達や大臣達と比べるといい。モンモランシー家、つまり最古のフランス人家庭はその昔の肩書「フランスの最初のキリスト教徒にして最初の男爵」をまだ全面的に引き継ぐことをその労に値すると思っているか、それも不確かである。

しかし北方が自らその森を伐採し、かくて南方ほどに熱くなると、我々の許でも気候上の温かさは宗教上の冷たさをもたらし、こう述べる人が増えてくる。私は何事も信ずるが、ただ神だけは信じない、と。同じことを別な文でも言えよう。優美な階級の人々は教会に座っていることよりも、教会に、死後ではあるが、寝ていることに慣れていて、従って存命中よりももっと弁解して眠ることに慣れている。説教中教会への車道に張られる鎖は、今ではすでに説教以前に封鎖しているように見える。

高貴な階級は夙に、後の時代のギリシア人のように神話学を自然科学に変えていて、あるいは自分達の神をギリシア人のように描写できるだけでなく、つまりジュピターを四角な石に、ダイアナをサーベルに、優美神を丸太に[*3]模写するだけではなく、更にもっと美しく、つまり例えば領地や大臣職やある種の少女や雉等に模写することが本当にできるのである。かくて日光中の塵埃が太陽を隠すように偶像が神を隠す。

ストア派や他の派の人々は魂を神性の一部と見なした。しかし謙虚な生気のある世の紳士は、この自分の部分だけで満足していて、一度も全体を望んだことがない。

しかし現今の宗教の冬の時代は、それが単に偉いさんの上部に留まっている限り、まだ強烈な欠点をもたらしていない、それがもたらされるのは、それがより深く低地に落ちてきて、すべての芽を凍えさせるときである。しかしフランスでは　ー　フランスそのもの

は、ひとまとまりの偉大な民族というよりは高貴な民族であり、少なくとも立派な町パリではそうで、この町は、以前の中世すべてのヨーロッパの神学者を養成する大学から、後年最後のルイ王の下、無神論の工場の町となってしまったが　ー　革命が無宗教の平民の獰猛な姿を露わにしてしまった。それ故ナポレオンは、政治的に可能な限り、モンテスキュー[1]によれば君主制の、特にフランス人の君主制のバネであるという名誉の他に、更に宗教のバネを鍛えたり、巻いたりしようとしている。彼はこの子孫からはひょっとしたら父親達に勝ることを期待できるかもしれない。

ここで宗教の建設のために若干の提案がなされるならば、それも宗教が、敗北したドイツを救い出すべき時代に、そしてかつて肉体的聖遺物がそうであったように宗教が精神的聖遺物として町の守護者となり得る時代になされるならば、ただ目的としての宗教の純粋な愛は手段としての宗教の不純な愛と見なされてはならないということである。宗教は国家の教会のパレードではなく、心臓そのものであり、従って不死性に属していて、せいぜい現世的なものに敵対して勝つべきであり、現世的なものに味方して勝つべきではない。天は地の従僕とはなりえない、あるいは祭具室や至聖所は国家の無料給食所に改造されえない。

立派な芸術は今や、自分達に以前教会で養成所や避難所を与えていた宗教に対して感謝してお返しをする義務や契機を有する。というのは、以前聖職者が、ヘスによれば[*4]、民謡や演劇術を維持し、後見したように、そしてその教会がすべての立派な芸術を維持し後見したように、この恩誼を受けた者達はまたより高い身分の許でこの恩人のために働くべきであるからで、そして多くの民族の許で、ギリシア人やローマ人、アラブ人の許で神殿が本や歌声を保ってきたように、再び本や歌声の中には神殿が保存されるべきであり、詩人は職匠歌人のようにただ教会でのみ（より高い教会であるけれども）歌うべきであるからである。今では偉い人の心に迫り、動かすのは単に詩人や芸術家であって、司祭ではない。　ー　それ故聖母のように詩人達は神聖さが美と融合していて欲しいものである。中世の頃は十分に宗教の豊かさが見られ、宗教を犠牲にすることなく、宗教と戯れ、冗談を言えた。我々の時代は宗教に悪意を抱いている。しかし冗談を言う敵は冗談を言う味方よりもその笑いは危険である。

それでも私は当世の神秘的な詩人達に対しては、　ー　ルターの荘重さの著者[2]でさえ例外でなく、ましてやニオベの著者[3]も含めて　ー　精神的教会の修理のためへの助力をほとんど期待していない。彼らは我々に信仰と不信仰とを同じような信仰で戯れ、歌ってみせる。単なるこうした無宗教との宗教の和合、こうした尼僧と娼婦との詩的戴冠式、要するにこうした対照的なものの同等な混同が必要になるとしたら、単に結局すべてのものが戯れる非倫理性の死の海に浮かび漂い、一切が同じことになって、神的な詩文が無神的な詩文、あるいは神に去られた詩文に似たものとなるためである。（というのは多くの新たな詩人神秘家が宗教を愛し捉えるその流儀ははなはだかの官能性に似ているように見えるからで、つまりかつてあるスペイン人が教皇パウル三世の墓地で宗教の美しい女性像を抱擁した際の官能性に近いのである[*5]）、　ー　まことに、神聖な対立を深く掘り下げることで立派に分離して呈示するヴォルテール的軽薄さの如きフランス人の大胆な軽薄さは、このような平凡な偏平化よりも害が少ない（あるいは　ー　移行句が許されるならば　ー　ヘルンフート派の結婚の時の宗教の聖なる精神とのこのような肉の混和よりも害が

少ない)。

しかし君達が君達自身を通じてより明瞭に自覚しているであろうが、君達見せかけの神秘家、戯れの神秘家よりも、より敬虔な詩人がいる。ひょっとしたら自身の神性の他には隠された神性を見つけていなかったかもしれないフェヌロンやパスカルといった真の神秘家も及ばなかった、より敬虔な詩人がいる。　ー　私はそれ故ここでむしろ私の目をある詩的精神に向けることにする、この精神はすべての自分の作品を通じて純粋な天国のエーテルを吹き寄せたのであり、その中では聖なる神殿の通路以外での不浄な音を嫌ったのであり、さながら精神的なオリエント人としていつも開かれた天の下に住んでいて、ただ高台で微睡したのであった。　ー　君達がミューズを通じて宗教を、ソクラテスが哲学をもたらそうとしたように、ミューズの天国から地上にもたらし、植えつけたいのであれば、かの手本つまりヘルダーを真似るといい。あるいはクロプシュトックとか、そもそもちょっと昔の詩人達を真似るといい。このようなミューズだけで多くの偉人達の異教徒伝道者となりうるであろう。

（偉いさん達が容易に下々の者を眩惑することができると思うのは偉いさん達のありふれた眩惑の一つである。腋に皿を持った従僕は子供や生徒が先生を察知するように容易に主人のことを察知するものである。世紀の上流の者達は、自分達は自分達の見せかけによる影響ではなく、宗教的過去の喜捨によって生きていること、そして不信仰の時代は信仰の前世を食いものにしていることを考えて欲しいものである。

しかしこれは単に些細な政治的なことである。国家は奔流と幅を必要としている、宗教は源泉と高さを必要としている)。

勿論まだ不信仰よりも信仰の方がはなはだ多く地上を支配している。信仰の方が多くのすべての国々の中でまさに民衆を、つまりはるかに多数の部分を自分に有利なように所有し占有しているからである。しかしその多くをすでに掘り出している世紀は、我々が基礎工事をしなければ、掘り尽くしてしまうことだろう。しかし何によってするか。　ー　宗教に倣って聖職者が沈む。しかし同様に聖職者に倣って宗教も沈む。聖職者の名誉の品性や塗油に対する古来の信仰、現在笑いものにされている信仰はモーゼの輝き[5]に対する信仰に他ならず、このモーゼの輝きを子供は父親に、生徒は教師に、青年や読者は偉大な作家に、観客は俳優に、いや家臣は自分の戴冠の国王に見いだしているのである。これはこうした者すべてが自分達の諸対象の許で、宝石が太陽の許でそうするように、吸い込み、夜に模して輝く光輝である。しかし更に言うべきことがある。人間にとって本来教師がすでに教えである。　ー　人間は信仰する者を信ずる。　ー　別の人間の中に人間は自分の思考や感情の人間化を、特に自分の宗教的思考の人間化を求める。しかしそれ故に説教する個人への敬意は大きな反作用を有するのである。それ故我々にとって歴史の中での至高の犠牲の例は勇気を与え、愛らしいものであるけれども、他方同じことを命ずる厳格な倫理学は、打ちのめすような、ほとんど反感を与える作用をするのである。　ー　特に民衆にとって司祭は人格化された宗教である。壇上の彼にあっては（マルブランシュの言ったように）すべてが、その袖さえもが証明になるのであれば、袖を身に着けたままでいるのがいいのである。というのは教化する袖は、立腹させる[軍人的]弁髪の説教家の弁髪よりもましだからである。それ故我々の先祖は正当にも司祭の正装で品位を表したのである。

ー　それ故ひょっとしたら僧侶は変わらぬ服で歩き回ることによってその名声をより良

く主張しているのかもしれない。　ー　それ故昔の人々は聖職者が生活の卑俗な仕事や楽しみごとに介入することを不適当と思ったのである。こうしたことすべてが真実なのであれば、全く別な手段で石化した都市の市民に働きかけなければならない町の聖職者よりは　ー　田舎の聖職者の方が、衣服や演説や他の生活様式の罪のないガリア教会の自由[6]すらも、いかばかり節制すれば聖職者という素敵な名前と、貧しくなっていく宗教の名声を主張し得ることになるか、単に自分達だけが宗教に、地理学的意味でさえも、比較的大きい国を獲得できるだけに尚更のことだと承知しているのである。どの聖職者の前でも帽子を脱いだ皇帝フェルディナント二世の後ろに、少なくとも自分達の帽子に手をやる高貴な人々が今ややって来ても、これも害にはなるまい。

かつて落雷がルターを神学に導いたように戦争の雷雨は我々を再び宗教に導くだろうと何人もの人々が期待している。しかし戦火が浄福に導く単なる煉獄か、それともより劣等なものに導く地獄なのかまだ定かではない。それだけに教会のためのどんな小さな礎石も余り非難されないで欲しいものである。　ー　（それ故例えば宗教的クラブは　ー　秘密結社という名前で先の時代にはかなり正当なことに禁止されたのであるが　ー　政治的クラブよりもはるかに大目に見ていただきたいものである）。現今では宗教的精神はむしろ単に（秘密集会のように）小さな器の中にのみ保たれている、大きなハイデルベルクの教理問答や樽からは煙となって消えていくからである。共和国同様に宗教的党派は小ささによって密度と有為さを得るのである。植木鉢が狭く、土が少ないほど、発芽と開花は盛んになる。

最初の教会で二枚の板を打ち鳴らしたときは、今のように重さ二七五ツェントナーのエアフルトの鐘を鳴らすときよりも、多くの教会参詣者を集めた。かくて最初の教会から中世を経て、更にこのかた、より小さな宗教団体が常に宗教の密接方陣であって、より強く、より熱かった。一つの例で十分であろう。人々はキリスト教に巨人ゲールヨンのように三つの体を、あるいは三つの宗教党派、あるいは団体を与えてきた。しかしその中のどれがその小さな後輩ほどの力を示しているか、この後輩は宣誓なしに約束を守るし、何の教会の輝きがなくとも熱く燃え上がるもので（これはカトリック的教会の贅沢さへ願いに対する重要な反証となろう、必ずしも多くがこの贅沢さを必要としていなくても）、これは仮借ない法で一杯の王国に対して自らの法を貫徹するものであり、一つの自殺的国の中で一人の自殺者も出さないものであり、洗礼もせず、聖体拝領もしないし、これは描写する詩人に似て、自らの情熱の支配者として冷たい情熱と熱い空想を和合させるものである。この小さな数は何という名か。　ー　クウェーカー教徒である。　ー　ちなみに単に非宗教的な狂乱のみ見られる時代では宗教的狂乱を恐れることはなかろう。　ー

説教者がその古い峡谷から抜け出して新鮮な高みに登りたいと思うならば、説教者を通じてさえ、それにより高い身分の許でも宗教的影響とか、心の硬直の若干の解放は可能であろう。例えばこのような抜け道はリューゲン島での岸辺の説教[7]の慣習である。ここであれば、コーゼガルテンも所、時、状況のロマンチックな選択で幾重にも真似されることだろう。　ー　強力な詩が物質的舞台や装飾で身を飾るのであれば、女性のように、より華奢で、より弱く、より静かな宗教がそうしない法はない。　ー　それに何故説教者はいつも単なる倫理の氷上で耕し、種を蒔くのか。なぜ説教者は説教壇を単に、いずれにせよ壇の下にいる各人の良心が絶えず日中の番人、夜の番人として呼びかけていることの伝令

官としてのみ登っていくのか。なぜ彼らはまず倫理を証明し、基礎付け、支えを支えようとするのか、すべてそれらの証明は単に倫理に基づいているというのに。しかし君達は君達の説教道を偉大な人間、倫理的人間の英雄の広間、回廊を通る道とするならば、すべての階段の役に立ち、より深く介入することができるであろう。イエスとかの温かく語られた生涯は、すべての奇蹟を取り除いてさえ、またエパミノンダスとかトーマス・モアとかルターとかの生涯は、生きた例の力を得て、人心を捉え、向上させることだろう。それからおもむろに、選択した場所と眺望を有するこのような歴史的庭園に好んで銘文と教義に満ちた君達の黒板を置くといい。というのは例えば無常への同じ思い出も、ある頁で読まれる場合と、死者が自ら語りかける墓碑銘で読まれる場合とでは全く別様に心に響くからである。しかしこのような伝記的説教の説教道では歴史的定義を排除して、そして罪人よりは聖人を優先して欲しいものである。というのも良き手本は、見ていたかのように話されると、悪しき手本よりもより純粋に作用するからである。そうすると説教者は壇上に、これまでの短い使徒の史実よりも何と多くの広い史実をもたらすことだろう、そして現今のように聖書の節の教えに史実をからませる代わりに、何とはるかに良く、史実から多くの教えを取り出せることだろう。

最後に我々は宗教の我らの聖母[ノートル・ダム]としての女性の許に戻ることにする。女性が以前から国内の真に静かな者として宗教を維持し、庇護してきたのであれば　ー　まさに宗教は、男性の仕事の喧噪と戦闘の騒動を乙女のように避けるもので、あるいは騒動を単に極の星として遠く天上で支配するので、常に女性的オリーブの園に逃れて、近くの花として薫るのであれば、そして宗教は真珠がそうであるように、広大な波打つ大海の中ではなく、単に岸辺でのみ得られるのであれば　ー　教会史では女性の殉教者は男性の殉教者同様に、そしてそれ以上に耐えてきたのであれば　ー　女性はどこでも最も長く宗教を信じてきて[*6]、そして北方ではいつもまず侯爵夫人がキリストに帰依して、それから侯爵が後に続く民衆や庶民と共に帰依した　ー　つまり世俗の尼僧として宗教の婦人采邑を主張できるのであれば、それならば　ー　男性以上に誰がこの女性と時代のために尽力できよう、男性はこの女性の宗教感覚を考慮しつつ、この感覚を利用し、教育のために養成する。宗教的母親が我々に宗教的子供を贈ってくれるようにするためである。いかに多くの激しい精神にその母親はその野蛮な狩人人生全体に対する宗教の子供らしい木霊を付与してきたことか。案内する羅針儀は百合の姿をしている。この百合の姿を母親は最も容易に宗教に与える。それ故説教家が沈黙している今はクウェーカー教徒の教会のように女達に説教させるがいい。

勿論時代は宗教にとって不具合であり、透明に冷たい。宗教の天国へはヨーロッパは多分まず現今よりももっと激しい煉獄を経て追いやられ、純化されることだろう。ただ炎と灰から不死鳥は蘇るのである。　ー　しかし人類にあっては　ー　人類自身が滅ぶときを除いては　ー　人類の性格として全歴史の心臓の鼓動、呼吸であったものは何も滅びはしない。しばしば地上から天が見えなくなるときがある。しかしいつもその先展望は開けるのである。暗く食となった太陽は暗くなった地球と暗くしている月とを率いて導いているのである。

*1　ブッシュ『発明の便覧』
*2　スウェーデンでは多くの村の住民が六マイル離れた教会へ出かけ、土曜日に出発し、月曜日に戻ってくる。アルントの『旅行記』。
*3　ローエンシュタイン『アルミニウス（ヘルマン）』第一巻、第一部。ヴィンケルマンも参照。
*4　ヘス『貫流』第七巻。
*5　立像はそれ以来そのためにブロンズメッキ[4]された。モーリッツ『イタリア紀行』第一巻。
*6　ナポリでは一人の男性に対して二〇人の女性の割合で告解と聖餐式に行く。S.コッツェブーの『紀行[8]』

9

結論の多韻律詩

時折日中に明けの明星と宵の明星とが空に見えるときがあった、太陽の傍らに　ー　太陽が食となったときである。素敵な比喩だ。我々にとって人生が余りの痛みで食となったとき、まことに明瞭に青春と死とが現れる。明けの明星と宵の明星である。

＊

暴君よ、汝は大地を照らしてきた太陽が涙の海と血の海に沈んでいくのを目にする。しかし汝の期待は間違っている。空の太陽も夕焼けと大洋の中に沈んでいく。しかし太陽は朝消えずにまた昇り、新たな一日をもたらす。

＊

祖国の炎が消えて、ウェスタの女祭司が十分に目覚めていなかったら、ローマ人がそうしたように、炎を太陽から、つまり天上のミューズの神から取って来るといい。

＊

将来のドイツよ、汝は汝を創った現今のドイツをテレマコスが哀れな服の父オデュッセウスを見間違えたように、輝きのない姿だからと見間違うつもりなのか。　ー　戦争の女神であるばかりでなく学問の女神でもあるパラスがまたそれを防いでくれよう。この女神はかつて金の棒で触れて、テレマコス[9]にオデュッセウスを明らかにしたのであった。オデュッセウスの服は輝いて息子はその父親が分かった。

＊

ドイツは長いこと一つの森であった。しかし近隣の森に雷雲や雨は移っていく。

＊

イタリアのサン・マリノよりも小さな自由の岩、自由の国はないと君は思うのか。　ー　一つの胸の中に空間を有する自由な国家がある　ー　それとも君は心を有しないのか。

＊

最初は墓の中で形姿は崩落する、それから墓碑の上の肖像すら消えていく　ー　何が残るか、この両者を創ったもの、魂である。

＊

自由よ、汝はどこで汝の神々しい言葉を最も声高に語るか。国家の安寧のとき、晩年ではない、単に国家のまだ貧弱な五月の青春のときである。かくて鳥はその最も素晴らしい歌を春の葉のまばらな枝の上で歌う。しかし秋の果実の下では、黙って陰気に小枝に座っていて、春に憧れている。

＊

良きドイツ人よ、しばしば汝を倫理家や地理学者はヨーロッパの心臓と呼んだ。汝は実際そうだ。汝の手よりも疲れを知らずに鼓動しながら、汝は温かく脈打ち続けている、眠っているときや病のときでさえも。

＊

雷がドイツの樫を引き裂く。しかしその花粉を壊すわけではない。ドドナの樫[10]は根こぎにされてもなおアルゴー船のマストとして話し続けた。

＊

ティトンは薄明かりを愛した、しかしそれは曙光であった。彼女、アウローラは彼のために不死を祈った。そして彼はその　ー　声の不死を得た。

＊

アウローラ、汝、薄明かりの薔薇の女神よ、この本のために昔の画家が汝の手に与えたもの二つを、つまり右手に薔薇を、左手に松明を汝の手から与えて欲しい。　ー　ただ薔薇は刺すことのないように、松明は焦げ付くことのないようにして欲しい。穏やかな香りと穏やかな明かりで十分である。

訳注

ドイツへの平和の説法

(1)偉大な英雄達、　ジャン・パウルは多分フリードリヒ大王のことを考えている。

(2)そこの戦場では、　フィレンツェとミラノの間での有名なアンギアーリの戦では、自分の馬の蹄の下に落ちた一人の騎士が倒れてだけであった。

(3)ミネルヴァの棒、　『オデュッセイア』十六章、一七二行以下参照。

(4)最後のドイツ人、　一八〇六年十月九日の国王フリードリヒ・ヴィルヘルム三世の戦争宣言の当てこすり。「余は、最後のドイツ人を余の旗の下に集めることを誇りに思う」という文があった。

(5)預言者の逃亡、　ヘジラ、マホメットのメディナへの移住、イスラム教暦の紀元、西暦六二二年。

(6)最後の数行、　エリザベス朝劇ではある場の最後の数行の韻が合うだけで、個々の人物の退去の際ではない。

(7)Ewald Fr. v. Herzberg（1725-95）、　『ローマ人に対するゲルマン人の優秀さの理由を説明する論文』。

(8)テルス、ローマ人の大地の女神。

(9)四人の偉大な詩人、　ゲーテ、ヘルダー、ヴィーラント、シラー。

(10)イエナ、　そこではフィヒテ、シェリング、シュレーゲル兄弟が活躍した。

(11)侯爵、　フリードリヒ・ヴィルヘルム三世。

(12)アリストテレスの二つの主張、　『政治学』第七章、７それに１５参照。

(13)十月十四日、　イエナとアウエルシュテットの戦の日。

(14)Ludwig v. Baczko（1756-1823）、　歴史家。盲人でケーニヒスベルクの盲人施設の長。

(15)August Ludwig v.Schlözer(1735-1809)、　政治記者、歴史家、長年『国家新報』を編集した。

(16)贅沢な町カプア、　カプアの冬の陣営でハンニバル軍はひ弱になって、ローマに勝つことが不可能になった。

(17)ラムフォードのスープ、　ラムフォード伯爵(1753-1814)によって発明された徳用スープ。

(18)シンシナティー協会、　一七八三年アメリカ合衆国で設立された将校の協会。

(19)多くの講和、　ジャン・パウルは革命とナポレオンのフランスとの個々のドイツ国家別の条約を考えている。例えば一八〇六年フランスとザクセンの間のポーゼンの条約である。

(20)ラ・トラップ修道院、　厳粛な戒律の下、沈黙を守ることで知られている。

(21)Georg Forster 、　『ニーダーラインの光景』（一七九一年）第一巻、第五章から採られている。

(22)カントの『物理的地理学』（一八〇三年）参照。地震とはアウステルリッツの戦（一八〇五年十二月二日）とイエナとアウエルシュテットの戦（一八〇六年十月十四日）を指している。

(23)フリードリヒ二世の刀、　ナポレオンはイエナの戦の後、国王の刀をポツダムから奪って、パリへ送った。

(24)後継者達、　多分フリードリヒ大王の後のプロイセンの国王達。
(25)彫像の役、　当時最も知られていたのは、『ドン・ファン』の騎士修道会管区長とルソーの『ピグマリオン』の像であった。
(26)August Ernst Steigentesch 男爵(1774-1826)の論文、　喜劇作家。『ミネルヴァ』の論文はフランスを手本に民衆の武装に賛同したもの。
(27)三度の最新の戦闘、　多分フランス戦役（一七九三年以降)、オーストリア戦争（一八〇五年)、プロイセン戦争（一八〇六年から一八〇七年）のこと。
(28)外国人、 ナポレオンは一八〇六年ちょうど結ばれたライン同盟の保護者と自称した。
(29)ベトザタの池、　『ヨハネ伝』第五章第四節によると、この池は「御便のをり降りて水を動かすことあれば、その動きたるのち真先に池にいる者は、如何なる病にでも癒ゆる故なり」と記されている。
(30)叙事詩のアダム、画家ミュラーの牧歌『アダムの最初の目覚めと最初の浄福の夜』(一七七八年）とゲスナーの『アベルの死』(一七五八年）の第二の歌。
(31)Wolfgang v. Kempele(1734-1804)、技師。有名なチェス自動人形の他に話す機械仕掛けも作ったが、成功を収めなかった。
(32)モンテーニュ、　『エセー』、岩波文庫　第一巻第二十一章、想像力について。
(33) セム、「創世記」第九章二十二節以下。

ドイツの為の薄明
Ⅰ　歴史と人生の中の神について
(1)歴史と人生の中の神について、　この論考はヘルダーの『人類の歴史哲学考』の第十五の書の考えと密接な関係がある。
(2)ゲーテ、　ゲーテとは関連が薄い。誤解かもしれない。
(3)最も高貴な大臣、シュリー公爵(1560-1641)のこと、フランスのアンリ四世の側近。
(4)侯爵同盟、　共通の仲裁委員会を有する十五のヨーロッパ諸国の同盟というアンリ四世の案をほのめかしている。
(5)ある高貴な国王の心臓、　フェヌロンの教え子の若きブルゴーニュ公ルイは一七一二年二月十八日若くして思いがけず亡くなった。
(6)レオポルト侯、　ブラウンシュヴァイクのレオポルト侯、ヴァイマルのアンナ・アマリアの弟。彼は何人かの溺れた者を救出しようとして、一七八五年四月二十七日フランクフルト・アン・デア・オーダーで三十三歳の若さで溺死した。
(7)John　Howard(1726-90)、　博愛主義者で、生涯を牢獄や病院の衛生改善に捧げた。近東への旅行でペストの少女の訪問により感染し、亡くなった。
(8)アレクサンドリアの図書館、　アレクサンドリアの有名な図書館は紀元前四七年にカエサルによって焼かれた。
(9)注、　勿論マグナ・カルタの有効性はそれ以前に存在していた。
(10)二回、　ネルソンはアブキールとトラファルガーで、ナポレオンはアウステルリッツとイエナで勝った。
(11)ヘルダー、　『歴史哲学考』第十五章の５からの自由な引用。

(12)アルキメデスの支点、　梃子の原理を最初に唱えて、「私に支点を与えてくれれば、地球を覆してみせる」と言った。
(13)機械仕掛け爆弾、　一八〇〇年十二月四日のナポレオンに対する失敗に終わった暗殺計画。
(14)ガルヴァーニ電堆、　ガルヴァーニの説を発展させて、一八〇〇年イタリア人物理学者のヴォルタが発明した電池のこと。
(15)我々の視線を最も遮ってしまうものは、　『歴史哲学考』第十五章の４参照。
(16)偉大な著者、　匿名で発表されたヤコービの論文を念頭に置いている。「ある珍しい文書についてムゼーウムの一月号に記された考察に抗する思い出」(『ドイツのムゼーウム』一七八三年二月)。
(17)第三の革命、　多分すでに言及された「カント的倫理的」革命。
(18)括弧（）は校正のとき削除された箇所である。ジャン・パウルの付けた括弧ではないと思われる。
(19)二回同じ月、同じ日に、　ナポレオンは六月十四日にマレンゴ（一八〇〇年）とフリートラント（一八〇七年）で勝ち、十二月二日は皇帝への戴冠（一八〇四年）とアウステルリッツの戦（一八〇五年）であった。
(20)ナ・ポレオンはポーランド語で「更に勝て」という意味ではない。
(21)Karl Ludwig v. Woltmann(1770-1817)、歴史家。浩瀚な『宗教改革の歴史』(一八〇〇年三巻）をまとめた。

Ⅱ　ゲルマン魂とフランス（ガリア）魂
(1)Johann Christoph Adelung(1732-1806)、　啓蒙期の文法学者、辞書編集者。
(2)フォス、　フォスの『神話学的書簡』第一の書（一七九四年)。
(3)メンデルスゾーン、　『感情についての書簡』(一七五五年）第十の書簡、注９参照。
(4)クセノフォン、　正しくはトゥキディデス『ペロポネソス戦争』第一巻一一八。
(5)タキトゥス、　『ゲルマニア』三〇参照。
(6)一般辞典、　Zedler による『すべての学問と芸術の完全な一般大辞典』(六四巻、補遺四巻、一七三二一五四年)。引用は間違いで、「第七巻二八頁」。
(7)James Burnett Monboddo(1714-1799)、スコットランドの言語哲学者。
(8)速度、「戦争のために必要なのは第一にお金、第二にお金、第三にまたお金」というモンテクコリ伯爵の言葉を思い出させる。
(9)E.Brandes 、『先の世紀の最後の数十年におけるドイツの時代精神についての考察』(一八〇八年）二〇六頁以下参照。
(10)Jean Baptiste Robinet(1735-1820)、フランス啓蒙主義の哲学者。
(11)Fr.　Schulz『あるリーフラント人のリガからワルシャワ等への旅行』第四冊（一七九五年）四〇頁参照。
(12)Schwarzberg-Sonderhausen 侯爵のこと。『ドイツ人の国民新聞』(一八〇八年十一月十七日）四六号。九五五頁以下参照。
(13)モニトール紙、　革命と皇帝時代のフランスの官製新聞。
(14)三つの悟性の活動、　アリストテレス的ヴォルフ的論理によれば、表象、判断、結論

が考えられる。
(15)モンテスキュー、　『法の精神』第二十章、２。
(16)Simon Nicolas Henri Linguet(1736-94)、　自由思想のフランス人政治記者。一七八〇一八二年バスティーユに投獄され、後にそのことについて詳細な『回想録』を書き、一七九四年ギロチンにかけられた。
(17)ケスティウスのピラミッド、　ローマのケスティウスのピラミッドのプロテスタント人墓地には多くのドイツ人が埋葬されていた。

Ⅲ　戦争に対する宣戦布告
(1)カント、　彼は一七九五年『永遠の平和のために』という論文を公刊した。
(2)マルタ島騎士団、　騎士団は一七九八年ロシアと英国との戦争の結果、力を失った。
(3)民族は、　この論考はカントに基づいている。カントも戦争と平和については民族[民衆]が決定すべきであると考えている。
(4)ジュピターの鎖、　ジュピターは神々を黄金の鎖にぶら下げさせて、金縛りにさせたと言われる。『イーリアス』第八書十七行以下参照。
(5)ザイームやティマリオ、　トルコ人に仕えたギリシア人の家臣。
(6)アルキビアデス、　彼は紀元前四一五年スパルタ人の許へ行き、四一二年ペルシア人の許へ移った。
(7)新たな徴募兵達、　一八〇六年以降ナポレオンは数回徴募してドイツからも新兵を選んだ。
(8)百合の葉、　正しくは菩提樹の葉。
(9)ウリヤの手紙、　バトシェバの夫ウリヤはダビデの命令で手紙を持たされたが、それは手紙の持参人ウリヤを激戦の地に送るようにとの内容であった。ウリヤは戦いで亡くなった。「サムエル記下」第十一章。
(10)認識の木、　ジャン・パウルの好む比喩で、モンテスキューの『法の精神』第五章 13 から採られている。
(11)『象形文字』の立派な著者、　Rühle v. Lilienstern.　一八〇八年の『象形文字あるいは学問の領域から日中の歴史への視線』の中で、日本や中国の平和は倫理的知的人間の活動にふさわしくない停滞した状態と結び付いていると論じている。
(12)ソクラテス、　彼はスパルタとの戦争で名を挙げ、後には紀元前四〇四年から四〇三年にアテネを支配した三十人の暴君のために不当な判決を受けた者を処刑場に連れて行くのを拒んだ。プラトンの『弁明』十七章と二十章参照。
(13)Joh. Es. Silberschlag(1716-91)、　ベルリンの宗教局評定官長、自然科学に精を出したが余り成果は得られなかった。
(14)ベーレントによると最初三回の七〇〇は七〇〇〇であり、四回目の七〇〇は七であるそうである。
(15)エペソの神殿の放火犯、　Herostrat.
(16)Heinse、　『アナスタジアあるいはチェス』(一八〇三年) 第一巻、Ｖ頁。
(17)Piere Simon de la Place(一七四九―一八二七)、重要なフランスの数学者、天文学者。
(18)モンテスキュー、　『法の精神』第七章、17。

(19)ニコライ、　彼の『ドイツ等を通っての旅行記』（一七八七年）第八巻、四二頁以下参照。
(20)ムティナ、　ここで紀元前四四年から四三年の内戦で、デキムス・ブルートゥスはマルクス・アントニウスに包囲された。ここの記述はマイナースの『ローマ人の風習と憲法の衰退の歴史』（一七八二年）に依拠している。
(21)Sully 公爵（1560-1641）、フランスのアンリ四世の側近。
(22)ダビデ、　「サムエル記下」第七章十二節以下参照。
(23)イタリア人、　ウェルギリウス『アエネイス』Ⅰ、一〇九参照。
(24)通り抜けの権利、　通過する車から一定の税を要求する権利。

Ⅳ　政治的葬儀の提案
(1)二人の君主、　イエナで敗北したプロイセンとザクセン。
(2)王殺害の式典、　一七九二年ルイ十六世が処刑された一月二十一日には、フランス革命の間、式典が行われた。
(3)モンテスキュー、『法の精神』第十一章、6。
(4)ブルートゥス、　紀元前三三〇年頃初めてブリタニアへ船で行った Massilia の Pytheas と混同している。
(5)ベーレントによれば引用はクルティウスによるアリストテレスの『詩学』の翻訳（一七五三年）から採られている。その一一三頁参照。
(6)世紀の祭典、　ローマでは百年ごとに町の創建を祝って行われた。
(7)ローマ、　アウグストゥスは、自分は木造の町を大理石の町にしたと言ったとされる。
(8)コーヒーの代用品、　ジャン・パウルの愛飲したコーヒーはナポレオンによるイギリスに対する大陸封鎖（一八〇六年）で乏しくなっていた。

Ⅴ　天才達の上級試験委員会の提案
(1)フィヒテの提案、　『ドイツ国民に告ぐ』の中で述べている。この案に対してジャン・パウルは夙に書評（一八〇八年）で反論していた。
(2)E. Brandes 、Ⅱの「ゲルマン魂とフランス魂」の注(9)参照。
(3)Velleius Paterculus、　その『ローマの歴史』Ⅰの 16。
(4)William Pitt the Younger （1759-1806）、　イギリスの政治家。革命期のフランスに対するヨーロッパ連合の指導者。
(5)ヴェストファーレンの裁判、　ヴェストファーレンでは長いこと秘密裁判が行われていた。ヨハネス・フォン・ミュラーはナポレオン治下のフランス政府に委託されて（一八〇八年十一月）、ヴェストファーレンでフランスを手本に陪審裁判を行うことになった。

Ⅵ　侯爵のためにほとんど無償で知らせる新たな使節団員の提案
(1)Johann Wilhelm von Archenholz（1741-1812）、プロイセンの将校、作家。
(2)Paul Ferd. Fr. Buchholz（1768-1843）、歴史家、政治記者。
(3)Adam Heinr. v. Bülow(1757-1807)、解放戦争の際の有名なプロイセンの将軍の弟。政治作家。『一八〇五年の戦役史』（一八〇六年）を書いて獄につながれることになった。

(4)ヴァリスによる、引用はベーレントによると Le Maire の『アフリカ紀行』(一六九五)からで、この抜粋が『人類の図書』に掲載された。この作品に先行する章が Wallis 船長の旅行（一七六六年）を取り上げている。
(5)Joh. Georg Büsch(1728-1800)、国民経済学者、商業作家。
(6)Joh. Jak. Moser(1701-85)、ヴュルテンベルクの国法学者、愛国者。
(7)聖パウロ、「使徒言行録」第二十八章三節以下。

Ⅶ　未来の福音と哀歌
(1)別な箇所で、　ハンザー版八六八頁二九行以下、『ヘスペルス』の第六の閏日参照。
(2)ロシアのエリザベータ、　女帝エリザベータは一七六二年一月五日に亡くなった。その死のためフリードリヒ二世は七年戦争を救われた。
(3)一八〇八年の十月の祭日、　十月十四日で、イエナの戦いの二年目。
(4)Chr. Aug. Fischer の『アムステルダムからマドリッド、カディスを経てジェノヴァへの旅行』(一七九九年)。
(5)流行服、　カッセルでは道路清掃者に最新の流行服を着せて、流行を笑った。
(6)人間を競りに、　一七七五年から七七年にアメリカ戦争のために一万二千人の兵士をイギリスに売ったヘッセン・カッセルのフリードリヒ二世の兵士売却を当てこすっている。
(7)François Le Tellier, de Louvois 侯爵、　ルイ十四世の陸軍大臣。後期の国王に無茶な政策を進言し、ドイツではプファルツの破壊故に憎まれた。
(8)Aug. Ludw. v. Schlözer(1735-1809)、『書簡集』(１０巻一七七六一八二)、一八〇七年には第二版が出た。
(9)モンテスキュー、　『ローマの隆盛と衰退』第六章。ジャン・パウルは皮肉に引用している。
(10)聖ヤヌアリウスの固い血、　ナポリの守護聖人聖ヤヌアリウス（または聖ジェンナーロ）はその記念日に傷口から血を流すとされる。
(11)美食家の年鑑、　これは天文学の年鑑で一八〇三年から一二年に出版された。
(12)コリントの合金、　金、銀、銅からの合金で、コリントの町が破壊されたとき、たまたま融合してできたとされる。
(13)パスクイーノ、　伝説的なローマの仕立屋で、彼は自分の諷刺を後に彼にちなんで名付けられるようになった古代の彫像に張り付けるのを常とした。
(14)ベーレントによれば Karl Ferd. Hommel(1722-81)の『市井日常質問集ラプソディー』（一七六五年）の「観察」１０であるそうであるが、言及されてある「観察」２１０は別の箇所を指示している。

Ⅷ　金不足と非常予備金
(1)ラザロの傷口、　「ルカ伝」第十六章二十一節。
(2)エジプト人、　「創世記」第四十七章二十五節
(3)シラーによると、　シラーの『三十年戦争史』第二の書参照。
(4)「恐怖の兄弟」、　この者はフリーメーソン支部で新会員をびっくりさせて試さなけ

ればならなかった。
(5)『日輪』、　クライストの『日輪』ではなく、リーリエンシュテルンの雑誌『パラス』に発表されたブーフホルツの英国についての論文と思われる。第一巻（一八〇八年）七二頁。「議会の雄弁さは国家の借財が増大するにつれ減少すると予見された」。
(6)ギリシア人の教会博士 Johannes（三四七ー四〇七）は雄弁な説教でクリゾストゥムス［黄金の口］という渾名を得ていた。
(7)『バイロイト新聞』の号外（一八〇八年五月十二日十九号）でジャン・パウルは読んだ。「ウィーンの時計工 Jakob　Degen は紙を張り合わせた翼で、二四〇ポンドの荷を動かせて、屋内馬場で五四フィートの高さを思いのままに飛んだ」。
(8)検閲の自由、　題は内容と余り合わない。
(9)タンプル、　パリのタンプル教団の修道院の建物は一七八九年以来国の牢獄となった。ルイ十六世もここに捕らえられた。
(10)リヴィウスの引用は合わない。
(11)イスラエル人達、　「出エジプト記」第十二章三十五節以下。

Ⅸ　宗教の現今の冬至［夏至］について。
(1)モンテスキュー、　『法の精神』第三章、６。
(2)ルターの荘重さの著者、　Zacharias Werner（1768-1823）、ロマン派の運命劇の作家。『ルターあるいは力の荘重さ』（一八〇七年）。
(3)ニオベの著者、　Wilh.v.Schütz(1776-1847)、ロマン派の作家、『ニオベ』（一八〇七年）。
(4)ブロンズ・メッキ、 Guglielmo della Porta の正義の像は後年ブロンズ・メッキされたのではなく、部分的にブロンズで覆われたのであった。引用は Karl Philipp Moritz の『あるドイツ人のイタリア紀行』第一巻（一七九二年）一九三頁から採られている。
(5)モーゼの輝き、　モーゼがシナイから戻ってきたとき、彼の顔は輝いていて誰も彼の顔を直視できず、モーゼは話すとき顔を覆わなければならなかった。「出エジプト記」第三十四章二十九ー三十五節。
(6)ガリア教会の自由、　一四三八年に規定されたものでガリア（フランス）の王室と僧侶にローマ教会からの自立性を認めたもの。
(7)岸辺の説教、　ベーレントによるとこのような説教がリューゲン島の Vitte でコーゼガルテンによってなされたそうである。
(8)Kotzebue の『リーフラントからローマ、ナポリへの旅行の思い出』第二巻（一八〇五年）一七五頁参照。
(9)テレマコス、　『オデュッセウス』十六章、一七二以下参照。
(10)ドドナの樫、　アルゴー船に女神アテネはドドナの神託を語る樫から予言する板を作った。

解題

恒吉法海

『ドイツへの平和の説法』（一八〇八年）、『ドイツの為の薄明』（一八〇九年）、いずれも一八一二年のナポレオンのロシア遠征によりナポレオンの野望が明らかになり、ナポレオンを明瞭に拒否せざるを得なくなるまで、ナポレオンに対して危惧の念を抱きながらも期待、希望を抱いていた時期に書かれた論考である。フィヒテの『ドイツ国民に告ぐ』と同じ時期に書かれているが、フィヒテの書がドイツ人の愛国心に訴え、ゲルマン人の言語の根源性を主張し、直接名指しはしていないが、フランス語を死んだラテン語の再使用として、創造性に欠けると断じて、いかにも俗受けしそうな論の展開をしているのに対して、ジャン・パウルの論調は断片的であり、時に難解で、イロニーと比喩に満ちて、扇動的な要素がなく、今となれば、その語り口の余裕に追い込まれたドイツ人の余裕、希望が感じられる書となっている。例えばフランス語の支配下で、ドイツ語が滅びるのではないかという不安に対してジャン・パウルはこう答えている。「言葉に関しては、おそらく我々は、フランス人がそのより貧しい言葉を忘れるよりも、そのより豊かな言葉を忘れることは少ないと思われる。それは単に、いつもドイツではフランス人の百姓よりもドイツ人の百姓が多いであろうからばかりでなく　ー　プロイセンの戦争捕虜でさえフランスから多くのドイツ語を持ち帰るであろうからで　ー　また単に、我々の多面的な力のある文芸は仕舞いにはフランスの文芸に浸透していく、この炎の民族がナポレオンや平和、ドイツの許で更に力を強めるにつれ、一層浸透していくからでなく　ー　また単に、文学的強さは模倣し、真似することはないが、ただ弱さのみが模倣するからでなく　ー　また単に、かつてドイツ語の演説に課されていた罰は、それでも我々にドイツ語を妨げはしなかったからではなく、そうではなく、フリードリヒ唯一王が立派なフランス語の詩を残したのは、その父親がただフランス語の散文を話すことさえも不快であると彼に禁じた後であったからという理由による。我々にドイツ語を話すのを難しくしたり、禁じたりするがいい。そうすると我々はドイツ語を腹蔵なく、この渇きと胆汁の源［腹］から離れて、話すことになろう」。（ハンザー版、Bd.5.S.1012f.以下引用の際はページのみ記載）

１．薄明について

ジャン・パウルは『ドイツの為の薄明』の序言で薄明についてこう述べている。「薄明はいろいろなことを意味し得るからで　ー　夕方の薄明、朝方の薄明　ー　極地での太陽の見られない真昼の薄明、それに白夜の真夜中の薄明　ー　最後の北方の神話学では神々の黄昏、即ち神々の死　ー　あるいは同時にその逆のことである」（S.919）。また最後の「多韻律詩」ではこう述べている。「時折日中に明けの明星と宵の明星とが空に見えるときがあった、太陽の傍らに　ー　太陽が食となったときである。素敵な比喩だ。我々にとって人生が余りの痛みで食となったとき、まことに明瞭に青春と死とが現れる。明けの明星と宵の明星である」（S.1033）。比喩過多であるが、再三言及される薄明かりへの思いは次の文に凝縮されているように思われる。「ライプニッツは言った。未来は現在によって孕まされる、と。ジュピターは霧の姿でイオを孕ませた。しかしこの現在と、従って霧の状態はまだ続いているので、予想はどういうことになろうか。しかしながら百姓は皆、霧のときに種を蒔くように勧めている」。（S.1013）（別の箇所でジャン・パウルは霧（Nebel）

は逆に読むと人生になると言っている。Vgl. Bd.4. S.998）

これらについてはヘルベルト・カイザーの立派の考察があるので、すでに一度紹介したことがあるが、再度引用してしておきたい。「諧謔や愛、魂同様に薄明かりも二つの間の相にあるもので、日の出と日没の転換点の極を表しており、この極は別の例えではヘスペルスの金星が示している。薄明かりはまずは（一八一〇年ごろの）ドイツの不安定な未来の政治的歴史的状況を意味しているが、一般的にはまた生誕と死の間の実存的状況も、さらにはまた勿論啓蒙の明かりとロマン派の夜の讃仰の間での自らの位置という精神的美学的状況も意味している。薄明かりの例えと構造の中で、理想主義的主体の哲学に対するそしてまた完結した自己意識というこの哲学の要求に対する懐疑が見られ、同時にまたすべての融合と個別化の救済というロマン派的憧れへの拒否も見られる」(Herbert Kaiser: Jean Paul lesen. Königshausen und Neumann. 1995. S.212)。これはジャン・パウルの立場を肯定的に評価するものである。

しかしヘルムート・プレスナーの『ドイツロマン主義とナチズム』（講談社学術文庫、松本道介訳）によると政教分離のフランスでは啓蒙主義とカトリシズムが対応し、ドイツではプロテスタンティズムとロマン派が連動しており、これらがドイツ固有の問題を引き起こしているそうである。比喩的に語れば、フランスでは啓蒙の明かりとカトリックの夜とが対応しているのに対し、ドイツでは全体的にいかがわしい薄明かりの状態にあると言えよう。この見解に従えば、後にナチズムを招いた原因は、明かりと夜の組み合わせの欠如にあるといえる。「というのも、ドイツ以外の国では古い信仰に発して新しい信仰態度が、あるいは真の啓蒙精神や無信仰が発展していったからである。それに対しドイツにおいてプロテスタンティズムは、世俗化という一般傾向のなかで堅固な宗派信仰を失ったものの、世界観的な表現を求める独自の敬虔な態度が生きながらえた。その姿勢は仕事と遊びに、研究と芸術に、社会、経済、国家の全活動に浸透している」（上述書 116 頁）。このプレスナーの立場に立てば、ジャン・パウルもドイツの全体の歴史の中では無罪といえないだろうが、しかし党派心はなく、ドイツの全体的薄明かりの中にありながら、その中ではフランス的啓蒙の明かりと宗教の夜を備えている方に属するであろう。『平和の説法』では次のようにも述べている。「侯爵は利点を考えると選択肢として全面的（不可能であるけれども）サルタンと僧侶の闇か、フリードリヒ二世の明るい自由かを有するのみである。単なる惨めな格子状の中間の明かりはバツコ[Baczko]の身体上の盲人についての見解を思い出させる、つまり（彼によれば）その盲人のうち若干微光の見える者は全くの盲人よりももっとおぼつかなく歩き、学習することが少なく、独り立ちすることが少ないそうである」（S.892）。

ジャン・パウルは両論考の段階ではナポレオンとライン同盟に一定の理解を示している。例えば「かつて[ナポリ]総督が海に指輪を投げ入れたように、固い陸上にその指輪を投げ入れた周知の男[ナポレオン]は、諸民族を英国人のあえぐ引き船人夫としたくないと思っている点で勿論正しい」（S.907）。しかし合従連衡そのものに対しては、例えば後年の小ドイツ主義か大ドイツ主義かはっきりしない。ただどちらかというとオーストリアよりプロイセン贔屓のようである（Vgl.S.1011）。確かなのは一面的党派心の欠如である。「面と向かって互いに論破しようと願っている二人の政治家に対して、私はここで論破のために必要な比喩を　ー　つまり一方が大きい国家を小さな諸国家に分割することを華麗に勧

めたいとしていて、もう一方が小さな諸国家を一つの大きな国家に融合することを勧めたいとしているとき　ー　各人に公平に二つの比喩を、より上品な比喩とより低俗な比喩とを申し出るばかりでなく引き渡すことができよう。即ち、最初の政治家あるいはその命題に対してはこう表現できて、まず高貴に言うならば、気泡を有する大きな鏡は小さな綺麗な鏡に砕くことが同様に有利であるというわけで、次にもっと俗に言うならば、池の排水では大きな魚は捕まえられるが、小さな魚だけは水の中にまた解き放たれるということになろう。　ー　別の対立する政治家、命題に対しては、より上品な比喩で言えば、同様にチルンハウゼンは火鏡によって小さな諸ダイヤモンドを一つの大きなダイヤモンドに接合したとなり、もっと俗には例えばこう言えよう。同様に蚊は蜘蛛の巣に引っかかるけれども、しかし蜂や雀蜂は引っかからない、と」。(S.904)

２．啓蒙の明かりと夜

『ドイツへの平和の説法』の序言で、ジャン・パウルはこう述べている。「この小本が不平よりももっと希望を、政治的見解よりももっと倫理的見解を含んでいるとすれば、この両者によってまさに平和の説法という二重のタイトルの約束を果たすことになる」。フランス革命の成り行きを傍観したドイツ人として、ジャン・パウルは初めから政教分離の意図を有していない。ジャン・パウルの肯定的に評価している人物を挙げれば、カエサル、フリードリヒ、ナポレオン（S.884)、ヴァイマルの四人の偉大な詩人、イエナの何人かの哲学者（S.887)、スパルタやタキトゥスのドイツ（S.891)、アレクサンダー、カール大帝(S.914)、アンリ四世とシュリー、フェヌロン、(S.921f.)、ルター、イエス（S.924)、ソクラテスとプラトン（S.932)、今一度ヘルダー(S.1029)、クエーカー教徒、エパミノンダス、トーマス・モア(S.1031f.)であり、政教分離を行っておらず、まさにその点では薄明かりの状態にあるといえる。(作家と政治家及び宗教家の関係は後で触れる)。キリストの言及があるのは、『薄明』の「歴史と人生の神について」の章であり、民族の精神は「真っ直ぐに行ったりジグザグに行ったりして」(S.926)摂理がないように見えるけれども、「絶望は唯一真正の無神論である」(S.936)として結局は摂理に対して希望を抱く論調となっている。これは『ヘスペルス』の中の「人類の砂漠と約束の地」(第六の閏日）の章での考察と基本的には同じ歴史哲学となっている。イエスについてはこう述べられている。「ただ心の圧倒的な一人の精神のみはここでは例外で、宇宙同様、孤独に神の隣にいる」(S.932)。「それは我々がイエス・キリストと呼ぶ静かな精神である。この精神がいたのであれば、これが一つの摂理であり、あるいは摂理に近かろう」(S.932)。このように政教分離は果たされていないが、しかし「平和への説法」の序言では「政治的見解」と「倫理的見解」という区別を行っており、全体は分離を前提とした上での「説法」といえよう。『薄明』の最後の章は「宗教の現今の冬至について」であり、「宗教が敗北したドイツを救い出すべき時代」(S.1027)と認識されている。

以上のようにジャン・パウルは「政教分離」では「薄明かり」の状態にあり、明瞭な啓蒙の明るさと夜を有しないが、その中での「明かり」と「夜」を指摘するならば、「本」と「執筆者」に対する信頼が啓蒙の明かりに当たり、保留付きであるが、時に述べられる戦争の評価が夜に当たるであろう。

ジャン・パウルは本を高く評価している。「誰が、まさに学問の半世紀もの明らかな墓

場の近くにあって、そこに二つの不滅の薬剤を、つまり我々の紙と本の印刷という発明を求めたであろうか」。(S.929)

「人類の何という倫理的野蛮さや盗伐を遂に学問的明かりは追い払ったことか、宗教的人間の犠牲から商売的犠牲に至るもので、イギリスでさえ啓蒙の人間は商売の人間を打ち倒して　ー　奴隷売買を廃止したのである。ドイツは将来のヨーロッパの教養課程の山脈の源泉として、そのミューズの山々と共にますます大きく高く伸びて、仕舞いには大地を梢で囲み、実らせることだろう」(S.915)

「今の地上にはもはや火鏡の明かりはなくて、日中の明かりがある。(中略) 従ってヨーロッパでは、風習ではなく　ー　これは容易に腐る　ー　理念であるもの、どのぼろ紙にも記載されてあるものは、沈んでいくことはない。新しい地球は、本によって、昔の地球のように立法家に依存することは少なくなって、それ故単にすべて天才達の大きなバネによってのみ、生来自由に対して燃え上がり著述する天才達によってのみ動かされており、それ故不滅の抵抗を行う」(S.1006)。

ジャン・パウルは『美学入門』で聖人を描くことは聖人であることに匹敵する、あるいは後世に教えをたれる点で聖人であることに勝るとまで主張している。「人類に、倫理的、理想的性格を一人、聖者として残していくことは、聖列に加えられる値があることであるし、そのような性格の人そのものを、現実に所有したよりも、他の人間たちにとっては、しばしば、さらになお有益なのである」(『美学入門』古見日嘉訳 251 頁 Bd.5.S.219)。同じように『薄明』では、将軍を描くことは将軍であるよりも偉いと考えているようである。「ミルトンやヴァルトマンと共に私も喜んでこう信じている。偉大な行為を描くことは (つまりそれにふさわしく) その行為を遂行するのと同じほどに崇高なことであり、作家と英雄との間に違いはないか、あっても少しである、と」(S.937)。他にも「この面を考えれば、英雄を描くには、英雄であるよりも時にもっと力を必要とするであろう」(S.971f.)。

「シェークスピアが将軍達を描いたとき、その原像よりも若干多く力を有していた。いずれにせよこの原像達の仕事は俳優の仕事同様に短い瞬間と、副次的俳優の共演とに依存しているのである。偉大なソフォクレスがそのアンティゴネ故にサモス島での将軍職を得たとき、これは単に周知のように二度とこれ以上のものはない彼の仕事への報酬であった。アイスキュロスが自分の墓石に詩人としての名声ではなく戦争の功績を記させたとき、これはひょっとしたら謙虚さ故であったろう」(S.974)。

それ故作家は君主に匹敵するものであり、共同統治、摂政にふさわしいものでもある。当時の文脈では上からの改革に賛成する意見であろう。(もっとも、作家は必ずしも聖人たりえないし、政治家たりえないという見方もある。不立文字の禅は別にしても、一囚人の身代わりに処刑を願い出たコルベ神父はそれについて書く作家とは問題にならない。また文は人なりといっても、名文家は必ずしも立派な人ではなく、名文家と実像の落差は『巨人』の登場人物のロケロルを含め、ジャン・パウルのテーマでもある。また本のマイナス面もジャン・パウルは承知している。本の毒についてはコラーの『巨人』論「像、本そして演劇」1986 年参照)。

「モンテーニュは述べている (第二巻、第三十四章)、すべての大将方はいつもある特定の作家を愛読した、アレクサンダーはホメロスを　ー　スキピオ・アフリカヌスはクセノフォンを　ー　マルクス・ブルートゥスはポリュビオスをカール五世はフィリップ・ド

・コミーヌといった具合である、と。これに近世ではカール十二世のクルティウス、ナポレオンのオシアン（少なくとも以前はそうである）、フリードリヒ二世のヴォルテールが加わる。フリードリヒ二世はほとんどサンスーシ宮、あるいはベルリンをヴォルテール埠頭にしてしまった。動乱の大将が執筆の翼兵達の方を見て、倣うのであれば、より平穏な侯爵は、この作家達をもっと見守るべき理由と時間を有するように思われる。（中略）

フリードリヒ二世によれば、作家は観客の支配者であって　ー　従ってかつて侯爵が征服し、従えたよりも大きな観客の支配者なのであれば、　ー　どの支配の君主も自分と同等の者に対してもっと名誉正しく振る舞い、すべての作家達、その職務の者達の安寧についてその共同統治者と協議すべきであろう。共同統治は　ー　時代によって　ー　立法権を有し、支配権は執行権を有する」（S.997）。これは「侯爵のためにほとんど無償で知らせる新たな使節団員の提案」の章で述べられていることであるが、これは作家の活用を提案したものである。上からの改革を目指すもので、同じように「天才達の上級試験委員会」もこれは理論的天才ではなく、実用的天才、政治的エリートの育成を目指す提案である。（他に「政治家としての学者」参照（S.1023））。

上からの改革は革命を経験していないドイツに特有な現象といえるが、同様なことはカントの「永遠平和のために」でも見られる。カントは永遠平和のために「共和的な体制」の必要を説くが、その結論はいささか奇妙である。「だから国家権力にかかわる人格の数、すなわち支配者の数が少なければ少ないほど、そして支配者が代表する国民の数が多ければ多いほど、国家体制はそれだけ共和的な体制の可能性に近づくのであり、漸進的な改革をつうじて、いずれは共和的な体制にまで高まることが期待できるのである。このためこの唯一法的に完全な体制に到達する可能性がもっとも高いのは君主制であり、貴族性では実現が困難になり、民主制では、暴力による革命なしでは、実現不可能なのである」。（中山元訳、光文社 172 頁）

ジャン・パウルは戦争を美化することはしないが、ただ戦争の夜の魅力に着目することはある。「ローマ人とカルタゴ人が、自分達の下で地震が起きていることに気付かずに大地の上で戦ったのは、崇高である。ムティナの近郊でマルィア兵団の老兵達が二つの別の老兵の兵団に近寄って、五つのティロの歩兵達をより純粋に戦うために退去させて　ー　年老いた英雄達のこの二つの軍勢が、雄叫びも上げずに黙って死の天使のように互いに虐殺し、相手に対する殺戮の天使となって　ー　それから暗黙の約束で疲れた武器を数分間使わずにいて　ー　そして両軍が最後にようやく引き上げ、それぞれの軍が自分の半分を死体として残しているのは、更に崇高なことである」（S.976）。しかし続けて戦争のマイナス部分を述べており、引用したこの部分だけ強調するのは妥当ではないが、啓蒙の明かりと夜の部分を対比させると以上のようなことになる。

３．戦争と平和

一貫してジャン・パウルは「戦争に対して宣戦布告」（S.959）しているのであるが、イロニーの名手だけに、戦争を評価しているように見える場合がある。例えば『平和の説法』ではこう述べている。「戦争は人類を強壮にする鉄剤治療である、それも戦争を率いる部分ではなく、戦争に苦しむ部分を強める。戦争の衝撃は日々の憂いの長い苦しみが食い尽くす諸力を目覚めさせる。平和の中で市民は容易に軟弱に弛緩して這いつくばり、危険に

対して爆弾に備えるように単に舗石や高い屋根を剥ぎ取ったり、軟らかい肥やしを撒いたりして防ぐ。しかし戦争は武器を持たない市民を圧倒的力と無法とで決闘に強いて、いかなるときも男らしい心臓と目を要求し、より大きな危険を示してより小さな危険に備えさせる。より強力な勇気は突入や切り込みではなく、持久力で証明されるので、まさに戦争では武器を持たない市民が武器を有する市民よりも多くその勇気を必要とするというか受け継ぐ」(S.913)。また『薄明』でも「戦争は　ー　それが良きものならば　ー　耕し、種を蒔く」(S.942)と述べている。「春秋に義戦なし」と反論したくなる。またジャン・パウルは観念的な戦争反対論者でもない。「勿論クロプシュトックでさえも、自由なスイスが、あるいはタタール人に倫理的ヨーロッパが襲われることになれば、最も荒々しい戦争による傷と炎への自分の賛同を述べなければならないだろう」(S.960)。

しかし別な箇所では明瞭に述べている。「戦争の毒に治癒力があるとする信仰は、単に新たな威勢のいい民族によって圧迫されたり受胎させられたりした衰亡の民族の歴史にその真実性を置いているにすぎない」(S.969)。先の論を論駁するような論の展開も見られる。「偉大な民族は単に偉大な人間の許でのみ生ずる。ある偉大な観念、一つの律法は民族を戦争の年月よりも発展させる。プロイセンの王国は短い戦争によって、戦争の中で形成されたのではなく、この短い[七年の]戦争の背後で、戦争にもかかわらず、長い平和によって形成されたのである」(S.965)。

映画「第三の男」での台詞に五〇〇年のスイスの平和は鳩時計を作ったにすぎないという言葉があったが、ジャン・パウルはスイスの平和を肯定的に見ている。「平和を愛するスイス人はオーストリアやフランスに対するその稀有の勇敢さを長い戦争から得たのであろうか、それともむしろ祖国愛から得たのではないか。　ー　革命下の女々しい不慣れな戦争の新参者達にとって勝利の力を創ったのは、最初の遠征であったろうか、それともむしろ自由の炎ではなかったか。極めて長い平和そのものは、スイス人の例が示すように、利己的に臆病に軟弱にすることはなく、仮死状態の国家に炎のような観念で息吹きを送らず、国家を孵化することのない統治方法が軟弱にする。専制的オリエントは永遠の戦争と同時に永遠の無気力の中で暮らしている」(S.965)

以下も同様に平和の力を称えている。「偉大な男達は大抵自由の広場、受難の学校、学問的平和の学校で育ってきた、戦争の学校では育たなかった。ソクラテスは戦争に参加して初めて、三十人の暴君や毒杯に抵抗する術を学んだのではなかった」(S.970)。

「真の勇気は劣等な民族や善良な民族、新兵やそれどころか動物に対して浪費された戦時の勇気や負傷の反抗心ではなく、平和時や家庭内、王座の前、長い不幸に際しての勇気である」(S.973)。

以上は一般的な戦争と平和についての思弁であるが、具体的ナポレオンとの戦争についての評価は次のようなものであろう。「古来のものを我々は我々の戦闘よりも先に失ってしまった、しかし新しいものは毒というよりは解毒剤であって、ツィンマーマンによると医師は軍司令官の性を多く有しなければならないとすれば、軍司令官は医師の性を有していたということである。衰亡の憲法の中では衰亡の縦坑の中と同様にすでにこっそりと新しい金鉱脈がまた付着していたのである。その中では我々の世界市民的センスと我々の文学は最も素晴らしいものである」(S.885f.)。そのコスモポリタン的センスで見れば、「従ってヨーロッパにおけるドイツの戦争は常に内戦である、もっともより高い意味では人間

の地上の戦いはどれも国の人々同士の内戦である」(S.887)。

４．ドイツ人とフランス人

ジャン・パウルは特に『薄明』ではゲルマン人（ドイツ人）とガリア人の比較を行っている。学問的に厳密なものとは言えないが、当時の人間が自分の民族や他の民族をどのように考えていたか参考になる。若干意外な感じのするものもある。特にジャン・パウルはドイツの文芸をフランスの文芸よりも高く評価していて興味深い。「我々が文芸や誠実さでは浮き彫りであり、政治と生活の敏活さでは沈み彫りであって　ー　ちょうど逆にフランス人は後者では浮き彫り模様の宝石であるけれども、　ー　対立する長所を近づければこの長所の向上と和合になるかもしれないのである」(S.890)。

「ドイツ文芸に対するフランス人の批評には、我々が学問の分野で戦場同様の敗北を認めたがらないという厚かましい苛立ちが見られる」(S.946f.)。

「この点では我々は我々の多感な長編小説に、フランス人がその軽薄な長編小説に負うよりも多くを負うている。我々の長編小説は生命の木について教える、フランス人の長編小説はせいぜい認識の木について教える」(S.901)。

（日本では概してドイツ文学よりもフランス文学が質量ともに上回っているイメージがある。高名な仏文出身の作家・評論家が独文出身の作家・評論家よりも多いせいもあろう。アマゾンの和書検索ではドイツ文学は 6333 件、フランス文学は 10479 件、ジュンク堂の検索ではドイツ文学 559 点、フランス文学 986 点 2009 年 4 月 12 日現在)。

その代わりフランス人は政治的にすぐれている。

「昔の倒されることのないフランス人との対比においてすでに、彼らにあっては裁判での雄弁さ、一般的な、国王達さえも操縦する意見、あらゆる新奇なものへすぐに燃え上がる熱狂、機知の閃光的力、この機知の電気的に決定的な、しばしば極を反転させる効果は少なくとも精神的影響に有効で、　ー　つまりかの以前のフランス人に対してすでに我々は我々の政治的機械仕掛けの点で遅れていた」(S.911)。

「このすべてが我々を鳥の駝鳥に似たものにしてしまったのである。この鳥は強い胃を有するが、しかし翼は小さい。このドイツ人の厄災は時代の例や結果、我々が詩作に熱狂するように政治に熱狂する[フランス]国民の間近さや影響を打ち破るのに役立つことになろう」(S.912)。

言語の面からの分析は説得的であるように思われる。

「すでにアーデルングがそのドイツ語の正書法の第二版でドイツ人の強壮さ故にその子音が多い、例えば同志[Genossen]の代わりに昔は Chinothzsson と言ったと述べているのである」(S.938)。

「フランス人の神は瞬間や外観、小部分の神である。万事が彼らの攻撃や勝利のように素早い、万事が彼らの綜合文のように個別で短い。それ故彼らは作品よりも思いつきを愛する。ひょっとしたらこの外観に対するセンスのために彼らはより良い外科医とより劣等な医師を有するのかもしれない。彼らは芸術の個別のものを把握するが、全体は余り把握しない。それ故彼らは機知や英雄的対立、人生の要約の簡潔な図書という個別のものを求める。それ故彼らは現在の音によってではなく、単に過去と未来によってのみ理解される音楽に向いていない」(S.940)。

ジャン・パウルは古代ドイツ人を評価しているが、特に時に放恣な飲食をしながらも、純潔で、年を取ってから女性と交わった点を強調している（Vgl.S.899）。

「すべての強力なもの、北方的なものは晩成である、頭脳から木々に至るまで」（S.942）。

またドイツ人は将校に若者を抜擢せず、よぼよぼになった将軍を用いると批判している（S.944）。ドイツ人の冗長さも批判の対象である。「 我々ドイツ人はすべてを長ったらしく、長時間、退屈に話す。我々はレーゲンスブルクでしばしば高い書類の山を必要としてきたが、それは単に二つの母音を、つまり然り[ja]を発するためにすぎない。三つの母音、然り[oui]を遣うフランス人達は、直に終わっていた」（S.943）。

少しばかり意外に思える特徴もある、しかしその結論は「変わりやすいドイツ人」が「変わらない」と矛盾していないだろうか。。

「ひょっとして我々兵站係、荷物運搬人からフランス人が見習っている長所の一つに我々の逃げ足、軽快さ、しばしばの移り気というものがあろう。（中略） これに対置すべきは、我々ドイツ人という曲芸師、エーテルの綱渡り師、我々ヨーロッパの瞬時の塩[機知]、帝国共同体から帝国共同体に至る輪廻者である。余りに固定した耐火性のフランス人に対する我々の判断でさえ、我々は一世紀のうちに五回変えている。ルイ十四世のときの我々の判断、それからルイ十五世のときに変えた判断、それから国民会議のときにまた変えた判断、それからコミューン会議のとき、それから最後にナポレオンのときに変えた判断を考えてみるといい。一方十六歳のフランス人は今の九十歳のフランス人とは大して変わらず我々のことを話すであろうし、これについては私は勿論称賛の方がより多くて、追従はより少ないだろうと予想している」（S.949f.）。

デ・ブロインによると「永遠の平和の可能性を彼は（カントと共に）ただ世界国家にのみ見ていた。その指導にはナポレオンは問題にならなかった。というのは民主的に戦争と平和に付いて採択されるべきときには、政体として許されるのは勿論共和制だけだからである。そうしてはじめて『倫理と政治との、人間愛と祖国愛との醜い衝突』[S.962]は止むことになろう」(Günter de Bruyn:Das Leben des Jean Paul Friedrich Richter. Fischer. S.291f.)。しかし事はそう単純ではない。『薄明』では世界国家の「君主」にジャン・パウルはドイツ人を推挙している。「我々の世紀では法と理性の君主制以外の君主制は考えがたく、両半球に今にも降りかかる雷雲は生じないであろうけれども、いつか我々の神以外の宇宙君主が、あるいは動物どもを考えて人間以外の宇宙君主が必要ということになったら、ここで宇宙と呼ばれる地上に対して願いたいことは、それがドイツ人の宇宙君主であって欲しいということであろう。というのはドイツ人の多面性、世俗感覚、コスモポリタン主義は最高の王座に最も適するであろうからである」（S.1012）。またナポレオンに対しても『薄明』の時期にはある程度期待しているように見える。「しかしながら単に国家ではなく、諸国家を、単に家臣ではなく、その侯爵をも自分の力の援軍に有してきたある精神は、自国よりも外国の方がむしろ許しているこれまでの権力感情の享受を永遠の平和の中で断念するに当たって、自分が兵士の代わりに使節を送り、血によってではなく、インクによって、時代と敵対者を変えていく以外にはほとんど方法がないであろうし（そのように見える）」（S.1008f.）。「ある精神」というのは文意からいってナポレオンのことを指していると思われる。

『美学入門』ではフランス人の文芸の比較をよく行っており、一般的な性格の比較より

も学的に興味深い。（以下引用は古見日嘉訳『美学入門』白水社）

「フランス人たちの言語の明確さは、その比喩的でない機知、あるいは「はねかえり」（Reflexion)の機知のおかげであり、また、彼らの機知は、言語の明確さのおかげなのである。フランス語における、単なる関係の en は、機知上の利益を大いにフランス人に与えていないだろうか」（202 頁第四十五節、同じく Bd.5. S.176)。（私見であるが、Reflexion の訳は普通に反省、内省、思弁でいいのではないかと思われる）。

「英国人とドイツ人とは、比較にならないほど多分に譬喩の機知を持ち合わせ、フランス人は多分に「はねかえり」の機知を持っている。というのは、「はねかえり」の機知は、より社交的だからである。譬喩の機知にたいしては、空想はまず幅広の帆を張ってやらなければならない。このことは、客間では、半ばは余り長くなりすぎ、半ばは余りに重くなりすぎる」（215 頁第五十節、S.188）。

「フランスでは国民が機知に富み、わが国では精鋭の士がそうである。しかし、そうである、というまさにこの理由で、わが国の芸術上での精鋭たちの方が、はるかに機知に富み、そして、フランスの精鋭たちの方が、より劣る。というのは、われわれ及び英国の機知の持ち主たちは、国民を扇動する必要がないからである。行動にあたっては最も活発で、激情的で、落度の多い国民たちが　ー　フランス人とイタリア人とが　ー　まさに、詩作にあたっては、活発さ、劇場の度合いがより少なく、正確さの度合いがより多い。生活上で冷厳な国民たちが　ー　ドイツ人と英国人とが　ー　まさに、著作にあたっては、いっそう強烈に燃えたち、いっそう大胆な像をあえて試みる」（229 頁第五十四節、S.200）。（私見では、「国民を扇動する」は「空想を示す」ではないかと思われる）。

「これらの短詩については、ほんの景物的な注意を施そう。ギリシア人はわれわれ近代人よりもはるかに苦痛の叫び、この袖珍悲歌に関して豊富であり、そのことはいわばギリシア人の悲劇における堪能さを示す印である。フランス人たちの感嘆詞は大多数われわれのものより短い。アー（ah）（われわれはアッハ）　ー　フィ(fi)（われわれはプフイ pfui であり短い諷刺詩である）　ー　エー(aih)（アウ・ヴェー Au　Weh）　ー　パルブレ[ル]ー（parbleu）（ポッツタウゼント potztausend）　ー　エラー（Hela）（ライダー leider）　このことは、フランス人たちが、この最も短い芸術作品においてすらも、われわれがあらゆる芸術作品にそうであるほどには限りなく委曲を尽くすことをしない、ということのまた一つの実例なのである」（314 頁第七十五節、S.275）。

「『巨人』の第四巻においてすでに講師が述べました通り、フランス人と女性とはお互に生まれながらの社交家として似通っており　ー　従って両者は、革命から推察できるように、非凡に優雅で温和であるか、あるいは非凡に残酷であるか、この二つのいずれかであり　ー　更に、フランス人の悲劇は同様に残忍・冷酷であるのみならず、冷酷・残忍、ないし度はずれて残酷でもあるのであります。　ーー　そしてこれは、何に由来するものでありましょうか。並ならず繊細な社交生活の精神に由来するものであり、この精神は、そのメルポメネの短刀を、極寒のさ中の最も堅い氷を素材にして、鍛えて研ぐので、この短刀は、傷がつくほど刺すことができ、次に、傷の中で融けて流れ、その傷を冷やして致命的なものにいたします」（395 頁、S.343f.）。

５．出版の自由

本を啓蒙の明かりとして掲げるジャン・パウルにとって、検閲の自由、出版の自由は重要なことであろう。いかがわしい証拠は数が多ければ信頼されるものになるとか(S.1014f.)、パスクイーノとしてのナポレオン(S.1014)といった諷刺を活用して時に婉曲に、時に直截に言論の自由のために論を展開している.

「政治的自由のためには出版の自由が必要である。この点でも戦争は、これは出版、新聞、手紙、郵便、これらを押さえ込んで自らを守らなければならないが、これらの緊急の措置を他の悪徳同様平和に持ち込んではならないだろう」(S.892)

「侯爵達よ、歴史を顧みるといい。市民達に愛されるのは、どのような非難をも許す侯爵達を措いてない。プロイセンの国王達のことを考えてみるといい」(S.949)。

「プロイセンの印刷された晒し台は名誉の神殿の階段となった」(S.981)。

「報道の自由/　どの国家も意見、つまり政治的宗教的意見の検閲官として、ドン・アントニオ・デ・ウリョアの言うコイバの蜘蛛を思い出すべきであろう、この蜘蛛は攻撃したとき潰してしまうと致命的毒を与えるのであるが、皮膚から単に吹き払うと害を与えないのである」(S.982)。

あとがき

学生のころは政治向きの考察をするとは思いもしなかったけれども、ジャン・パウルに引かれて、文学者は身辺の微細な観察から、森羅万象、政治家、君主の心得にまで思索が及ぶということを知るようになりました。ジャン・パウルの政治的論考の有効性はともかくとして、現在から逃避しない態度は見ならうべきものがありましょう。

この翻訳は昨年の『再生』に続き、九大リポジトリでの二回目の公開になります。大学は便利とは言えない地に移ったものの、便利な発表手段があるものだと喜んでおります。

ラテン語に関しては科学史家の高橋憲一先生のご教示を得ました。感謝申し上げます。

2009 年 6 月　　恒吉法海